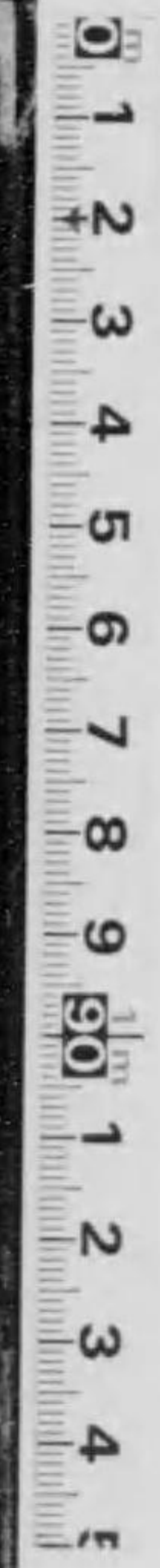


423  
220

覽總行銀會

編會究研濟經本日



始





# 覽總行銀金

編會究研濟經本日

大正  
15. 6. 22  
内交

會驗試總覽

日本經濟研究會印

## 序

その力にあらずして重き甲冑を着くれば護身の具が却て足手纏ひとなり實戦に及ばずして地に塗るゝはいふまでもなし、銀行業者としては、輪換の美や計數の大は願はしき事柄なるも、此道具立てに餘り重きを置くときは、甲冑共倒れの轍を踏むこと近年内地や臺灣等の斯業者間に起りし幾多の事件が何よりの證據なり、然れば右の道具立を離れて否な以上に銀行の運命を左右する更に重要な何物かの存在すること疑ひなく、而して其の何物かを明示せんとする所に編者努力の第一目標を窺ひ得るが如し。

山は其高きが故に尊からず樹植の汎きを利すとすいへる俚言あり、この山のサビを禮讃せる精神は取りも直さず銀行業者の咀嚼すべき一要件なるは多言を待たざる所なるが、銀行自體のサビの程度は元より年所の経過を要するも、必ずしも其の経過の長短と比例せざる事が他の世相と趣きを異にせる興味ある點なるが如し。又河の用は其の廣きにあらずして其の深きにありといふ古諺の如く、斯業の態様も恐らく其の間口の廣きよりも興行の深き所に強味もあり綽々たる餘裕も存する次第にして、幽齋公の詠歌の精神に「いひのこしたるはよし、いひおほせぬはあしきなり」とあるは、實に財界の大任を有する金融業者頂門の指針にして、一舉一動此の如きユトリありてこそ緊緩常なき財界波瀾の調節指導に堪ゆる譯なるべし。而して編者の趣旨も如上諸の程度如何、興行の深さ如何といふ事を表示せんことを以て本書編述の第二の目標となせしや知るべし。

信は萬業の基にして斯業の經營に於て殊に其意義深きを覺ゆる次第なるが、しかし信用なるものは賣るべきものにあらずして買はるべきものなること、是れ多くの價値が主觀的に定まる場合と其の趣きを異にする特長ともいふべきか、而して本書が其の客觀的對象を列擧して明細を極めたるは頗る多き所なり。

余固より斯業に就て何等の造詣なし、唯だ編者の努力と熱心に敬意を表し其の懇囑に従ひ巻頭に一言を挾むて其の責を塞ぐと云ふ而已。

洛東南禪寺にて

野村徳七

# 緒言

凡そ經濟社會に於ける金融事業の地位は、恰かも人體を循環せる血液にも等しく、其の運行疏通の如何に依つて、經濟社會の死活を分岐すべき重要な地位に處するものであることは今更だ言を要しない所である。

而して我國金融事業の發達は僅々三十年の短期間に於て長足の進歩を來し、殊に歐洲戰爭以來驚くべき伸張振りを示した事は世人周知の事實として我金融史上に特筆銘記せらるべきである。即ち大正十四年末現在に於ける全國銀行總數は一千六百六十餘行、此の公稱資本實に二十四億三千餘萬圓、總預金高百十億五千萬圓の巨額に達してゐる、誠に旺んなる哉の叫びを禁じ能はないのである。

併しながら一步驟つて各銀行個々の内容に立ち入り精細なる數字的討究を試むるならば、反動期以後に於ける實績に徴して未だ必ずしも健全なる實質を有するものとは稱し得ないもの多かるべき事も亦覆ひ難き事實であらうと思はれる。歐戰好況期を一劃期として、各銀行内容が如何なる推移變遷を來したか、これを數字的統計的に比較研究するを以て本書の有する第一使命とする。

量と質との相併せざるは偏頗的進化であつて、未だ以て完全なる發達と稱し得ない如く、輪換の美、計數の大を目して直ちに内容實質を強大なりと爲すは誤れるの太だしきものと云はねばならぬ。巨資を擁するものにして實質の甚だ脆弱なるあり、貧弱なる資本力にして尙且つ牢固故く可らざる内容を有するものあるは其の實例決して乏しからず、殊に資本力に比例する事業を營み得る事業會社と異り、求むべからずして與へらるべき處の無形の信用を唯一の資本とする銀行業に在りては、此の「信用」の前には巨萬の資本と雖も時に瓦礫に等しき場合なしとは斷せられないのである、此れ資本力と實質と相伴はざる所以であり銀行業と事業會社との性質を異にする所以である。本書が各銀行に備はれる對社會的信用程度の輕重を量定し、これを主要資料として比較論評せんことに深甚の努力を拂ひたる真意亦實に此に存するのである。

若し夫れ信託事業に至つては其の組織的創設極めて戦近の事に屬するを以て未だ尙ほ眞價を發揮するに至らずと雖も、其の職能とする處は銀行業と自から別個の色調を有し、其の分野必ずしも相廻せざるが故に、斯業の前途頗る洋々たるものあるべく、吾人は多大の期待を繋ぐものである。

余はこれ一介の操縦者、元より金融事情に通ずるの道理なく、況んや銀行實務に對して何等の經驗なく造詣なし。只天性來數字統計に幾分の興味を有するに且つ多少新業に對する見聞の貯へあるを叙述し、足らざるは是れを直接經營者に照合補足し以て兎も角も一零を纏め上梓するを得た譯であるが、要するに素人の銀行參觀記に過ぎないのであるから特にこれを諒とされたい。若し本書が斯業發達の上に幾干かを資する處ありとすれば是は編者外の光榮とする所である。只だ最後に一言したきは一般財界の現狀に鑑み、云ひ度き多くの毒舌は特に口を緘して一切これを骨抜きとした點に對し、大方の御諒察あらん事を切望に堪へない。

終に臨み煩しき照會事項に對し各銀行當事者が種々の便宜を與へられ以て本書完成の上に寄せられた好意を深く感謝すると同時に、印刷部其他の已むを得ざる事情の爲めに豫定の期日に刊行し得られなかつた怠慢の罪を陳謝する次第である。

大正十五年四月下浣

日本經濟研究會編輯局にて

編者識

## 凡例

- 一、本書収録する所は同種を銀行事業、後述を信託事業とて各事業の沿革、發達の経緯を叙述し、而して現に内地、北海道、朝鮮、關東州及樺太に於て經營されつゝある各種銀行並に信託會社編々の營業内容全般を詳記し且つ事業成績比較表を添付して一覽の便に供したり。
- 二、現在全國銀行總數一千六百六十餘行中資本金壹百萬圓以上を有するもの五百三十餘行を採録し、これを特殊銀行、普通銀行、貯蓄銀行の三類に分列し各所別に収録せり。
- 三、各銀行配列の順序は預金高の順位に従ひ、貯蓄銀行及ビ「アロー」等は適宜順位を變更し、信託會社は適宜配列したり。
- 四、特殊銀行中朝鮮、朝鮮殖産、臺灣、北海道拓殖及各府縣農工銀行等は各該府縣の別に配列せしめたり。
- 五、各銀行毎に添附せる營業成績年次比較表は何れも單位以下を省略するを以て合計數を併合せざるものあるべきを併し録し。
- 六、營業成績其他主として大正十四年上半期末現在の數字に從ひたれども照會事項に對する回答不備等の爲め十三年度末現在に從るもの少なからず、且つ成績表其他不備の銀行あり、それらは原を重なるに從ひ完全を期すべし。

全銀行總覽目次

總論

- 第一章 銀行業の沿革 (一)
- 幕政時代の金融事情：第一期 準備時代 (二)
- 民間銀行勃興：中央銀行設立建議：第二期 整理時代 (三)
- 特殊銀行の設立：國立銀行の整理：第三期 爛熟時代 (四)
- 歐戰と對外貿易：對外債務償還と正貨激増：通貨流通高 (五)
- 第二章 歐戰前後金融大觀 (六)
- 銀行資本状態：預金貸出状態：銀行事業消長：反動期に於ける取付騒ぎ：關東大震災火災と金融界 (七)
- 第三章 十三年中の金融界 (八)
- 復興資金需要と入超激増：全國銀行營業狀況 (九)
- 第四章 手形交換の現況 (一〇)
- 全國交換高比較：不渡手形の消長 (一一)
- 第五章 銀行業の現況 (一二)
- 特殊銀行の現況 (一三)
- 普通銀行の現況 (一四)
- 銀行條例改正の急務：最近の事業概況：最近手形交換高：不渡手形増減比較：銀行減配問題 (一五)
- 市銀行如何：地方銀行の實狀：營業者の意向 (一六)
- 第六章 銀行合同の實況 (一七)
- 歐米の合同實狀：本邦銀行合同の趨勢 (一八)
- 第七章 各銀行別營業成績總覽 (一九)
- 1、特殊銀行總論 (二〇)
- 日本銀行 (二一)
- 日本勸業銀行 (二二)
- 日本興業銀行 (二三)
- 2、東京府總論 (二四)
- 安田銀行 (二五)
- 三井銀行 (二六)
- 第一銀行 (二七)
- 川崎銀行 (二八)
- 三菱銀行 (二九)
- 三井物産銀行 (三〇)
- 三和銀行 (三一)
- 三友銀行 (三二)
- 三井物産銀行 (三三)
- 三井物産銀行 (三四)
- 三井物産銀行 (三五)
- 三井物産銀行 (三六)
- 三井物産銀行 (三七)
- 三井物産銀行 (三八)
- 三井物産銀行 (三九)
- 三井物産銀行 (四〇)
- 三井物産銀行 (四一)
- 三井物産銀行 (四二)
- 三井物産銀行 (四三)
- 三井物産銀行 (四四)
- 三井物産銀行 (四五)
- 三井物産銀行 (四六)
- 三井物産銀行 (四七)
- 三井物産銀行 (四八)
- 三井物産銀行 (四九)
- 三井物産銀行 (五〇)
- 三井物産銀行 (五一)
- 三井物産銀行 (五二)
- 三井物産銀行 (五三)
- 三井物産銀行 (五四)
- 三井物産銀行 (五五)
- 三井物産銀行 (五六)
- 三井物産銀行 (五七)
- 三井物産銀行 (五八)
- 三井物産銀行 (五九)
- 三井物産銀行 (六〇)
- 三井物産銀行 (六一)
- 三井物産銀行 (六二)
- 三井物産銀行 (六三)
- 三井物産銀行 (六四)
- 三井物産銀行 (六五)
- 三井物産銀行 (六六)
- 三井物産銀行 (六七)
- 三井物産銀行 (六八)
- 三井物産銀行 (六九)
- 三井物産銀行 (七〇)
- 三井物産銀行 (七一)
- 三井物産銀行 (七二)
- 三井物産銀行 (七三)
- 三井物産銀行 (七四)
- 三井物産銀行 (七五)
- 三井物産銀行 (七六)
- 三井物産銀行 (七七)
- 三井物産銀行 (七八)
- 三井物産銀行 (七九)
- 三井物産銀行 (八〇)
- 三井物産銀行 (八一)
- 三井物産銀行 (八二)
- 三井物産銀行 (八三)
- 三井物産銀行 (八四)
- 三井物産銀行 (八五)
- 三井物産銀行 (八六)
- 三井物産銀行 (八七)
- 三井物産銀行 (八八)
- 三井物産銀行 (八九)
- 三井物産銀行 (九〇)
- 三井物産銀行 (九一)
- 三井物産銀行 (九二)
- 三井物産銀行 (九三)
- 三井物産銀行 (九四)
- 三井物産銀行 (九五)
- 三井物産銀行 (九六)
- 三井物産銀行 (九七)
- 三井物産銀行 (九八)
- 三井物産銀行 (九九)
- 三井物産銀行 (一〇〇)

- 3、大阪府總論 (二四)
- 大阪農工銀行 (二五)
- 住友銀行 (二六)
- 三十三銀行 (二七)
- 山口銀行 (二八)
- 加島銀行 (二九)
- 近江銀行 (三〇)
- 藤田銀行 (三一)
- 鴻池銀行 (三二)
- 大阪野村銀行 (三三)
- 藤本ビルプロローカ銀行 (三四)
- 大阪貯蓄銀行 (三五)
- 日本信託銀行 (三六)
- 播磨銀行 (三七)
- 尾州銀行 (三八)
- 富田銀行 (三九)
- 國分銀行 (四〇)
- 大阪實業銀行 (四一)
- 和泉銀行 (四二)
- 川上銀行 (四三)
- 岸和田銀行 (四四)
- 和泉貯蓄銀行 (四五)
- 日本相互貯蓄 (四六)
- 4、京都府總論 (四七)
- 丹後商工銀行 (四八)
- 高木銀行 (四九)
- 5、兵庫縣總論 (五〇)
- 兵庫縣農工銀行 (五一)
- 三十八銀行 (五二)
- 第六十五銀行 (五三)
- 西宮銀行 (五四)
- 神戸岡崎銀行 (五五)
- 五十六銀行 (五六)
- 淡路銀行 (五七)
- 澁野實業銀行 (五八)
- 百三十七銀行 (五九)
- 志筑銀行 (六〇)
- 中播銀行 (六一)
- 栗原銀行 (六二)
- 神戶銀行 (六三)
- 姫路商業 (六四)
- 博識銀行 (六五)
- 加古川銀行 (六六)
- 社銀行 (六七)
- 東播銀行 (六八)
- 柳城銀行 (六九)
- 北條銀行 (七〇)
- 龍野銀行 (七一)
- 加西銀行 (七二)
- 北條銀行 (七三)
- 網干銀行 (七四)
- 岩見銀行 (七五)
- 上郡銀行 (七六)
- 西脇商業銀行 (七七)
- 五十五銀行 (七八)
- 豐岡銀行 (七九)
- 東淡銀行 (八〇)
- 淡州貯蓄銀行 (八一)
- 6、愛知縣總論 (八二)
- 信達銀行 (八三)
- 本宮銀行 (八四)
- 山八銀行 (八五)
- 白川商業銀行 (八六)
- 郡山銀行 (八七)
- 福島貯蓄銀行 (八八)
- 郡山商業銀行 (八九)
- 7、岩手縣總論 (九〇)
- 盛岡銀行 (九一)
- 第九十銀行 (九二)
- 岩手銀行 (九三)
- 三陸銀行 (九四)
- 岩手縣農工銀行 (九五)
- 宮古銀行 (九六)
- 花卷銀行 (九七)
- 盛岡貯蓄銀行 (九八)
- 8、秋田縣總論 (九九)
- 秋田貯蓄銀行 (一〇〇)
- 9、青森縣總論 (一〇一)
- 第五十九銀行 (一〇二)
- 青森商業銀行 (一〇三)
- 泉山銀行 (一〇四)
- 津輕銀行 (一〇五)
- 青森銀行 (一〇六)
- 階上銀行 (一〇七)
- 鳴海銀行 (一〇八)
- 東奥銀行 (一〇九)
- 10、山形縣總論 (一一〇)
- 第四十八銀行 (一一一)
- 羽後銀行 (一一二)
- 仙北銀行 (一一三)
- 11、山形縣總論 (一一四)
- 兩羽銀行 (一一五)
- 鶴岡銀行 (一一六)
- 山形商業銀行 (一一七)
- 米澤商業銀行 (一一八)
- 東銀行 (一一九)
- 羽前長崎銀行 (一二〇)
- 楯岡銀行 (一二一)
- 山形貯蓄銀行 (一二二)
- 12、栃木縣總論 (一二三)
- 足利銀行 (一二四)
- 鹿沼銀行 (一二五)
- 宇都宮銀行 (一二六)
- 下野銀行 (一二七)
- 下野實業銀行 (一二八)
- 栃木銀行 (一二九)
- 栃木縣農工銀行 (一三〇)
- 喜連川銀行 (一三一)
- 矢板銀行 (一三二)
- 下野産業銀行 (一三三)
- 茂大銀行 (一三四)
- 鳥山銀行 (一三五)
- 黒羽銀行 (一三六)
- 下毛貯蓄銀行 (一三七)
- 13、群馬縣總論 (一三八)
- 上毛實業銀行 (一三九)
- 伊勢崎銀行 (一四〇)
- 群馬銀行 (一四一)
- 群馬縣農工銀行 (一四二)
- 中條銀行 (一四三)
- 上毛貯蓄銀行 (一四四)
- 14、山梨縣總論 (一四五)
- 第十銀行 (一四六)
- 有信銀行 (一四七)
- 15、長野縣總論 (一四八)
- 第六十三銀行 (一四九)
- 第十九銀行 (一五〇)
- 中信銀行 (一五一)
- 長野農工銀行 (一五二)
- 小諸銀行 (一五三)
- 佐久銀行 (一五四)
- 信濃銀行 (一五五)
- 百十七銀行 (一五六)
- 長野實業銀行 (一五七)
- 上伊那銀行 (一五八)
- 依田銀行 (一五九)
- 榮銀行 (一六〇)
- 長野貯蓄銀行 (一六一)
- 16、新潟縣總論 (一六二)

- 愛知縣農工銀行 (一四)
- 名古屋銀行 (一五)
- 明治銀行 (一六)
- 村瀬銀行 (一七)
- 尾三銀行 (一八)
- 愛知農商銀行 (一九)
- 伊藤銀行 (二〇)
- 岡崎銀行 (二一)
- 額田銀行 (二二)
- 日本貯蓄銀行 (二三)
- 中津銀行 (二四)
- 知多銀行 (二五)
- 衣浦銀行 (二六)
- 碧海銀行 (二七)
- 稻澤銀行 (二八)
- 北設樂銀行 (二九)
- 大野銀行 (三〇)
- 尾張貯蓄銀行 (三一)
- 7、静岡縣總論 (三二)
- 駿河銀行 (三三)
- 三十五銀行 (三四)
- 遠州銀行 (三五)
- 伊豆銀行 (三六)
- 沼津銀行 (三七)
- 遠江銀行 (三八)
- 御厨銀行 (三九)
- 濱松銀行 (四〇)
- 二俣銀行 (四一)
- 濱松商業銀行 (四二)
- 静岡銀行 (四三)
- 静岡商業銀行 (四四)
- 安倍銀行 (四五)
- 熱海銀行 (四六)
- 島田銀行 (四七)
- 掛川銀行 (四八)
- 駿遠銀行 (四九)
- 濱松貯蓄銀行 (五〇)
- 8、神奈川縣總論 (五一)
- 左右田銀行 (五二)
- 第二銀行 (五三)
- 渡邊銀行 (五四)
- 神奈川縣農工銀行 (五五)
- 平沼銀行 (五六)
- 鎌倉銀行 (五七)
- 9、埼玉縣總論 (五八)
- 武州銀行 (五九)
- 第八十五銀行 (六〇)
- 所澤銀行 (六一)
- 深谷銀行 (六二)
- 飯能銀行 (六三)
- 秩父銀行 (六四)
- 埼玉農工銀行 (六五)
- 忍商業銀行 (六六)
- 鴻巣銀行 (六七)
- 大宮商業銀行 (六八)
- 板戸銀行 (六九)
- 西武銀行 (七〇)
- 川越渡邊銀行 (七一)
- 10、千葉縣總論 (七二)
- 安房合同銀行 (七三)
- 第九十八銀行 (七四)
- 總武銀行 (七五)
- 上總銀行 (七六)
- 千葉縣農工銀行 (七七)
- 野田商勝銀行 (七八)
- 東葛銀行 (七九)
- 大野銀行 (八〇)
- 千葉貯蓄銀行 (八一)
- 11、茨城縣總論 (八二)
- 五十銀行 (八三)
- 常磐銀行 (八四)
- 茨城農工銀行 (八五)
- 多賀銀行 (八六)
- 茨城貯蓄銀行 (八七)
- 12、宮城縣總論 (八八)
- 七十七銀行 (八九)
- 東北實業銀行 (九〇)
- 宮城商業銀行 (九一)
- 五城銀行 (九二)
- 宮城縣農工銀行 (九三)
- 白石商業銀行 (九四)
- 仙臺興業銀行 (九五)
- 13、福島縣總論 (九六)
- 福島農工銀行 (九七)
- 第百七銀行 (九八)
- 三春銀行 (九九)
- 會津銀行 (一〇〇)
- 第百一銀行 (一〇一)
- 郡山橋本銀行 (一〇二)
- 安達實業銀行 (一〇三)
- 福島銀行 (一〇四)

- 中澤銀行 (七五)
- 泰昌銀行 (七六)
- 永樂銀行 (七七)
- 西脇銀行 (七八)
- 幸西銀行 (七九)
- 不動貯金銀行 (八〇)
- 川崎貯蓄銀行 (八一)
- 日進銀行 (八二)
- 東京貯蓄銀行 (八三)
- 田中銀行 (八四)
- 金原銀行 (八五)
- 東京商業銀行 (八六)
- 富倉銀行 (八七)
- 高砂商工銀行 (八八)
- 高田農商銀行 (八九)
- 東京山口銀行 (九〇)
- 東京山中銀行 (九一)
- 大阪府總論 (九二)
- 大阪農工銀行 (九三)
- 住友銀行 (九四)
- 三十三銀行 (九五)
- 山口銀行 (九六)
- 加島銀行 (九七)
- 近江銀行 (九八)
- 藤田銀行 (九九)
- 鴻池銀行 (一〇〇)
- 大阪野村銀行 (一〇一)
- 藤本ビルプロローカ銀行 (一〇二)
- 大阪貯蓄銀行 (一〇三)
- 日本信託銀行 (一〇四)
- 播磨銀行 (一〇五)
- 尾州銀行 (一〇六)
- 富田銀行 (一〇七)
- 國分銀行 (一〇八)
- 大阪實業銀行 (一〇九)
- 和泉銀行 (一一〇)
- 川上銀行 (一一一)
- 岸和田銀行 (一一二)
- 和泉貯蓄銀行 (一一三)
- 日本相互貯蓄 (一一四)
- 4、京都府總論 (一一五)
- 丹後商工銀行 (一一六)
- 高木銀行 (一一七)
- 5、兵庫縣總論 (一一八)
- 兵庫縣農工銀行 (一一九)
- 三十八銀行 (一二〇)
- 第六十五銀行 (一二一)
- 西宮銀行 (一二二)
- 神戸岡崎銀行 (一二三)
- 五十六銀行 (一二四)
- 淡路銀行 (一二五)
- 澁野實業銀行 (一二六)
- 百三十七銀行 (一二七)
- 志筑銀行 (一二八)
- 中播銀行 (一二九)
- 栗原銀行 (一三〇)
- 神戶銀行 (一三一)
- 姫路商業 (一三二)
- 博識銀行 (一三三)
- 加古川銀行 (一三四)
- 社銀行 (一三五)
- 東播銀行 (一三六)
- 柳城銀行 (一三七)
- 北條銀行 (一三八)
- 龍野銀行 (一三九)
- 加西銀行 (一四〇)
- 北條銀行 (一四一)
- 網干銀行 (一四二)
- 岩見銀行 (一四三)
- 上郡銀行 (一四四)
- 西脇商業銀行 (一四五)
- 五十五銀行 (一四六)
- 豐岡銀行 (一四七)
- 東淡銀行 (一四八)
- 淡州貯蓄銀行 (一四九)
- 6、愛知縣總論 (一五〇)
- 信達銀行 (一五一)
- 本宮銀行 (一五二)
- 山八銀行 (一五三)
- 白川商業銀行 (一五四)
- 郡山銀行 (一五五)
- 福島貯蓄銀行 (一五六)
- 郡山商業銀行 (一五七)
- 7、岩手縣總論 (一五八)
- 盛岡銀行 (一五九)
- 第九十銀行 (一六〇)
- 岩手銀行 (一六一)
- 三陸銀行 (一六二)
- 岩手縣農工銀行 (一六三)
- 宮古銀行 (一六四)
- 花卷銀行 (一六五)
- 盛岡貯蓄銀行 (一六六)
- 8、秋田縣總論 (一六七)
- 秋田貯蓄銀行 (一六八)
- 9、青森縣總論 (一六九)
- 第五十九銀行 (一七〇)
- 青森商業銀行 (一七一)
- 泉山銀行 (一七二)
- 津輕銀行 (一七三)
- 青森銀行 (一七四)
- 階上銀行 (一七五)
- 鳴海銀行 (一七六)
- 東奥銀行 (一七七)
- 10、山形縣總論 (一七八)
- 第四十八銀行 (一七九)
- 羽後銀行 (一八〇)
- 仙北銀行 (一八一)
- 11、山形縣總論 (一八二)
- 兩羽銀行 (一八三)
- 鶴岡銀行 (一八四)
- 山形商業銀行 (一八五)
- 米澤商業銀行 (一八六)
- 東銀行 (一八七)
- 羽前長崎銀行 (一八八)
- 楯岡銀行 (一八九)
- 山形貯蓄銀行 (一九〇)
- 12、栃木縣總論 (一九一)
- 足利銀行 (一九二)
- 鹿沼銀行 (一九三)
- 宇都宮銀行 (一九四)
- 下野銀行 (一九五)
- 下野實業銀行 (一九六)
- 栃木銀行 (一九七)
- 栃木縣農工銀行 (一九八)
- 喜連川銀行 (一九九)
- 矢板銀行 (二〇〇)
- 下野産業銀行 (二〇一)
- 茂大銀行 (二〇二)
- 鳥山銀行 (二〇三)
- 黒羽銀行 (二〇四)
- 下毛貯蓄銀行 (二〇五)
- 13、群馬縣總論 (二〇六)
- 上毛實業銀行 (二〇七)
- 伊勢崎銀行 (二〇八)
- 群馬銀行 (二〇九)
- 群馬縣農工銀行 (二一〇)
- 中條銀行 (二一一)
- 上毛貯蓄銀行 (二一二)
- 14、山梨縣總論 (二一三)
- 第十銀行 (二一四)
- 有信銀行 (二一五)
- 15、長野縣總論 (二一六)
- 第六十三銀行 (二一七)
- 第十九銀行 (二一八)
- 中信銀行 (二一九)
- 長野農工銀行 (二二〇)
- 小諸銀行 (二二一)
- 佐久銀行 (二二二)
- 信濃銀行 (二二三)
- 百十七銀行 (二二四)
- 長野實業銀行 (二二五)
- 上伊那銀行 (二二六)
- 依田銀行 (二二七)
- 榮銀行 (二二八)
- 長野貯蓄銀行 (二二九)
- 16、新潟縣總論 (二三〇)

- 第四銀行……(三五)……長岡銀行……(三六)……六十九銀行……(三七)……百三十九銀行……(三八)……新瀉銀行……(三九)……小千谷銀行……(四〇)……村上銀行……(四一)……長岡商業銀行……(四二)……村上市銀行……(四三)……長岡貯蓄銀行……(四四)……行……(四五)……今町銀行……(四六)……長岡貯蓄銀行……(四七)……
- 23、富山縣ノ部……(四八)……高岡銀行……(四九)……十二銀行……(五〇)……富山商業銀行……(五一)……岩瀨銀行……(五二)……越中銀行……(五三)……永守銀行……(五四)……神澤銀行……(五五)……伏木銀行……(五六)……富山銀行……(五七)……氷見銀行……(五八)……新瀉銀行……(五九)……入善銀行……(六〇)……坂海銀行……(六一)……
- 24、石川縣ノ部……(六二)……北陸企業銀行……(六三)……來谷銀行……(六四)……吉田銀行……(六五)……能登銀行……(六六)……尾商工銀行……(六七)……良川銀行……(六八)……小松銀行……(六九)……能登商業銀行……(七〇)……田鶴濱銀行……(七一)……福井銀行……(七二)……大和田銀行……(七三)……第九十一銀行……(七四)……二十五銀行……(七五)……敦賀銀行……(七六)……三方銀行……(七七)……嶺南銀行……(七八)……
- 26、岐阜縣ノ部……(七九)……大垣共立銀行……(八〇)……美濃銀行……(八一)……飛騨銀行……(八二)……七十六銀行……(八三)……飛騨產業銀行……(八四)……中津川銀行……(八五)……吉田倉庫銀行……(八六)……
- 27、滋賀縣ノ部……(八七)……八幡銀行……(八八)……百三十三銀行……(八九)……江頭農產銀行……(九〇)……滋賀縣農工銀行……(九一)……栗太銀行……(九二)……蒲生銀行……(九三)……甲賀銀行……(九四)……滋賀合同貯蓄銀行……(九五)……
- 28、三重縣ノ部……(九六)……三重縣農工銀行……(九七)……百五銀行……(九八)……四日市銀行……(九九)……勢南銀行……(一〇〇)……松坂銀行……(一〇一)……津農商銀行……(一〇二)……紀南銀行……(一〇三)……
- 29、奈良縣ノ部……(一〇四)……六十八銀行……(一〇五)……吉野銀行……(一〇六)……產業銀行……(一〇七)……奈良縣農工銀行……(一〇八)……御所銀行……(一〇九)……八木銀行……(一一〇)……
- 30、和歌山縣ノ部……(一一一)……紀陽銀行……(一一二)……

- 銀行……(一一三)……新宮合同銀行……(一一四)……伊那合同銀行……(一一五)……高芝銀行……(一一六)……鳥取縣ノ部……(一一七)……大正鳥取銀行……(一一八)……米子銀行……(一一九)……山陰銀行……(一二〇)……山陰實業銀行……(一二一)……
- 32、島根縣ノ部……(一二二)……松江銀行……(一二三)……八束銀行……(一二四)……雲陽銀行……(一二五)……石州銀行……(一二六)……安來銀行……(一二七)……和栗銀行……(一二八)……
- 33、岡山縣ノ部……(一二九)……岡山銀行……(一三〇)……第一合同銀行……(一三一)……山陽銀行……(一三二)……岡山縣農工銀行……(一三三)……山陽商業銀行……(一三四)……中備銀行……(一三五)……白生銀行……(一三六)……合同貯蓄銀行……(一三七)……
- 34、廣島縣ノ部……(一三八)……廣島縣農工銀行……(一三九)……廣島銀行……(一四〇)……可部銀行……(一四一)……廣島產業銀行……(一四二)……吳銀行……(一四三)……福山銀行……(一四四)……三次實業銀行……(一四五)……三共銀行……(一四六)……廣島合同貯蓄銀行……(一四七)……
- 35、山口縣ノ部……(一四八)……宇部銀行……(一四九)……華浦銀行……(一五〇)……防府銀行……(一五一)……
- 36、德島縣ノ部……(一五二)……德島銀行……(一五三)……阿波商業銀行……(一五四)……關西銀行……(一五五)……阿波農工銀行……(一五六)……二木銀行……(一五七)……
- 37、香川縣ノ部……(一五八)……高松百十四銀行……(一五九)……綾歌銀行……(一六〇)……琴平銀行……(一六一)……
- 38、高知縣ノ部……(一六二)……高知商業銀行……(一六三)……高陽銀行……(一六四)……
- 39、愛媛縣ノ部……(一六五)……愛媛銀行……(一六六)……今治商業銀行……(一六七)……大洲銀行……(一六八)……西條銀行……(一六九)……内子銀行……(一七〇)……愛媛縣農工銀行……(一七一)……今出銀行……(一七二)……八幡濱商業銀行……(一七三)……伊豫銀行……(一七四)……宇和島銀行……(一七五)……卯之町銀行……(一七六)……三津濱銀行……(一七七)……伊豫三島銀行……(一七八)……伊豫貯蓄銀行……(一七九)……
- 40、九州總論……(一八〇)……

- 二十三銀行……(一八二)……大分銀行……(一八三)……大分縣農工銀行……(一八四)……豐前銀行……(一八五)……日田實業銀行……(一八六)……日田銀行……(一八七)……大分商業銀行……(一八八)……下毛銀行……(一八九)……
- 41、福岡縣ノ部……(一九〇)……嘉穂銀行……(一九一)……鞍手銀行……(一九二)……三池銀行……(一九三)……生吉銀行……(一九四)……田主丸銀行……(一九五)……實業銀行……(一九六)……福間住吉銀行……(一九七)……福岡貯蓄銀行……(一九八)……
- 42、佐賀縣ノ部……(一九九)……古賀銀行……(二〇〇)……西海商業銀行……(二〇一)……伊萬里銀行……(二〇二)……鹿島銀行……(二〇三)……相互銀行……(二〇四)……
- 43、長崎縣ノ部……(二〇五)……佐世保商業銀行……(二〇六)……長崎銀行……(二〇七)……長崎縣農工銀行……(二〇八)……佐世保銀行……(二〇九)……長崎貯蓄銀行……(二一〇)……殖産銀行……(二一一)……西州銀行……(二一二)……波佐見銀行……(二一三)……長崎高木銀行……(二一四)……
- 44、熊本縣ノ部……(二一五)……天草銀行……(二一六)……芥州銀行……(二一七)……九州銀行……(二一八)……
- 45、宮崎縣ノ部……(二一九)……宮崎銀行……(二二〇)……宮崎農工銀行……(二二一)……都城銀行……(二二二)……佐土原銀行……(二二三)……日向銀行……(二二四)……
- 46、鹿兒島縣ノ部……(二二五)……鹿兒島銀行……(二二六)……鹿兒島商工銀行……(二二七)……南薩銀行……(二二八)……鹿兒島勸業銀行……(二二九)……三州平和銀行……(二三〇)……
- 47、北海道金融略史……(二三一)……北海道拓殖銀行……(二三二)……百十三銀行……(二三三)……北海道銀行……(二三四)……泰北銀行……(二三五)……北門銀行……(二三六)……絲屋銀行……(二三七)……樺太銀行……(二三八)……
- 48、臺灣ノ部……(二三九)……臺灣商工銀行……(二四〇)……華南銀行……(二四一)……彰化銀行……(二四二)……朝鮮殖産銀行……(二四三)……朝鮮總論……(二四四)……
- 49、朝鮮總論……(二四五)……朝鮮殖産銀行……(二四六)……漢城銀行……(二四七)……朝鮮商業銀行……(二四八)……大同銀行……(二四九)……
- 50、關東州總論……(二五〇)……滿洲銀行……(二五一)……大連商業銀行……(二五二)……

信託事業篇

第一章 總論……(二五三)……  
 信託の起源……(二五四)……米國の實狀……(二五五)……恐るべき威力……(二五六)……  
 第二章 本邦信託業の實狀……(二五七)……  
 制度の確立……(二五八)……現存信託會社……(二五九)……金銭信託期間延長問題……(二六〇)……田大蔵次官の聲明……(二六一)……  
 第三章 信託會社別營業成績……(二六二)……  
 東京府……(二六三)……  
 三井信託株式會社……(二六四)……國際信託株式會社……(二六五)……織田信託株式會社……(二六六)……日本勸業信託……(二六七)……大信託信託……(二六八)……東京信託……(二六九)……第一信託……(二七〇)……朝日信託……(二七一)……  
 大阪府……(二七二)……  
 關西信託株式會社……(二七三)……安田信託株式會社……(二七四)……住友信託株式會社……(二七五)……北攝信託……(二七六)……萬成信託……(二七七)……北攝信託……(二七八)……  
 其他府縣……(二七九)……  
 日下部信託……(二八〇)……神戸信託……(二八一)……濟生信託……(二八二)……勤業信託……(二八三)……日華合同信託……(二八四)……大和信託……(二八五)……眞野信託……(二八六)……名古屋信託……(二八七)……仙臺信託……(二八八)……青森信託……(二八九)……北陸信託……(二九〇)……南海信託土地……(二九一)……大正興業信託……(二九二)……  
 增補欄……(二九三)……  
 信託協會組織變更……(二九四)……三菱信託設立……(二九五)……讀賤信託設立……(二九六)……新瀉信託計畫……(二九七)……新設計畫續出……(二九八)……住友信託重役更迭……(二九九)……  
 信託協會全國大會……(三〇〇)……  
 銀行局長演說……(三〇一)……米山會長演說……(三〇二)……

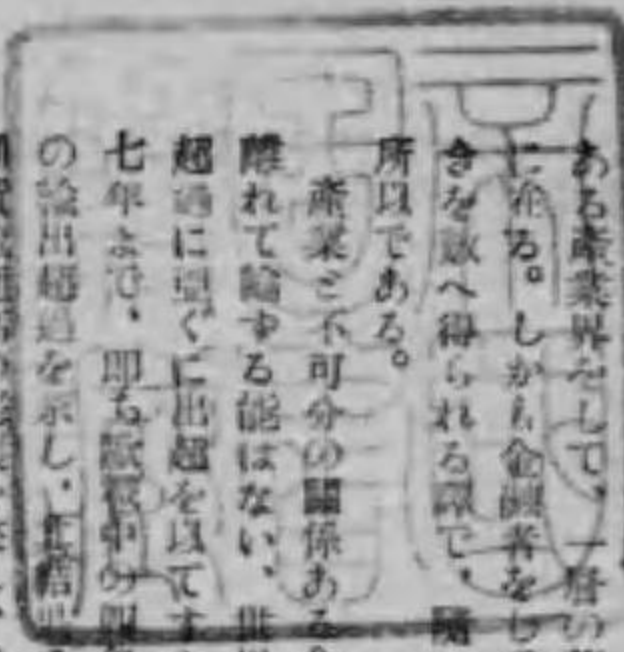
全國銀行總覽目次終

全銀行事業總覽

日本經濟研究會編

總論

一國の産業が隆盛に赴けば必然的に金融も發達し、金融が圓滑でなければ産業の發達は到底望まれない、即ち産業の盛衰と金融の消長とは不可分の關係を有してゐる所以である。



産業と不可分の關係ある金融事業は、當然又貿易關係とも離れて論ずる能はない、世界大戰當時の我對外貿易は、輸出超過に因りて出超を以てするの好調を保持し、大正四年から七年まで、即ち歐戰中が四年間に於て、實に十四億八百萬圓の輸出超過を示し、正貨として正貨の増増となり、隨つて通貨流通高の膨脹を來し、通貨の膨脹は又必然的に物價の騰貴を促す譯であるが、それと同時に一般世人の購買力を削減するが故に、これに伴つて産業の復興——即ち事業熱の旺盛と云ふ現象を來すのであるから各種事業の計畫されるもの殆んど底止する處を知らず三つた有様、隨つて銀行業者は盛んに資金の供給を行ひ、全く無制限に貸出しを敢行してゐたかの感さへ抱かしたのである、後年に至つて怖るべき禍ひの發生する事をも考慮せず、無暗矢野に財布の紐を緩めて居た事は、堅實を信託すべき金融業者として甚だ輕率であり、大膽なる通り方であつた云ふはなほなほ、而も其當時の有頂天時代には、前途の成り行きを考へて居る暇なく、只眼前の金利を獲得しやう事以外に考へ及ばなかつたのは、誠に是非もない次第であつた、併しなから此の世界戰爭時代に於て、我國銀行業者の實力を充實し信用を發達せしめたことには驚くべきものであつて、我金融事業界に印したエポックメイキングとして産業の上に眞に特筆大書すべきである、ここに疑ひを挟み得ないのである。

試みに歐戰當初の大正三年から休戰後の反動期たる大正九年末までの全國銀行資金狀態を一瞥する。(單位千圓)

年次 特種銀行 普通銀行 合計

年次	特種銀行	普通銀行	合計
三年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
四年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
五年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
六年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
七年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
八年	1,000,000	1,000,000	2,000,000
九年	1,000,000	1,000,000	2,000,000

是れに依て見れば大正三年頃の十億圓を越したる預金高が九年には實に四十八億の巨額に達し其の預金増勢は甚だしく急激を極めてゐる、而して貸出、有價證券も亦だしく増増し、就中貸付金の如きは預金の十割近くを貸出してゐるに徴するも、銀行の實力が如何に充實し、其信用が如何に深廣であつたかを知らしむるに同時に、事業界の著しい發展の跡を測知することが出来る、が併し乍ら此の如き貸付金の巨額に達した事實即ち受入金額の殆んど全部を貸出し、手許僅かに幾分の資金を積立金を餘すに過ぎない云ふが如き放漫な貸付を敢行する事が、銀行事業として、果して萬全を策した經營方法である云ひ得べきか否か、甚だ疑問すべきではなからうか、彼の好況時代に於て此點に留意し、豫分が慎重の態度を持し營業政策に心を加へて居たならば當然來るべき反動期に際會しても、彼の如き大損毀、大醜態を演ぜず、餘裕裕然として其の難關を切り抜け得られたであらうと思はれる、然も既往は之を追ふべからず、今後に備ふるの策を完全ならしむるに肝要であるが、并は自ら別個の問題として見ても今日の隆盛を來した銀行業者が、其の過去に於て如何なる道程を經過したか、如何にして隆盛され如何に培育され、而して如何なる試験を経て大成したか、我國經濟界の變遷推移と金融事業發展の経路とを説くべきであるが、徒らに過去を追想するは因循にして消極的であり退嬰的であるが故に、沿革史の如きは、及ぶ限り之を省略し、主要數字に依つてのみ發達の速度を研究して見たいと思ふ。

# 第一章 本邦銀行事業の沿革

## 1. 幕政時代の金融状態

我國に於ける金融事業を精細に研究すれば、其の沿革は可なり古いのであるが、所謂近代の信用機關や貨幣制度を中心とする金融が出現したのは、實に明治維新（西曆一八六八年）以後の事である。維新前即ち徳川幕府時代には、勿論其の時代の要求として幕府の政事及び財政組織に關連した相當の金融機關はあつたのであるが、而も今日の銀行とは全く趣きを異にしたものであつて、結果たる金融機關としての体を爲さなかつたのである。即ち此時代の租税は物品税も納すべき米納で、金納は極めて少く、僅かに役金、買入金納、御用金等の名目に依つて徴せられた。幕府及び諸藩の歳入は其の過半まで米納であつた。隨つて等諸種の物品は幕府及諸藩の役人の手に握つて販賣せられ、一種の官營事業の如き状態であつた。民衆の範圍は極めて制限せられ、唯僅かに小賣商のみが商人の手に握られたに過ぎない。有様であつたが故に、金融の主要部分は即ち幕府又は諸藩の金融とも稱すべきものであり、所謂蔵元、御用金は御上の指圖に従つて委託販賣の商及金融に當つたのみである。併し此當時に於ても民間に在りて御爲替組、或は掛屋、大兩替屋、小兩替屋等西の間に其の名を異にして貧窮ながらも金融を業務とするものは少くなかつたのである。此くして慶應三年十月、將軍徳川慶喜大政を奉還するに及び王政復古して明治と改元せられたが、當時明治政府の財政状態は甚だ窮乏を極めたもので、政府は不徳無恥即ち大官札を發行して此の窮乏を填補するのを得、一方廢減に歸した諸藩に在りても各領内に數百種の藩札は行はれてゐた。他方にも金貨流出し、爲替は異常の損害を蒙らねばならぬ状態であつたので、政府は應急の第一着手として明治元年四月商法司を設けたが僅かに一年にして廢止し、同年二月新たに通商司を設け其の監督の下に通商會社及爲替會社を起させた。これ即ち我國銀行の嚆矢なのである。爾來爲替會社は商業上重要な地に組織せられ東京、大阪、神戸、天津、新潟、漢口、八箇所に堺、雲仙、一州、其他にも本社又は出張所を置いて經營大いに努めたが業績何れも振はず、明治四年遂に通商司は廢止せられ、五ヶ年間に於て八千萬圓の不換紙幣を發行し來れる爲替會社も其の特權を喪失し解散の已むなきに至つたのである。これより愈々銀行事業の本論に入る譯であるが、これを研究すべく便宜上三期に區別して研究の歩を進める。即ち第一期は準備時代であり、第二期は整理時代、第三期を獨強時代として大別する事が出来る。以下此順序に従つて記述して行くであらう。

## 2. 第一期 準備時代

**國立銀行創設** 明治四年、故伊藤博文公が英國の銀行制度を視察して歸り之を我國に適用すべく建議した結果、同五年十一月國立銀行條例が制定され同六年に至つて初めて第一の銀行が創設された。此の銀行は、

- 一、金融を便宜にする事
- 二、國立銀行、諸會社の資力を充實する事
- 三、金利を低減する事
- 四、中央銀行を設立し行務整理の日に至つては大藏省事務中銀行に托して弊害なきものは分ちて之に附する事
- 五、外國手形割引の事

以上の如き理由を以て中央銀行設立の建議を爲し、明治十五年六月二十七日、日本銀行條例の制定を見るに至り、同時に創立委員の任命があつて、資本金一千万圓半額を政府が引受け、半額を一般公募に附して直ちに滿株となり十五年十月十日營業を開始する事となつた。これと同時に政府の對銀行政策を變更し、國立銀行條例の改正を行ひ兌換發行を日本銀行に統一する事とし名實共に中央銀行たるの機能を發揮せしむる事に努め、新しく國立銀行は遂に紙幣發行權を失ひ漸次普通銀行に變じ日本銀行を中心として重に商業資金の供給に従事する所謂商業銀行たるに至つたのである。

是より先き明治十二年十一月設立許可されたものに横濱正金銀行がある。即ち當時漸く隆盛ならんことを對外貿易の發達助成を期する意味を以て計画されたもので、設立の目的は正貨を以て貿易を助け、通貨を以て内國金融の便を圖り内外相互の金融を調節して貿易の便利を計る云ふに在り、資本金三百萬圓中銀貨百萬圓を政府に出資し、一般株式に對しては二百萬圓中五分一だけを銀貨出資し、五分四は紙幣拂込を許す事となつてゐた。これ即ち同銀行が前述の目的以外に、當時銀貨が從らば銀紙の價値が異常に高騰して、從つて貿易に少なからず不利を招いて居たのでこれが救済の實を擧げんが爲め、銀の取引を行はしめて價格引下げを行はん考へを有してゐたからである。取られる。

斯くの如くにして我國金融体系は、さにかく形式だけでも整へることが出来た譯で、明治十四年頃七十行に過ぎなかつたものが二十六年には六百二十八行に増加し、其の資本も九百萬圓から一億三千六百餘萬圓に達し、まさに四倍の増加を來したのである。

而してこれと同時に零細預金を吸收する目的の下に設立された貯蓄銀行の發達も徐々其の歩武を進め、二十三年八月貯蓄銀行條例制定せられ二十六年七月より之が實施を見るに至つたが、其當時の行數二十三行、此の拂込資本五十五萬九千圓の多數に達したのである。

## 3. 第二期 整理時代

**特殊銀行創設** 金融事業の準備時代は以上の如くして其の完備を見、著々として進境の著しきものあつたが、明治二十七年に至つて、我國最初の對外戦争、即ち日清戦役が依つて我國金融界は大なる洗滌を受ける事となつた。此の戦役を経済的に觀るならば二十七年下期から二十八年に亘る凡そ十八ヶ月間に於て支出した軍費二億餘圓に上つたのであるが、一方當時に於ける我銀行實力は總資本九千九百五十七萬圓

一より第五までの國立銀行開業を見たのである。同條例の主要點とする處は、民間金融の便を計る爲め同條例の下に設立する銀行に對して政府は紙幣の發行權を與へる事にした點であるが、其實豫期の成績は華がらなかつた。これ制度の不備な爲で、即ち初めは資本金の四割を金貨で準備し居て紙幣の引換をせねばならなかつたが、何分政府紙幣が濫發され金の紙の差が激しくなつて常に取付られ勝て到底やり切れなくなつた。其處で明治九年條例の改正を行ひ公債を以て政府に供託し、それと同額の紙幣を受け取つて貸出資金に充當し二割を引換準備として政府紙幣を留保すれば宜しき事になり發行手續も容易になつたので國立銀行は遂に設立されるに至つた。

然るに其の結果として紙幣發行高の著しき膨脹となり、漸く銀行濫發の弊に陥らんに至つたので十年十二月政府は再び條例を改正し隨行設立資本及紙幣發行額に尙大藏大臣の許可を経る事とし、更に十一年の改正で國立銀行の發行すべき紙幣總額を三千四百四十二萬餘圓に限定したのである。此間は國立銀行發達の時代であつて、明治六年七月以降同十二年十二月迄の間に銀行數百五十三行、紙幣發行高三千四百五十餘萬圓に達したのであるが、其れ等銀行は政府の財政政策運用上から特殊の立法手段に依りて起れる一種の特權即ち個別的に銀行紙幣を發行し得る發行銀行であつて、然るたる商業金融機關、即ち普通銀行と稱すべき性質のものでなかつたのであるから、此處に當然時代の要求として起らねばならぬ機運の到來したが、國立に對する私立銀行でなければならぬ。

**民間銀行勃興** 勿論私立銀行も國立と同様に明治四年末頃より類同銀行營業と共に大藏省に出願するもの百以上に及び、就中三井組、三和等の銀行が數百萬圓の資本を擁し、巨額にして財界の支配權を掌握して、名稱は異にするも其の實は國立銀行と相稱して消長を争つたものもないでは無かつたが、而も尙ほ未だ銀行條例に基いて普通銀行は出現しなかつたのである。然るに明治八年八月、國立銀行條例の改正により種別銀行會社も銀行名を使用し得る事となつたので、先づ東京に三井銀行が設立され民間銀行の濫發を作つたのであるが、尙ほ當時は國立銀行の設立にのみ熱中するの風があり普通銀行は比較的開却されてゐたのである。それが明治十二年に至り急よ國立銀行設立に制限を加へる、それが及ぶ、此處に民間の資本は轉じて普通銀行に傾けられ、尙一轉じて普通銀行熱は遂に勃興し始め、十三年中に三十九行の多數が設立されたのである。

而して一面不換紙幣たる政府及銀行紙幣流通高は西南戦役急激に増加を來し、一億六千萬圓以上に達し其の結果紙幣價值の下落甚しく、十四年の如きは紙幣打歩は一圓金貨に對して最高九十三錢最低六十二錢、同銀貨最高七十九錢五厘、最低六十二錢に下落し爲めに諸物資の騰貴を見、一般經濟界の活況を呈したのであるが、而も其結果は諸相場の高騰甚しく商業取引は常に擾亂され平衡を保つて困難であるのみならず、人心は投機思惑に走り財界の起伏甚しき處を知らず云ふ状態に陥り、政府は此の經濟的不安より離脱するの途は不換紙幣の銷却整理を敢行するの他なしとして、明治十一年頃より著手したのであるが、其の結果、紙幣の膨脹に伴ふ貿易の運勢、正貨の流出等相交錯して財界に反動を與へ、金

總額金一億千五百萬圓に過ぎなかつた。のみならず當時の金融界は今日の如く海外市場と自由なる交渉をせず、殆んぞ孤立的状態に墜ちて臨時財政が我金融界に與へた打撃は頗る多大であつた。故に各銀行業者は鋭意資金の回収に努め從つて金利は騰貴するまであつたが爲に株式市場の動搖も對外貿易は少なからず混亂状態を顯現するの已むなきに至つたのである。が併し過去の準備時代に於て兎も角も比較的堅實なる基礎工事を施し來れる金融界は此の突發的恐慌に際するも何等驚く程の感震を蒙らず、此の難關を切り抜けることが出来たのである。既にして戦役終了と共に對外貿易も舊に復し所謂戦後繁榮と目すべき産業の隆興、各種金融業の勃興よりして資金の需要盛んとなり金融市場亦頗る擴大するに至つたが三十年には其の反動を叫ばれ各種事業界に慘狀を呈現し財界一般に不況の域を脱し得なかつた。然るに三十二年一億圓の外債成立して正貨の流入を見るに及んで再び活況を呈し、三十三年にかけて遂に金融界の繁榮を見るべき成果を擧ぐべしと觀測されたが貿易尙ほ振はず就中對清貿易殆ん全社絶の狀にあり、加ふるに生糸の不況、北清事變等の直接原因に依つて急激なる反動に遭遇し、爲めに我金融界は大動亂の狀となり、各地銀行の破綻も遂に三十四年春季の大恐慌を醸成し、同年十二月阪本第九銀行の支拂停止を導火線として九州各地に起つた取付は東京横濱等を始め關東地方にも及び就中大阪に於ける騒ぎは最も激烈であつた。即ち同年三月先づ北村銀行の支拂停止に次いで四月には七十九銀行亦破綻し恐慌は全市に波及して取付の厄に遭ひしもの總て八行、其他奈良、郡山、京都、丹波、紀伊、伊勢、三河を始め四國地方まで或は取付に遭遇し或は支拂停止せるもの凡そ二十餘行に達し、實に關西地方全部に及んで未嘗有の大恐慌を來したのである。此の爲に日本銀行始め其他有力な大銀行等が相協力して救済に支出した金額七百萬圓に達した云ふに徴しても、其の慘害の如何に猛烈であつたかを窺知し得るのである。

これと相前後して國立銀行處分問題が生じたのであるが、二十九年三月同處分法律公布せらるゝや其の多くは何れも私立銀行に改めて營業を繼續し三十二年に至つて從來隆盛を極めて來た國立銀行も遂に全く其の跡を絶つに至つた。

**勸業銀行府縣農工** 而して夫れと同時に日本勸業銀行及府縣農工銀行創設の法律を發せられた。即ち從來の私立銀行並に國立銀行は主として商業上の比較的短期な信用のみに對しての資金供給であつて、農工業等の長期資金を供給するの途は未だ開かれて居なかつた。此の點に鑑みて設けられたのが勸業農工の兩銀行である。前者は全國興業信用の中心機關となり主として大規模の産業資金を供給し、後者は地方的産業の發達に盡すを以て目的とされたものである。

**北海道拓殖銀行** 更に又北海道は内地と事情を異にする關係上特殊の機關を設くる必要ありとして明治三十二年法律を以て北海道拓殖銀行を設立した。即ち其目的とする所は北海道の拓殖事業に資金を供給して其の富源を開發せしめんとするにあつたのである。斯くの如く商業資金供給のみを目的とする銀行以外に比較的長期低利の資金供給を爲す所謂不動産銀行の制度も漸く確立する事となつたのであるが、併し之等は要するに産業發達を促進する爲め主として不動産抵當



で貸付する不動産銀行であるから、擔保物其物の關係上地方  
農工業の金融機關となるのである。

**興業銀行** 而してこれに對し株券其他の動産に對する金  
融機關の必要を生じて來ることも當然で、即ち政府は三十五  
年に至り(一)有價證券取引に關する金融機關の必要なる事、  
(二)工業に對する金融機關の必要なる事(三)一般に外資輸入  
機關の必要が認めらるゝに至つた事(四)信託事業に依つて國  
内産業の振興を助成すべき事等の理由から日本興業銀行を設  
立するに至つたのである。

**殖民地銀行** 更に日清戰役に依る新版圖に歸した臺灣に  
於ける金融機關として明治三十年の法律を以て臺灣銀行を設  
立し、商工業並に公共事業に資金を供給し更に進んで南洋支  
南洋方面に經營範圍を擴張して是等諸國との商業貿易の機  
關たらしめ、又朝鮮に於ては明治四十二年七月韓國銀行條例  
に據り第一銀行の業務を繼承して韓國銀行を設立し、後これ  
を朝鮮銀行と改稱し、朝鮮に於ける銀行券發行の特許を與へ  
中央金融機關として國庫金取扱及貨幣整理事務を行はしめ併  
せて日本政府の爲め國庫金の取扱を爲さしめんとするにあつ  
た、尤もこれは表面上の目的であつて、更に他面には殖民地  
の事情尚ほ安定して居なかつた時代であるから若し如き事  
あつた場合、内地の兌換券の基礎に影響を及ぼす如き事  
りては一大事であるこの懸念もあり、即ち單獨に紙幣發行權  
を與へて各自殖民地中央銀行たらしめたものであると稱して  
も誤りないのである。

以上の如く特殊銀行の中には擴張正金銀行、日本興業銀行、  
日本興業銀行、府縣農工銀行、北海道拓殖銀行、臺灣銀行、  
朝鮮銀行等があるが、其の設立の目的は既述せる如く各それ  
々異なる目的を以て設立されたものであり、其の職分も別然と別然とを以て持たせられたものであり、  
あるにも拘らず、近時著しく其の分野は不明瞭となりつた  
のである。就中、動興銀の兩者間に著しい共通點を認められ  
るに至つた。即ち動興銀は當初地方農工銀行の中央銀行とも  
ふべく地方農工資金の供給を目的とされたにも拘らず、戦後  
於ては都市に於ける不動産若しくは工場財團を擔保して貸付  
を行ふに至り、興業銀行は有價證券に對する金融機關たる使命に  
在りながら之亦工場財團貸付に重きを置く傾向あり、兩者の  
地位は益々接近する傾向がある。殊に動興銀合併案が成立して  
以來、動興銀行法の改正に依つて割増金付債券で得た資金は  
必ず公共的貸付に充てられ、同時に、都市の不動産若しくは工  
場財團に對しては普通債券を發行して資金を得べき事になつ  
たので、工業金融機關としての地位は興業と全く違ふ所がな  
くなつたのであるが、近來工業金融が益々重要視され、工業  
銀行設立の必要が唱道される時代に際し、兩行の主要業務が  
逐次接近しつつあることは疑ひなき事實である。之を以て見る  
も銀行分業は既に或る程度までは破壊され來つたものと觀察  
される。更に臺灣朝鮮兩銀行の如きも其の例證當初は自か  
ら事情を異にしたのであるが依然として單獨發行權を存続  
せしむるの要なく兌換券の發行は總して日本銀行に統一するこ  
も必ずしも不可はないと察せられる。即ち動興合併、臺  
鮮合同論、各所に唱道せらるゝの所以であるが合併論は自  
から別個の問題として暫く後段に譲り、兎に角、日本銀行條  
例の制定から獨立銀行の廢止、特殊銀行設立に依る銀行分業  
制度等、其の變遷を明かにするに共ニ諸制度の改訂を行ひ、

銀行事業の整理を加へられた時代は斯くして経過し、明治三  
十七八年の日露戰役に際して再び此處に大なる試練を與へ  
られたのである。

**日清日露兩度の試練** 日露戰役の講和成立するや滿洲  
地方は確實に我國の勢力範圍となり、邦人の經濟的發展は俄  
かに活躍の好機を得て企業熱は頓に昂進し、大規模の事業計  
畫隨所に起り、當に我國産業革命期を現出し諸會社の増資擴  
張相次いで行はれ三十九年下期に於て總資本金十一億圓に  
達するの好況を示すに至つたが、爾來漸減して四十一年上期  
には五億四千五百萬圓、同下期には一億八千八百萬圓、四十一年  
上期には僅々六十萬圓を算するに過ぎず、之も事業盛衰に伴  
ふ反動の弱來を物語るものであつて、四十一年上期に於て既に  
恐るべき一大パニックは各種事業の上に見舞ひつゝあつたの  
である。即ち四十年一月株式暴落に端を發し終には投資者間  
の恐慌となり、商工業者の破綻する者層を次いで起り、更に  
各地銀行の取付に遭遇せるもの東京外一府十八縣、四十行の  
多きに達し、整理の爲め支拂停止又は閉鎖休業せるもの東京  
府を始め一府八縣二十六行に及び四十二年上期に至つて全く  
金融の梗塞、商工業の沈衰其極に達したのである。が併し同  
年下期より稍や緩慢に傾き四十二年の如きは各銀行共に預金  
貸出日歩引下を行ひしにも拘らず尚ほ事業の勃興を見ず、爲  
に從來五分利公債の据置期間の経過に際して悉く四分利公債に  
書替ふるの案を立て、東西各銀行はシラクターを組織して  
募集に努力した。加之引續き四分利の外債も成立したので  
政府は内外五分利公債の償還を行ふと共に、又餘力を以て整  
理、軍事の各公債を償還したので約一億圓の資金市場に横溢  
し金利は益々低下する云ふ状態であつた。故に各銀行は預金  
は預金の計算法を改めて當座は其日の最低限度に利率を附し  
爲替預りは凡て之を無利率子金とする方針を講ずる等、當業  
者の手許漸く遊資ダブツクの状態であつたが而も尚ほ未だ目  
覺ましき企業方面への活潑は其の片鱗すら認められなかつ  
たのである。

斯くの如く日清日露の兩度に亘る大試練を経験せる我金融  
事業は、内面的には其の實力信用の上に一大整理を加へられ  
内容の充實を餘儀なくせられたるに同時、外面的には  
漸く國際的に交渉を有するに至つた。即ち明治三十三年に於て  
四十分利の英債九千七百萬圓を募集し、更に大正二年には  
約二十億の外資を輸入するに依つて、我國の金融が單に  
貿易上の關係のみに止まらず、種々の方面にまで海外と密接  
の關係を有するに至つた。之が、市中銀行中外國貨幣業務を  
開始するもの次第に其數を加へ、事實上於て國際銀行たる  
の實質を具有するに至つたのであるが、之を詳述するには  
當然其の熱期たる歐洲戰亂の前後に於ける經濟的事情を記  
述する必要がある。即ち以下第三期に筆を進める譯である

### 4. 第三期 燦爛時代

**歐戰と對外貿易** 第一期第一期に於て、比較的緊固な  
基礎を築き得たる我國金融事業は、斯くして第三期の熱  
期に入らんとする。而して之を圓熟せしめたる要素は、實  
に歐洲大戰に於ける對外貿易の盛衰と金融の  
消長とに對不可分の關係に在ること論を俟たず、而して平常

の場合に於ては金融は常に産業界の指導者であり、開發者で  
あるべきが各本來的性質なのであるが、一戰異常の場合、假  
へば戰争其他の事變に依つて一國産業に非常な激變を生じ  
た場合は、寧ろ金融界が之に依つて著しき影響を受ける  
こと反對現象を呈する。即ち歐洲大戰に於ける我國銀行  
業の著しき發展の如きは、全く其の好例證である。銀行の發  
展云ふのは、銀行業の實力充實云ふ事、今一つは金融  
市場の進歩發達云ふ事との兩面を意味してゐるのであつて  
即ち前者は各銀行の資本金、積立金、或は預金、貸出等の數  
字的膨脹であり、後者は資金取引關係の改善を意味してゐる  
のである。勿論兩者は或る程度まで離るべからざる關係に在  
つて、何れを前にし何れを後にすべきではないが、歐戰に依  
る我銀行業への影響は、明かに前者即ち實力増進が先にな  
我國の富力が急激に増進したからである。こと云ふまでもない  
而して富力の増進は當然貿易關係の改善に其の第一歩を發し  
たこと勿論である。試みに大戰勃發後より大正九年末に至  
る年末貿易狀況を見るに次の如き數字を示してゐる。  
(單位千圓)

#### △歐戰中の對外貿易狀況

年次	貿易總額	輸出	輸入	出入超
三年	一、八六、七〇	五、七〇、七〇	一、〇〇、〇〇	四、七〇、七〇
四年	一、四〇、七〇	三、三〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、三〇、〇〇
五年	一、八〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、〇〇、〇〇
六年	二、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、〇〇、〇〇
七年	二、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、〇〇、〇〇
八年	二、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、〇〇、〇〇
九年	二、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	一、〇〇、〇〇	二、〇〇、〇〇

以上の數字は之れを説明するまでもなく一目瞭然たるのみ  
ならず、戰争の進展するに伴ひ輸出超過増加し大正七年末累  
計十四億八百萬圓の輸出を示してゐるが、依りて八年末累  
計して八年九年の兩度に於て四億六千餘萬圓の出入超を結  
局歐戰中に於て差引九億四千五百萬圓の輸出を示した譯であ  
る。

**對外債務償還と正貨の激増** 更に戰争の影響に依つ  
て受け入れた貿易外の國際的受取勘定も亦少くなかつた事  
知らねばならぬ、而して其の主なるものは(一)船舶運賃收入  
(二)海上保險料(三)對外放資の利子等であるが、之等の收入  
額は貿易額の如く正確を期すること素より平穩であるが、廣  
く行はれたる歐戰の觀測に依るに總額は三十三億圓に達したこ  
云はれてゐる。若し之れを以て大過なしとすれば九兆五億の正  
味國際受取勘定は三十二億圓に上つた事となる。然らば是等  
の受取勘定に屬する資金が如何に處分されたかを見るに(一)  
對外債務の償還(二)對外債權の設定(三)政府及日銀の海外手  
持(四)爲替銀行の在外資金等に振向けられた以上は總て内地  
に現送され正貨準備となつたのである。而して右の中對外債  
務の償還及對外債權の設定に振向けられた額は合計十二億九  
千九百萬圓で差引十九億五千五百萬圓は我國に輸送さるべき  
金額であるが尚ほ爲替銀行其他の在外資金充當に約半額を差  
引き、少くも約十億近くの正貨が内地に輸送されたのであ  
る。即ち大正二年末より九年末に至る内地及在外正貨の狀況  
を示せば左表の如し。

#### △歐戰中の正貨在量

年次	總額	内地	海外
三年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
四年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
五年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
六年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
七年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
八年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇
九年	一、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇	三、〇〇、〇〇

これに依つて見るに三年末僅かに三億四千四百一十九萬九千圓  
に過ぎなかつた正貨總額が、九年末には二十一億七千八百萬  
圓に達し僅々數年にして實に十八億三千餘萬圓の増進を示し  
更に之れを在正貨に就て見れば、三年末に於て一億二千八  
百餘萬圓のものが九年末には十一億一千六百餘萬圓に之れ亦  
九億八千七百餘萬圓の急増を告げてるのである。

**通貨膨脹と事業の勃興** 斯くの如く在正貨の激増は  
當然通貨流通高の膨脹となり、又従つて物價の騰貴を促進せ  
ずには居ない。即ち大正三年末の通貨流通高は僅々五億八千  
八百餘萬圓に過ぎなかつたが、九年末には十七億五千四百餘  
萬圓に激増してゐる。之れを以て見ても我國の富力が如何に  
充實したかを知らしめるのである。此の富力が即ち最近銀行を  
發展せしめた最大原因を爲してゐる。斯く通貨の膨  
脹を來したるに伴うて一般購買力を増進せしめ而して又物價  
を昂貴せしむるは經濟的法則である。開戰當初一九一八  
であつた物價は逐年騰貴して大正八年末には三八・五〇ミ  
實に三倍強となり翌九年三月には四二・五〇ミ云ふ驚くべ  
き騰貴率を示したが、時恰かも財界反動期に向ひ爾來物價下  
落の歩調を辿り九年末には二七・一九八を指すに至つた。此  
の如く物價の騰貴する事は一面に於て各種事業の利潤増大  
せる事を物語るものである。即ち企業熱勃興に伴つて種々な  
る事業計畫を見るに至り、依つて投資せらるゝ資本も莫大な額  
に達し、大正三年に於て累計四十億九千九百三十萬圓であつ  
た資本金額は九年末には四倍半強の百八十四億二千七百七十  
萬圓に上つたのである。而して又此結果として當然來るべき現  
金は株券類の賣買流行即ち之れである。好況に乘じて得たる  
利潤を資本として最も有利に懸さざるは實際的の投資家、  
只思惑を立て、奇利を博さざるは投資者の二者が躍を檢し  
て證券市場に立ち向ふ爲めに、自然株式市場の暴騰となり暴  
晴しい活躍期を來した。當に株式市場のみ云ふは必ずしも  
米、或は米、或は生糸等品類に至るまで殆んそ有らざる商品  
の結晶として現はれ來つた主要現象であつて、又是れが  
行業務の重大原因を作つたのである。左に大正三年以後九  
年に至る歐戰當時に於ける通貨流通高、物價指數、事業計畫  
資本及株式價格指數を表示する。

#### △通貨流通高(單位千圓)

年次	通貨流通高	物價指數	事業計畫	資本及株式價格指數
三年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
四年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
五年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
六年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
七年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
八年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
九年	一、〇〇、〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

△物價指數 (日銀調査)

年次	六月	十二月
五年	二七・三〇	二七・三〇
六年	二七・三〇	二七・三〇
七年	二七・三〇	二七・三〇
八年	二七・三〇	二七・三〇
九年	二七・三〇	二七・三〇

△事業計畫資本 (日銀調査)

年次	新設	擴張	合計
三年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
四年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
五年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
六年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
七年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
八年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇
九年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	二、〇〇〇

△歐戦前の銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△歐戦前の銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△株式價格指數 (日銀調査)

年次	六月	十二月	最低	最高
三年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
四年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
六年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
七年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
八年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
九年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

第二章 歐戦前後の金融 大観

歐洲大戦を中心とする我國經濟界の大勢凡そ叙上の如し、此の環境に培育されたる銀行事業が、目覚ましき發展を遂げ、眞に金融熱潮を現出した事も、思へば定に當然の歸結でなくはならぬ。以下歐戦中に於ける我銀行業活動の跡を数字的検討を試み、其の内容の充實振りを詳述する。先づ順序として所在銀行數及其資本状態を一覽して見る。

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

△欧戦前銀行預金及貸出状態 (単位千圓)

年次	行數	公積資本金	貸出
明治三十一年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同三十五年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
同四十四年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇
大正元年	七	七、七〇〇	一、〇〇〇

以上各表の明示せるが如く歐戦前に於ては各種銀行共に未だ以て満るに足る程の業績を挙げ得なかつた事を知り得る。即ち明治三十一年以降大正元年に至る十五年間に於て行數に在りては特殊、普通、貯蓄の三者を合して二千六百一十一行、公積資本金に在りては八億一千一百萬圓、此の増進資本五億

に比すれば何れも約五分の一の増加率に過ぎなかつたのである。これを以て見るも歐戦に依つて我銀行業が如何に莫大の影響を受けたかを窺ひ知られるのである。然らば歐戦勃發以來如何なる速度を以て發展の實を挙げ來つたか、之れを大正三年より大戦終結の同九年に至る七個年間の趨勢を数字に據つて検討しよう。

右表の示す如く歐戦當初の大正三年に於ては各種銀行資本九億二千七百餘萬圓なりしが、戰亂の進展するに伴ひ我財界に好影響を齎すと共に其の資本力も著しく増大して、戰亂の最高潮に達せる大正七年には公積資本十三億四千餘萬圓、此の増進資本九億八百萬圓に上り恰も戰前の總資本と同額の増進を有するに至つた。而して戰亂終結の八年九年は最も我國事業界の高潮に達した時期であつたが爲に、銀行業の上にも著しき變化を示して、即ち八年には十八億一千餘萬圓の公積資本を計へ、此増進十二億二千餘萬圓に及んで、更に九年には二十六億二千餘萬圓、十六億五千餘萬圓の増進資本を示したのである。更に預金の上には戰前十倍を出づること僅に八百萬圓に止つたが、七年には四十三億餘萬圓に上り、九年には四十八億餘圓に達した。而してこれが運用方面に在りては、貸出に於て十億四千餘萬圓なりしものが七年には三十五億一千餘萬圓、九年には四十六億一千餘萬圓に達し預金貸出共に目覚ましき激増振りを示してゐる。實に此の當時こそ我國金融界の黄金時代と稱すべきであつた。が併し無事泰平を謳歌してゐる其の裏面には、必ずや恐るべき陰翳の籠籠されつゝあることを知らねばならぬ。花咲き枝繁る春の裏には當然凋落の秋來ることを懸念せねばならぬ。大自然の法則はやがて經濟的生活の上にも頓現し來ることを見ねないのである。不景氣知らずの好況に陶酔し所謂戰時成金振りを遺憾なく發揮してゐる間に、大正七年十一月には歐戦の休戦協約が成立してゐた。而し我經濟界の大部分が之に對する何等の準備をも策しやうとせぬ中に、遂に金融業者は警戒の第一策に出でることとなりなかつた。即ち年來接近と共に金利は益々昂騰して遂に割引歩合二錢内外を唱ふるに至り既に三年來の新記録を示したのである。

戰後の大反動來る。斯くて大正八年を迎へた我金融界は、愈々警戒を嚴重にしたので此處に漸く一般經濟界に於ても不安の念に驅られ金融は緊縮状態を見し、割引歩合は依然強調を過り六月に至つて割引協約の調印を見るや諸取引も再び活況を誘ひ一方貿易が漸次進調に向ひ、輸出超過の感覺

めて遂次入超の傾向あるに拘らず、正貨の高増の趨勢を保持したので通貨は膨脹、物價又騰貴し、商工業界の股票を招來したので、資金の需要は益々増加するに同時に、株式、社債、公債等の拂込が非常に多量に金融市場を益々緊縮せしめ金利又著しく引締り、一月の一錢九厘四毛から六月には一錢九厘六毛、十月には一錢九厘、十二月には一錢五厘四毛に暴落した。斯くの如く歐戦直後の我財界は各方面に依りて周回の状態に既に全く財界大反動來の要因充滿してゐたのであつた。此の形勢を早くも看取した日銀では警戒の意味を以て十月には一錢八厘から一錢に、十一月には更に一錢二厘まで僅々一ヶ月間に四厘方の利上を斷行して一般の警戒を促したのである。然るにも拘らず熱狂的に傾いた投機思惑と金業熱とは、財界根柢の悪化に反比例して益々旺盛となり、同時に事業熱の反映として前年中から海外に註文された機械類、原料品等は九年新春から追々輸入され、之等に要する輸入資金は非常の巨額に達し一方株式及諸商品に對する極度の思惑又は無數に放出した泡沫會社に對する拂込等の爲めに資金の需要は一時に幅廣し、而も其の額たるや當時の金融市場に於て到底應じ切れぬ程度の巨額なものであつた。此處に金融は全く行詰りとなつたのである。而して其の結果は遂に株式方面に現はれて大正九年三月十五日の大暴落に端を發し、先づ大阪の増田ビルローカー銀行の破綻となり、横濱の巨商茂木商店の破綻より其の經營になる七十四銀行の没落となつて東西の銀行業に大恐慌を來し財界は全く大動搖大混亂状態に陥つた。此處に於て各金融業者は極度に警戒態度を取り資金の回收を急ぐと同時に金利の引上を行ひ三月には一錢七厘八毛、四月には一錢九厘一毛、五月には一錢、六月には更に三錢一厘まで暴落したのであるが、日銀其他の救済策をせられ漸次小康状態となり一面資金の需要激減したるに依り金融も亦度分緩和に向ひ、割引歩合は八月の一錢九厘六毛、十二月には一錢八厘一毛と低減歩調を示すに至つた。而して一方銀行預金状態が如何なる變化を來したかを見るに、此の恐慌來の影響として殊に注目する現象を呈したのである。即ち反動期に於ける東京大阪兩組合銀行預金を比較表示すれば左の如し。(單位百萬圓)

△東京大阪兩組合銀行預金比較

年月次	東京	大阪
十年一月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同三月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同四月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同五月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同六月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同七月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同八月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同九月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十一月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇

△東京大阪兩組合銀行預金比較

年月次	東京	大阪
十年一月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同三月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同四月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同五月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同六月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同七月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同八月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同九月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十一月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同十二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇



る際であるが、合同前に就ては後段に詳述する事とし、次には大正十三年中に於ける金融市場の大勢を研究し其の發展の跡を知る事とす。

### 第三章 十三年中の金融大勢

#### 1. 復興資金需要と入超の激増

大正十三年の初期に於ては前年下半期に於て蒙つた震災の復興事業は半途に在り、之れが材料の輸入激増に爲り資金の需要甚しきものがあつた、殊に前年震災當時實施せられた輸入税免除期間が十三年三月中に規定せられてあつた爲め入超傾向は特に三月までが甚しかつた、即ち一月に於て一億三百萬圓、二月に於て一億八百萬圓、三月には實に一億九千萬圓の巨額な輸入超過を示し四月以降急減したが而も尙ほ且つ上半期に於て六億五千九百萬圓の入超を見たのである、これを表示するに次の如く現はれてゐる。(單位千圓)

#### △十三年上半期貿易状態

月次	輸出	輸入	入超
一月	110,755	333,310	222,555
二月	103,856	351,113	247,257
三月	107,480	321,246	213,766
四月	146,856	327,618	180,762
五月	167,656	333,333	165,677
六月	147,013	317,117	170,104
合計	673,513	1,703,727	1,030,214

#### △十三年上半期日銀貸出高

月次	貸付金	外債爲替貸付	割引手形	合計
一月廿六日	300	一六	一七七	四八三
二月廿三日	一三三	一六	一三三	二八二
三月廿九日	一六	一六	一三三	二六五
四月廿六日	一六	一六	一三三	二六五
五月卅一日	一六	一六	一三三	二六五
六月廿八日	一六	一六	一三三	二六五

右表の如く三月末に於ては外國爲替貸付二億三百餘萬圓に達し、民間貸出亦七億七千四百餘萬圓を算したがこれを頂上として五月以降外國爲替貸付は急減したのである。此の如く外國爲替貸付の巨額に達した事は、恐いて資金需要を減する要素となつたのであるが、更に資金需要減少の原因と見るべきは尙ほ尙ほの結核面工業資金の需要著しく減退せること

#### △全國組合銀行預金比較 (月別)

月次	定期預金	當座預金	特別當座	通知預金	其他	合計
一月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
二月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
三月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
四月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
五月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
六月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
七月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
八月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
九月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十一月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十二月	2,561,000	4,612,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000

#### △全國組合銀行貸出比較 (月別)

月次	證券貸付	手形貸付	當座貸越	割引手形	其他	合計
一月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
二月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
三月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
四月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
五月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
六月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
七月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
八月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
九月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十一月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
十二月	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000

即ち大正十三年十二月末に於ける全國十八都市の手形交換所組合銀行及其代理交換銀行の預金は、總額五十一億三千四百九十九萬圓にして、其貸出は三億三千四百萬圓(三億七千六百四十四萬圓)を別として五十三億三千四百萬圓に達してゐる、これを震災年の十二年末に比するに預金は於て一億六千四百萬圓

#### △全國組合銀行預金貸出比較

年次	定期	當座	特別當座	通知	其他	合計
二年前末	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
五年前末	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
六年前末	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000
七年前末	4,612,000	1,453,000	9,403,000	1,453,000	2,561,000	20,530,000

政府が公債に依る事業繰延べを爲し、従つて同年中に於て募集すべき公債の多額を發行し、一般市場に於て募集しない事にした等も重要な原因であつた。次に日銀の貸出高と兌換券發行高を各月末現在に依つて比較する。(單位千圓)

#### △日本銀行兌換券及貸出高各月比較

月次	兌換券	正貨準備	制限外	一般貸出高
一月	1,000	1,000	700	700
二月	1,000	1,000	700	700
三月	1,000	1,000	700	700
四月	1,000	1,000	700	700
五月	1,000	1,000	700	700
六月	1,000	1,000	700	700
七月	1,000	1,000	700	700
八月	1,000	1,000	700	700
九月	1,000	1,000	700	700
十月	1,000	1,000	700	700
十一月	1,000	1,000	700	700
十二月	1,000	1,000	700	700

#### △東京市中金利比較

月次	高	安	高	安
一月	二六	二六	二六	二六
二月	二六	二六	二六	二六
三月	二六	二六	二六	二六
四月	二六	二六	二六	二六
五月	二六	二六	二六	二六
六月	二六	二六	二六	二六
七月	二六	二六	二六	二六
八月	二六	二六	二六	二六
九月	二六	二六	二六	二六
十月	二六	二六	二六	二六
十一月	二六	二六	二六	二六
十二月	二六	二六	二六	二六

此の如く東京市場を通じて前半期よりも後半に赴くにつれて一種の緩慢状態に推移した事が判るが、此は既に説明した所の貿易入超傾向の期末に近づくに従ひ緩和されしに基づくものである。此の貿易入超傾向の緩和する管であつたに際して政府が二億九千萬圓の小額公債を發行して一般市場から募集しない事にした其結果は金融市場の堅固力を著しく緩和することとなり、此く資金需要方面が緩和せられたに反し一力資金供給方面に於ては同年二月英貨公債一億五千萬圓、

#### 全國組合銀行營業成績

次に同年中に於ける全國手形交換所組合銀行及其代理交換銀行の預金貸出高が如何に動いてゐるかを表示するに次の如き状態を呈してゐる。(單位千圓)





するものがある、即ちこれを各地方別に詳記すれば大体に於て次の如く記述し得る。

**東京手形交換高** 大正十二年九月未曽有の大震災に見舞はれた東京に於ては同月には僅々一億五千九百萬圓云ふ少額を示し其後回復したりは云へ、毎月の交換高は二十億圓から二十五億圓にあり、これを震災前の各月三十億圓を超過せるに比すれば十億以上の減少を来たしたのであるが十一月から清算市場を始め商業取引が活発になりし爲めに十三年に至つては漸次増加し十二月の交換高は三十五億六千六百萬圓の巨額に上り十二月は勿論、十一月十二月に比するも遙かに増加して居る、即ち最近三ヶ年間に於ける各月の交換高を比較表示する。(單位千圓)

**△東京手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、六五五、〇〇〇	一、五八〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
二月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
三月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
四月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
五月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
六月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
七月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
八月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
九月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
十月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
十一月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇
十二月	一、七〇〇、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、五〇〇、〇〇〇

**大阪手形交換高** 十二年九月には關東震災の影響を受けて激減したるも翌月より回復し漸次増進の状を辿り十三年に入りては、各月とも十一年及十二年の各月より多く四月頃までは東京と相伯仲の間にあり、一月の如きは實に東京を凌駕して居るのであるが五月以來東京の交換高が増したるに、大阪の交換高が五月六月を多額として七月以後減少した爲め東京よりも下位に落ちた、然れども尙ほ震災前に於ける如き大差を見るに至らなかつたが十一月以後は東京の復舊せるに伴ひ遂に震災前の高に復歸した、即ち大阪の交換高を表示すれば左の如くである。

**△大阪手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
三月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
四月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
五月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
六月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
七月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
八月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
九月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

元來横濱と神戸の手形交換高は明治四十年以前に於ては横濱が遙かに多く、歐戰開始前後に於ては伯仲の間にあつたのであるが戰時神戸港の發達が著しかった爲め手形交換高も横濱と位置を轉換し、大正十一年に於ては横濱の四に對し神戸の割合を示し十二年には横濱の三に對し神戸は七の割合となり十三年には横濱の二に對し神戸は八の割合となつたのである、併し最近に及んで横濱の回復が他の都市より著しい傾向があるから此の懸隔は漸次縮小する、ものと察せられる

**△横濱手形交換高** 大正十二年九月の震災は其の被害高に於て横濱最も激甚であり、火災の範圍亦最も廣かつた爲め其の打撃を受けた事も東京に比して遙かに甚しく商業の回復亦最も遅れた爲め手形交換高の如きも十三年六月までは十二年及十一年の半額にも達しない有様であつた、併し八月から漸く増加に向ひ十二月には相當の高に上れるも尙ほ震災前の十一年十二月に比すれば八千萬圓からの少額を示して居る最近三ヶ年間に於ける各月交換高を比較表示するに次の如くである。

**△横濱手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
三月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
四月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
五月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
六月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
七月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
八月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
九月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

**神戸手形交換高** 關東震災に依り横濱の貿易機關が殆んど全部破壊せられ一時貿易が輸出共に杜絶した爲め輸入は勿論のこと、生糸絹織物の如き輸出品まで神戸に於て取引せらるゝやうになつた結果、同地の手形取引を急に増加して震災前の三四億圓から十三年に入りては少くも五億圓以上、多きは七八億圓に上りしめ其の手形交換高の如きも激増して十三年十二月には八億五千一百萬圓と空前の増進を示し、これを前年同月に比し二億五千萬圓、十一年同月に比し四億一千七百萬圓の激増を告げるに至つたのである即ち

**△神戸手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
三月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
四月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
五月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
六月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
七月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
八月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
九月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

以上兩都市の手形交換高を比較すると大正五年頃までは京都が名古屋よりも多かつたのであるが、歐戰大戦中、名古屋が商工業地として大いに發達した爲め、同六年から地位を轉換したもので十三年には京都の四に對し名古屋は六となり尙かも横濱と神戸に於けるが如き關係を示すに至つたのである。手形交換高の趨勢凡そ斯くの如し、次に不渡手形の状況を概記して置かねばならぬ。

**△京都手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
三月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
四月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
五月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
六月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
七月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
八月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
九月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
十二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

次に名古屋の銀行界は京都と正反對に各地大銀行の支店銀行が割合に發達せず、同地三銀行を始め土地の銀行が市内支店を大いに擴充して居る關係上、手形交換高も比較的少く自行内に於て決済する高が多いので、商業取引の比較的殷賑なるに反比例して居る状態であつたが、最近には大いに擴張し十三年各月の交換高を前年及十一年各月に比較すれば五六兩月を除く外何れも増加を示し、十一月より歳末に至つては殊に著しく十二月には二億八千三百萬圓に上り前年より三十八億餘萬圓の増加を示して居る、即ち最近三ヶ年間の比較表左の如し。

**△名古屋手形交換高各月増減比較**

月次	十三年	十二年	十一年
一月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
二月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
三月	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

不渡手形の増減は云ふ迄もなく財界の消長を反映するものである、財界に變動多ければ従つて不渡手形も亦自ら増減あることを免れない、明治三十三年當時に於ける枚数金額を現今のそれと比較する時、我經濟界の如何に進歩發達を遂げたかを窺知されるのである、左に三十三年以降日露戰役後までに於ける東京大阪神戸京都四都市の不渡手形を比較表示して見る。(單位千圓)

**△明治三十三年當時の不渡手形状況**

枚数	金額	枚数	金額	枚数	金額	枚数	金額	
東京	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	大阪	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	神戸	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
京都	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	合計	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	合計	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇

即ち東京に於ては三十三年頃既に千三百餘枚金額三十八萬圓に及んで居るが其後次第に減少して三十五年頃には五百枚を往來し、金額亦十萬圓前後に止まつて居る、而も之れを大阪京都乃至神戸等の枚数並に金額と比較すれば尙ほ多額であつたのである、就中神戸の如き枚数に於て二十枚枚乃至三十枚枚を出でず、金額も亦僅々千圓乃至五千圓に止まつて居るのだから、一枚當り百二十圓に過ぎなかつたことが知られる、今日の半ヶ月分にも満たない云ふ状態から見るに實に隔世の感がある。

大正十三年上半年現在を基本として其の消長を調べて見るに、同年五月中、東京外十七都市の手形交換所に於ける不渡手形は人員二百七十六人、手形枚数三百四十枚、此の金額十二億七千五百一十圓で、これを前月に比すれば人員二十一、枚数二十四枚を各増加し金額に於ては八萬四千三百餘圓を減少して居る、試みに大正十三年五月分を前年同月分並に一月以降累計を大正九年以來各年同期間の各比較を表示すれば次の如くである。

△全國十八交換所不渡手形(一)

大正十三年五月	大正十三年四月	大正十三年三月	大正十三年二月	大正十三年一月
前月	前月	前月	前月	前月
前年同月	前年同月	前年同月	前年同月	前年同月
五ヶ月間累計	五ヶ月間累計	五ヶ月間累計	五ヶ月間累計	五ヶ月間累計
十一年同期	十一年同期	十一年同期	十一年同期	十一年同期
十二年同期	十二年同期	十二年同期	十二年同期	十二年同期
十三年同期	十三年同期	十三年同期	十三年同期	十三年同期

△全國十八交換所不渡手形(二)

東京	大阪	神戸	京都	横濱	名古屋	廣島	關門	金澤	小樽	札幌	福岡	長崎	新潟	熊本	岡山	仙臺
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

第五章 銀行事業の現況

大正十三年末十六億九千四百萬圓に膨張した日本銀行兌換券も越年度の十四年一月中には其の回収が速々たるものであつたが、前年同様を通じて更に月遅れペースを過ぎ二月に入ると及んで回収ペースが鈍化し、日銀貸出二億三千萬圓の低位に下つて震災以来の最低記録を作るに至つた、随つて兌換券も遂に十一億四千萬圓に縮小したのである、これが原因は勿論預金の増加にも因るが、主として貸出の減少に基因するものであつて、即ち前年未七億六千二百餘萬圓の巨額に達したものが、一月末には四億六千餘萬圓となり、更に二月には前記の如く二億三千萬圓に激減してゐるのである、貸出は云ふ迄もなく主として割引手形と爲替貸付であつて、割引手形は常に二億乃至三億圓を普通としてゐるのであるが、二月中には二億圓を割つて一億八千二百餘萬圓と之れ亦震災以来の最低記録を作るに至つた、一方爲替貸付も年初尙ほ二億圓を越えていたものが、二月末頃には七千三百餘萬圓に減少したのである、而して割引手形減少は直ちにコール日歩に影響して之を低下せしめるので日銀に借換へるものも多く、爲替貸付の減少は輸入季に入つて棉花其他輸入手形の期限到来するものも多く、爲替銀行の内地資金は益々豊富を告ぐる折柄日銀へ返済するものが多くなつた關係で兩々相俟つて著しい兌換の収縮を招來したのである、更に財界に於ては漸く好調に轉換せんとするの機運到来し、各種の事業会社の整理進捗に伴ひ社債發行相繼いで行はれ而もそれらの資金は尙ほ銀行の金庫に收蔵される結果として、當然金融緩慢の情勢を招致し、更に銀行勘定の上に着きき變化を來さしめたのである、即ち前年一月末と十四年一月末に於ける全國銀行勘定に就て預金貸出の内容を比較すれば左の通りである。(單位千圓)

△全國十八交換所不渡手形(三)

大正十一年	大正十二年	大正十三年
...	...	...

以上数字に依つて見れば各地別により其の増減に著しき差別あるを窺はし得る、即ち大震災後に於ける東京の甚だ振はざりし關係から不渡手形も亦非常に減少してゐるに反し、大阪の頗る多いのは一に震災後の財界推移を物語るものとして不可ないものである、更に大正十一年以降各年不渡手形状況を表示せば左の通りである。(單位千圓)

△各特殊銀行營業成績比較

銀行名	決算期	繰上資本金	当期利益金	利益率	常期積立金	常期配當金	配當率	後期繰越金
日本銀行	十三年下半年	...	...	...	...	...	...	...
正金銀行	十三年上半年	...	...	...	...	...	...	...
勸業銀行	十三年下半年	...	...	...	...	...	...	...
興業銀行	十三年上半年	...	...	...	...	...	...	...
朝鮮銀行	十三年下半年	...	...	...	...	...	...	...
臺灣銀行	十三年上半年	...	...	...	...	...	...	...
朝鮮殖産銀行	十三年下半年	...	...	...	...	...	...	...
北海道殖産銀行	十三年上半年	...	...	...	...	...	...	...

1. 特殊銀行の現況

昨大正十三年下半年に於ける日本銀行外七特殊銀行の營業成績を見るに、其の利益金に於て三十三億三千圓を算し同年上半年に比し僅かに三十萬圓の増加であるが、前年即ち十二年同期に比すれば三十四億七萬餘圓の増加である、これは前年下半期は例の關東大震災の爲め各銀行中正金銀行の成績が特に不長であつた爲りである、今各銀行別に比較表示すれば次の如し。(單位千圓、利益率を配當率に換算)

右に依る日本銀行は北海道殖産銀行を除く他の六行の利益は前年同期より増加して居るが、上半年に比する日本銀行は五十七萬圓、北海道殖産銀行は十九萬圓を何れも減少し日本興業銀行は四十六萬圓、臺灣銀行は四十二萬餘圓を各増

加し他は大きな變化を呈して居ないことを知り得る、次に之等各銀行の重要な貸借項目を比較して如何に資本力の運用がはたされて来たかを表示する。(單位千圓)













以上の数字を基として前年及前々年と比較対照すれば、其の業績の良否は直ちに判然する譯であるが、それは各行別に譲るゝとして、次に各府縣農工銀行の業績を大観し、やう、府縣農工銀行は之を主として各地方農工業開發の爲めに要する金融機關たるべき任務を帯び明治三十一年東京大阪三重兵庫其他各府縣に其の設立を見てより漸次普及し大正元年末には總數四十六行を算し、此公稱資本四千二百二十七萬圓、其の四分の三は拂込を終り積立金千五百七十七萬圓に達し大正九年末には四十六行九百四十萬圓の資本額に及んだが、十年に至つて日本勸業銀行との合併に關する法律制定せられ同年中に於て山梨、佐賀、福岡、防長、兩羽、土佐、沖繩、石川、富山、福井、鳥取、讃岐の十三行、翌十一年には静岡、新潟、京都、和歌山、秋田、青森の諸行が合併せられ漸次減少して最近に於ては總數二十七行、此の資本總額九百九十萬圓となつたのである、而して農工銀行の機能が農産振興と地方商工開發に在る關係と其の資金供給の爲め農工債券を發行して之れが財源となす特權を有し其の發行高は明治三十三年末に於て二億七千三百四十三萬五千圓の多額に達してゐる、斯くの如く資源の大部分を債券發行に快つたのであるが、而も亦一面普通銀行の領域に入つて預金吸收にも努力する事勿論で、從來定期預金を主としたのであるが明治四十三年當座、小口當座預金を受入れる事になつて以來、預金額も著しく増加し來り大正十二年末には左表の如き成績を示すに至つた。

(單位千圓)

預金受入	一三三,三三三
諸貸付金	一〇〇,〇〇〇
割引手形	一〇,〇〇〇
有價證券	一〇,〇〇〇
金銀有高	一〇,〇〇〇

即ちこれを大正元年の預金總額二千四百五十餘萬圓に比する三六倍強の増加であり、同年末一億七千九百九十四萬圓に過ぎなかつた貸付金は之亦三倍強の増加を示してゐる、左に東京大阪、兵庫、三重、長野、廣島、福島七府縣農工銀行營業成績を十四年上期末現在に依りて比較して見よう。(單位千圓)

東京	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
大阪	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
兵庫	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
三重	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
長野	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
廣島	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇
福島	預金	一,〇〇〇,〇〇〇	貸付金	一,〇〇〇,〇〇〇

以上に見て居るに兵庫三重兩行は其の拂込資本金其他各科目に於て遙かに一頭地を抜き就中其の預金受入額に於ては市中銀行の有力なるものに優るの成績である、更に之を詳細に解剖して損益勘定を計算すれば、各地方に於ける産業的推移の消長を知り得られて其の興味ある問題を見出し得るのだから、本論は各行別の條項に譲るゝとして、以上日銀以下各特殊銀行の最近の業績を概観するに、戦前世界各國の状況は不況

の底に沈んで更に新局面を開かず、一般市中銀行の業績好ましくならざるに伴ふて何れも萎縮して振はず、要するに業績面白からざる域を脱し得ない事は争はれないのである、各銀行の業績は即ち以下序を述べて之を詳記するであらう。

### 日本銀行 (本店 東京市日本橋區本町四丁目)

- 一、資本 金 六千萬圓
- 一、拂込資本 三千七百五十萬圓
- 一、諸積立金 七千萬圓
- 一、兌換券發行高 十四億二千八百萬圓
- 一、諸預り金 六億六千三百萬圓
- 一、諸貸出金 四億五千萬圓

沿革及資本の移動 明治十年西園寺首相時から流通高急激に膨脹した不換紙幣の弊害を矯正し併せて幣制統一を圖る目的の爲に中央銀行設立の議あり、時の大藏卿松方正義等の努力に依り明治十五年六月、資本金一千万圓を以て創立された本邦最高の金融機關である、十六年七月、各地方の所謂臨時方なるもの、廢止せらるゝと共に國庫金出納の委任を受け次いで十七年五月大藏省布告兌換銀行條例に基き翌十八年五月初めて兌換銀行券を發行された、其の種類は一圓、五圓、十圓、二十圓、百圓、二百圓の七種で、當時は銀貨兌換であつたが明治三十年十月貨幣法の制定と共に金貨兌換となつたのである、斯くして從來政府の發行せる不換紙幣の膨脹により著しく沈滞した經濟界に活路を開き其の類勢挽回に非常な効果を齎らした、明治二十年資本金を二千萬圓に増加し、更に金貨本位に改正さるゝ準備の爲めに二十八年三千萬圓に増資し、日露戰役當時には巨額の内外債券集に當りて政府の財政運用に貢獻する所多く、戰後の變動期に際しては金融界經濟界の秩序保持に任じて中央銀行としての職責を完了し多數民間銀行の爲に東道役となり機宜の措置を講じ、めざらん事に腐心し、爲に本邦金融事業は比較的短時日の間に長足の進歩を致したのである、四十二年一億圓増資を決定して六千萬圓となつたが、而も同行は常に利益金の大半を積立金として留保し來つたので増資拂込の如き其の一部を之れを以て充當された云ふ程の堅實主義を以て著々基礎を固められたのである。

兌換券發行高の變動 兌換制度實施當初に在りては兌換準備に就ても極めて渾然たる規定であつたが、明治二十一年に至り七千萬圓を限り政府發行の公債證券其他適當なる證券手形等を保證準備として發行するを許し、又市場の状況に依りては大藏大臣の許可を得更に保證準備に依つて所謂制限外發行なる名目の下に其發行を許された、但し此場合は一個百分の五を下の割合を以て限外發行税を納付するの義務を課せられたのである、其後保證準備發行額は八千五百萬圓に増加し、明治三十二年からは更に増加して一億二千萬圓となつた兌換制度實施當時より今日に至る間の各年現在兌換券發行高の推移を示せば左表の通りである。(單位千圓)

明治十八年	發行高	正貨準備	保證準備	制限外
明治十九年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
明治二十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇

正五年以降、各年現在、十四年八月末日現在高を示す

同二十五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同三十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同三十五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
大正元年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同二十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同二十五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同三十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同三十五年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
大正七年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同八年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同九年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十一年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十二年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十三年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
同十四年	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇

創立以來の業績 中央銀行として最高金融機關たる特質を有する同行の業務が普通銀行と同様の業務を遂げるものに非ざる事勿論であるが、而も財界推移の波動を等しく其の業務に影響すべきを否み得ない、即ち同行創業當時の業績を四十餘年を経過せる今日の業績とを比較する時、時流の變遷に一驚を喫せざるを得ないであらう、左に累年比較表を示す

明治十六年	拂込資本	積立金	配當金
同二十一年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同二十五年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同三十年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同三十五年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
大正七年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同八年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同九年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同十年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同十一年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同十二年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同十三年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同十四年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇

即ち創立一年後の明治十六年には二十五萬九千圓の純益に過ぎなかつたものが、二十年後には四百九十萬圓となり更に二十年後の大正十三年末には一千餘萬圓を計上するに至つたのである、更に其の内容に立入つて預金貸出状態が如何なる變遷を示して居るかを見るに次の如く表示し得る。(單位千圓)

明治十六年	預金	貸出
同二十一年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同二十六年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇
同二十九年	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇

次に最近の損益勘定如何を見るに左の如く表示し得る。(單位千圓・動行)

期別	常期利益	利益率	常期積立	配當率	後期純總
十二年下	五,七二九	三三・三	一,〇〇〇	一・一	一,〇〇〇
十三年上	五,七二九	三三・三	一,〇〇〇	一・一	一,〇〇〇
十三年下	五,七二九	三三・三	一,〇〇〇	一・一	一,〇〇〇
十四年上	五,七二九	三三・三	一,〇〇〇	一・一	一,〇〇〇

右表に就て見るに十二年下期及十三年上期の利益金は著しく多くを算して居る事が知られるが、これ十二年の震災救済の爲めに放出した貸出額が巨額に上り、隨つて其の利息引料収入の増加した事を最大原因とすべきである、即ち震災後の日銀貸出高の變遷を見るに、十二年下期に於ては各月平均貸出高五六億見當を示し、十三年上期に至つても四億より六億の間、在り向は別段の減少は見なかつたのであるが同年下期以後金融の緩和と共に三億に低下し、十四年に入つては更に減少傾向を辿り三億程度であつた、此故に収入引料等に著しき影響を來し其の利益勘定の上にも減額を齎せられた事は争はれない事實である、が併し又一方に於て所有公債類の騰貴に依る實質利益及利息収入の増加等に依り平衡を保ち結局利益減少して目すべきは甚だ少額に止まるを得たので大体を通じて業績消や不振の域を脱せない時期に於ける業績としては良好の部類に算すべきであらう、これが具體的表數比較は別表添付の累年比較表に就て参照すべきである。

創業以來の重役 同行創立當時の總裁は吉原重俊氏であつて爾來理事長市來乙彦氏に至る迄で十代の總裁を経て居る。

- 1、吉原重俊
- 2、富田鐵之助
- 3、川田小一郎
- 4、岩崎彌之助
- 5、山本達雄
- 6、松尾臣善
- 7、高橋是清
- 8、三島彌太郎
- 9、井上準之助
- 10、市來乙彦

總裁 市來乙彦 副總裁 木村清四郎  
理事 川田敬三 理事 藤生二郎  
同 濱岡五雄 同 深井英五  
監事 山崎四男六 監事 坂島武之助  
山口宗義 同 鳥部太郎

日本銀行營業成績累年比較表

Table showing the annual performance of the Bank of Japan from 1911 to 1924. It includes columns for assets (資本金, 準備金, etc.) and liabilities (負債), with values in Japanese Yen.

横濱正金銀行 (本店 横浜市南區五)

- 一、資本 壹億圓(拂込済)
一、諸積立金 八千八百八十萬圓
一、諸預り金 五億九千八百八十萬圓
一、諸貸付金 三億一千三百四十萬圓
一、銀行發行高 三百九十萬圓

沿革及資本の異動 本邦銀行振替時代、即ち明治十年前後に於て漸く海外貿易の隆盛を來さんとする傾向あるに...

銀行出資し、兩億の二百萬圓に對しても一般株式拂込の五分一を銀出資し、五分四を紙幣拂込に規定せられたるに...

最近の業績概観 歐戰好況期に際しては對外貿易の好調に相應して同行業績亦頗る一覺しきものあつたが、反動期以後更に歐戰損害等の爲め著しく利益減少の傾向あるは...

創業以來の業績 叙上の如く其の本質が對外國金融機關として創設せられた關係上、取引も國際的であり其の營業科目の如きも外國爲替及爲替貸付を主要業務とし、一面、内國爲替貸付、諸預金及保濟預り諸手形諸證券の割引、代金取立、貨幣交換等の一般業務も取扱ひ形諸支那に於ては兌換券發行の特權を許され種民地開發の助長機關と爲されて...

年次 常期利益 利益率 常期積立 配當率 後期利益
十一年末 七、三三三 一、一〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇
十二年末 九、一八二 一、一〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇
十三年末 一〇、〇〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇
十四年末 一〇、〇〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇 一、一〇〇

横濱正金銀行營業成績累年比較表

Table showing the annual performance of the Yokohama Specie Bank from 1911 to 1924. It includes columns for assets (資本金, 準備金, etc.) and liabilities (負債), with values in Japanese Yen.

別段	引受	諸手形	銀行	借入金	再割引	買掛	支掛	為替	公債	他	前	合
別段	引受	諸手形	銀行	借入金	再割引	買掛	支掛	為替	公債	他	前	合
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

日本勸業銀行

- 一、資本 九千四百萬圓
- 一、拂込資本 六千九百八十七萬圓
- 一、諸積立金 三千二百六十六萬圓
- 一、勸業債券發行高 六億四千四百四十三萬圓
- 一、諸預り金 五千七百二十九萬圓
- 一、諸貸出金 七億四千七百五十四萬圓

沿革及資本の異動 勸業銀行の設立は明治三十年當時に於ける各種銀行は比較的短期の信用に對して資金の供給を行ふ所謂商業銀行のみであつて、農工業等の長期資金を必要とするもの、金融機關たる途が開かれてゐなかつた。これ地方産業を振興策するの所以に非ずして、明治三十年八月、資本金一千萬圓を以て設立せられたる勸業銀行である。明治三十年七月四日開に増資し、同年十月、勸業銀行合併の實施せられたるに及んで、増資して現在資本金九千四百萬圓に至つたのである。而して其の營業科目も漸次擴大され現在に於ては創設主要任務の範圍を遙かに超過し、興業銀行の名稱を冠せしめ、この範圍に増大されつたのである。左に主要科目を列挙すれば

- 一、無抵當貸付 (1)公共團體貸付、(2)耕地整理事業貸付、(3)耕地整理、産業、漁業、畜産各組合貸付、(4)其他貸付
- 二、抵當貸付 (1)工場財源抵當貸付、(2)鐵道財源抵當貸付
- 三、債券引受 (1)農工債券引受、(2)北海道拓殖銀行及朝鮮殖産銀行債券引受
- 四、預金、割引、公金取扱 (1)公金其他各種預金、(2)有價證券又は農工商産物を擔保とする手形割引又は短期貸付、(3)産業組合に對する無擔保手形割引又は當座貸付、(4)府縣市の金融出納の取扱事務

各種債券の發行高 叙上の如く地方産業の振興を關する目的を以て設立された同銀行に對しては其の目的の爲に要する資金供給源として勸業債券を、而して貯蓄獎勵の爲めに貯蓄債券を發行するの特權を有し之等債券は總返済資本金の十倍までを發行し得るの特權を附與されてゐるのである。而して大正十二年關東の大震災の爲に當れる帝都其他被災地の復興事業に要する資金供給の爲に復興債券を發行する事を許されたのである。創業以來其の發行されたる各種債券は大正十四年六月末現在に於て七億七千餘萬圓の巨額に達してゐる。之を表示すれば(前位千圓)

期別	常期總益	利益率	常期積立	配當率	後期積立
十一年下	...	...	...	...	...
十二年下	...	...	...	...	...
十三年下	...	...	...	...	...
十四年上	...	...	...	...	...

最近の營業成績 歐戰好況期の營業成績比較はこれを別表附録の表に比較表に就て参照せられたく、此處には十二年即ち震災以後の各年本局決定より見たる業績を比較するに止めたい。先づ左に主要科目の計數を列挙する(前位千圓)

職名	氏名
總裁	梶原仲治
理事	川上直之助
理事	安部年生
理事	志立鐵次郎
理事	道家舜
理事	大谷嘉兵衛
理事	伊谷以三郎
理事	水野勝典



日本勸業銀行營業成績比較表

負債ノ部	第四十九期		第五十三期		第五十五期		第五十六期	
	大正十一年十二月末	大正十二年十二月末	大正十二年十二月末	大正十三年十二月末	大正十三年十二月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末
資本	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
準備金	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
貸出金	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000
預金	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000
有價証券	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
現金	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000
未償還資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
年賦貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
保付定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
農工商業引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
朝鮮殖産債引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
手形引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
大藏省預金部預金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
他店預金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
郵便貯金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
地方債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
國債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
地方債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
債券及社債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
代理店貸付基金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
營業用地所及家屋什器	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
所有不動産	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
金銀	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
代理店諸支拂基金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
其他共合計	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
資産ノ部	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
未償還資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
年賦貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
保付定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
農工商業引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
朝鮮殖産債引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
手形引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
大藏省預金部預金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
他店預金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
郵便貯金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
地方債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
國債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
地方債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
債券及社債	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
代理店貸付基金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
營業用地所及家屋什器	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
所有不動産	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
金銀	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
代理店諸支拂基金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
其他共合計	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000

日本興業銀行 (本店 東京市麹町區本町四丁目)

一、資本金 五千萬圓(拂込済)  
一、諸積立金 一千五百萬圓

一、債券發行高 三億一千九百餘萬圓  
一、諸積立金 七千二百餘萬圓  
一、諸貸出金 二億九千八百餘萬圓

沿革及資本變動狀態 産業金融機關としての勸業銀行 地方銀行等設立せらるるに及び企業方面に對する資金供給の増進を見るに至つたと同時に、他面有價証券其他の對する貸付、應募引受等一種の信託事業等に對する業務取掛の機關を必要とするに至り、此の任務に當る目的を以て設立されたのが同行である。明治三十五年三月資本金一千萬圓を以て設立され三十九年二月一千七百五十萬圓に、大正六年八月三千萬圓に増資した。其の主要業務とするは(一)一般預入取扱、(二)各種有價証券の低利貸付、(三)各種有價証券の應募引受其他の對する信託業務、(四)工場不動産抵當貸付、(五)船舶に對する金融等であつた。當初信託業務は尙ほ不振の域を脱せなかつたが其後擔保付社債信託法、鐵道抵當法、工場抵當法、鐵業抵當法等の制定に依つて漸次發展し、歐洲戰亂當時の對策好況期に際しては各種業務大いに隆進し其の餘勢を以て朝鮮臺灣各銀行と提携して支那交通銀行に對する借款を締結するなき其活躍の目標しきもあつた。而して各種興業資金供給の爲めには特に債券發行の特長を有し且つ一億圓まで元利支拂を政府が保證するの特典を與へられたる事にて行運の進展願に見るべきものあり。大正八年五千萬圓に増資するに共計新株四十萬株の中三千萬株は之を舊株主に割當し、残り十萬株は一株十七圓以上のプレミアム付を以て公募し前回の増資二萬圓の額超過金三百三十五萬圓の額を收得して從來の不良貸付等を完全に整理し尙ほ多分の利益を殊し業態全く一新するに至り今や特殊銀行に於ても其の内容の充實せる點に於て特に矚目に値するものと稱せられるに至つたのである。

戰亂以來の業績 歐戰好況期に於ける本邦經濟の内容の膨脹を來せる事實は既に述べた處であるが普通銀行の劃期的増進を遂げたるに同じく各特殊銀行亦頗る起天の翹を加へたるは争ひ難き事實である。即ち同行の營業成績を歐戰を中心として其前後の概況を瞥見するに次の如き計數を示して見る。(單位千圓)

期別	當期純益	當期積立	配當率	後積純益
二年下	六	六	〇	六
七年下	一〇	一〇	〇	一〇
十年下	四六	一〇〇	〇	五四
十二年下	三三	一〇〇	〇	六七
十三年下	三三	四〇	〇	七六
十四年上	二七	四〇	〇	六四

右表に依れば十年末の業績最も良好にして配當の如きも從來六七〇程度より一割の高率となり百六十萬圓の積立を控除して尙ほ且つ五十七萬圓を後期へ繰越してゐたが、十二年末は確實其他の損害あり且つ期末閉鎖に於て復興資金其他の貸出等増加を見たことは未だ利息引料等の上上好果を擧げるに至らず其利益動向は低下の已むなきに至つた。無難ではない、十三年上期末より下期に至り之等の収益増加に依る利益率を繰越して下期には三百三十二萬圓の純益を七十餘萬圓の前期繰越とを合せて四百三十三萬圓の利益を擧げてゐるに徴しても此種消息を知り得る、而して十四年上期に於ける純益二百七十萬圓は前期に比し其だ見劣りするが如くなれども、此の期間に於ては或は高田商會、或は葛原商會等の不良債權を切捨て、或は久しき問題となり居れる國幣汽船に對する利下等可成り内部の自己整理を斷行した結果を物語るもの、觀察されるが故に利益減少を以て業績の不良とあるに稱せねばならぬであらう、之れを要するに同行の最近業績は動員と共に前途を嚆矢する地位に在るものと觀測するを過たないであらう。同行現任重役左の如し。

- 總裁 小野英二郎
- 副總裁 松本重威
- 理事 松本弘造
- 理事 實來市松
- 同 天宅敏吉
- 監査役 大場多市
- 監査役 岩佐理一
- 同子爵 八條隆正

日本興業銀行營業成績累年比較表

負債ノ部	第四十一期		第四十二期		第四十三期		第四十四期		第四十五期		第四十六期		第四十七期	
	大正十一年六月末	大正十二年六月末	大正十二年六月末	大正十三年六月末	大正十三年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末	大正十四年六月末
資本	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
準備金	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
貸出金	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000	500,000,000
預金	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000	300,000,000
有價証券	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
現金	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000	50,000,000
未償還資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
年賦貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
保付定期貸付金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
農工商業引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
朝鮮殖産債引受高	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
手形引受高	10,000,000	10,000,000												



早川ビル 三三〇〇 一五〇〇 一〇〇〇 一〇〇〇  
諸貸出金は債券、手形、有価証券、割引、コールローン  
借入金は借入、割引、コールローンの通計

(3) A、預金三千萬圓以上の貯蓄銀行

行名	公積資本	繰上資本	諸積立金	諸預り金
不動	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
安田	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
川崎	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
東京貯蓄	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

右表に就て見るに資本積立金は逐年増加を告げているが、預金に於ては十二年十三年漸次減少傾向を辿り、十一年の二十一億一千二百萬圓を以て銀行業の最高額を記録した。たのである。尤も組合銀行中には東京府以外の他府縣支店銀行が加算してあるから、東京府銀行のみの業績でない事勿論である。此の預金の漸減するに反して一方貸出は年々増加し十二年は前年比一億一千萬圓、十三年は前年よりも更に一億圓を各増加してゐるが、之等の増加率が貸出貸出ならば前年比一億圓を各増加してゐるが、之等の増加率が貸出貸出率ではないかと思はれる。だけに餘り芳しからぬ譯である。此の如く預金の高の百十以上の貸出が行はれてゐる點から見るに最近の財界不況程度を知り得べく、随つて又各銀行業者の経営に對する苦心焦慮の度を推察するに十分であらう。之れを要するに一般に預金減少の傾向ある事は争ひ難き事實であり、之れに反して貸出の増加した事は又見通し能はぬ事である。支拂準備としての豫金積立に當りては、預金額を多く所有する事は、内容の堅實を立證する所以であるから

家も或るべき現象である云はねばならぬ。以下各行別内容に立ち入つて詳細に比較研究を試むる事とする。

株式 安田銀行 (本店 東京市麹町區本町一丁目)

- 一、資本金 一億五千萬圓
- 一、繰上資本金 九千二百七十五萬圓
- 一、諸積立金 五千二百六十萬圓
- 一、諸預り金 五億九千九百萬圓
- 一、支店 數 百六十二

沿革及資本異動概況 世に富強を稱せらるるもの莫た多し。雖も天下の三井二葉を向ふに懸し五分の角力を取るのみならず、よく一千萬圓以上の現金を立所に左右し得るもの實に我が安田王國を築きて又他に之れを求め得られぬのであらう。蓋し安田王國の富りたる其の種子なるかを容易に窺知し能はぬのである。此處には安田家の由来を説き其の財界的地位を評議するを目的としないのであるから其の一切を省略するが、安田家の資本に依つて營業する事業、十指を屈するも尚ほ盡せぬ中に、其の最も代表的ものは實に銀行事業である。東は關東一帯より本州一圓に亘り更に四國九州北海道から遠く滿洲に及ぶ幾多の銀行が或は直接經營に或は間接的に、少くも其大部分の資本を安田に依つて投せられてゐる銀行數に二十餘行を算した、而して其中の有力銀行三目すべきもの十餘行を合併して一九三〇年新陣容に依る安田銀行を組織されたのが即ち現今資本金一億五千萬圓のそれである。此の故に安田銀行の沿革を説くには自然多數の前身を叙述する必要があるが、其の餘裕を有せざるが故に、合併前に於けるも有力なりしもの即ち安田家の銀行として代表的視あつた三銀行より之を説く事が最も妥當であると思ふ。即ち同前は三銀行に依り明治九年十二月資本金二十萬圓を以て設立され十一月六月三十萬圓に、十五年七月四十四萬圓を以て合併して百萬圓に増資し、十九年十一月二十萬圓に、三十一年五月八十二萬圓を合併して二百四十萬圓となり、三十二年九月百五十萬圓に、大正六年五月一千万圓に、九年二月一億三千萬圓に増資したのである。而して此間に於ても幾つぞ銀行業の方策が考へられ備へられたる其の資本力下に抱擁する事を怠らなかつた、即ち明治十五年先づ創立第九十八銀行を其の傘中に入れ、二十八年日本商業銀行を、二十九年初明治銀行を何れも別設し漸次資本を投じて其の傘中に収めたるもの頗る多く戦前に於て本店六十支店支店數百六十三個此資本金千八百萬圓に達したが戦後以來最近に於ては本店數二十一支店支店數三百四十四個資本金一億八千八百三十餘萬圓に達せられた戦前に比し本店八、支店百五十一を増加し資本金一億五千餘萬圓を撤消したのである。試みに安田系統に屬する銀行全部を合同以前即ち大正十一年末現在に於て列挙すれば次の如くである。(單位千圓)

行名	公積資本	繰上資本	諸積立金	諸預り金
安田	10,000	10,000	11,000	11,000
三井	10,000	10,000	11,000	11,000
明治	10,000	10,000	11,000	11,000

以上二十行に續き日本銀行、帝國商業の二行も關係銀行となりしを以て合同前に於ては其數二十行に達したり而して安田家御もの家業は云ふまでもなく安田商店の名に依つて營業されたる兩待商であつて、後明治十三年初めに安田銀行を改稱されたものであるが此の安田家唯一の直系たる安田銀行を中心として叙上二十銀行の中先づ安田第三明治商業、信濃、京都、百三十一、日本商業、二十一、肥後、根室、神奈川の十一行が大正十二年十一月より合併して此處に於て銀行主たる本質を發揮するに至つたのである。銀行合同は最近金融界に於ける重要な問題の一として論議されてゐる處であるが、其の善悪可否は既に議論の餘地更に無く、要は只如何なる方法形式に於て何時之れを實現すべきかを残すのみである。此點に關しては本書第六章銀行合同論に於て詳述したから此處には省略する。此の意に於て安田家の同一資本下に存在する多數を一丸とした事は誠に時宜を得た處であり、此くして内容の充實を期し銀行の機能を完全に發揮し得られるのであるから國家の爲め慶賀すべき現象である。然らば此の合同に依つて幾千の内容を作り得たか云ふに、其の全部を記述する餘裕を有しないが就中主要銀行數行を挙示すれば次の如き數字を示し得る(大正十一年下期成績に依る)

行名	資本金	預り金	貸出金	有價証券	純益金
第三	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
安田	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
百三	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
日商	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
共一	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
肥後	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000
京都	10,000	10,000	10,000	10,000	10,000

これに依つて見るに預立金は繰上資本の五割強を有し預金は六割四五の間を往來してゐることが知られる。而して貸出は預金の九五六分に見當りて居るから此の資本力に對しては寧ろ其の運用率の低位に置かれ過ぎてゐるかの感がある。若し夫れ有價証券の所有高に至つては五倍以上の預金に對する二十七八分を所有し而も其の大部分が確實なる擔保力に富む公債債類なるが故に支拂準備としては殆んど現金に對するき性質のものであるに想ひれば、預金に對する支拂責任の如何に強固なるかを知り得ると同時に又其の内容の堅實程度を推測するに十分であらう。此の資本力を以て此の如く運用して毎期一千万圓を下らぬ純益を計上して行く同様の會計は誠に巨大なる哉の驚嘆を發するも宜なる哉である。

以上主要銀行七行に就て見るに其の總預金額五億圓を算する、之れに他の四行を加へて總計少くも六億の預金を擁した助定である。若し夫れ他の十餘行を加算して安田系に屬する各種銀行の資本力を計すれば預金は於て約八億、諸積立金約五千萬圓、更に繰上資本約一億二千萬圓を加ふれば總資本力實に九億七千萬圓に達し戦前の一億六千餘萬圓に比し正に六倍の増加であり殆んど隔世の感なき能はずである。今や

現任經營者 同行が斯くの如く優秀なる業績を持續し得る所以のものは、元より天下の安田の名に於て其の巨大なる資本力と博大な信用とを背景とする賜物である事否を疑ひ得るが、而も總ての事業を大成せしむる獨り資本力のみならず目的を達し得るにあらず、必ずや其處に經營に携はるる人の伴ふこと勿論である。即ち資本力を巧妙に運用する、事業は其の過半數を人の力に歸せねばならぬであらう。安田家一門の人々は暫く別個の問題とする、副司理結城豊太郎

氏以下の直接業務重役諸氏が如何なる手腕を揮ふる人物であるか、次に其の小傳を記して永久に記念せんとするものである。

取締役頭取 安田善次郎 取締役副頭取 結城豊太郎  
 常務取締役 竹内徳三郎 常務取締役 兵須 久  
 取締役 安田善一郎 取締役 安田善四郎  
 同 佐藤小一郎 同 村田房之助  
 同 丸山 懋男 同 杉原 惟敬  
 同 小坂 順造 同 吉野 尚田 利定  
 同 監査役 安田 善助 監査役 川西清兵衛  
 同 小坂 順造 同 吉野 尚田 利定

以上の諸重役の中、頭取たる安田善次郎氏は安田王國二代の常主であり善五郎善四郎善助の諸氏何れも皆其の一門であり風に世に定評あるが故に此處に叙述の煩を重ぬない。

**結城副頭取** 山形縣出身、明治十年五月生れ、三十六年東京帝大法科大學政科卒業、直ちに日本銀行に入り秘書役名古屋支店長を経て大阪支店長となり理事に選任せられ名聲大いに揚る、次で本店重要の地位に就くべかりしを秋恰も新時代適應策を講じ内部改革に努めつゝありし安田家の懸望する處となり、時の蔵相高橋是清氏、日銀總裁井上準之助氏等の徳意推挙するあり遂に之れを承諾して同王國改造總理格として入社し横濱の表見事に功を奏し安田家をより現代不易の基礎を更に鞏固ならしめた、今や安田王國に於ける絕對的責任之れに對する無限の重責を擔ひ鋭意専業業務の進捗に努力しつゝある。

竹内常務 氏は北海道の出、風に安田家に入り肥後銀行

株式 安田銀行營業成績累年比較表

資 産	第一 期				第二 期				第三 期				第四 期			
	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二
資本金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
準備金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
貸付金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未拂利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未拂利息及未経過引料	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

資 産	第一 期				第二 期				第三 期				第四 期			
	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二
資本金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
準備金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
貸付金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未拂利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未拂利息及未経過引料	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當 期 繰 越 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式 三井銀行 (本店東京市日本橋區本町四丁目)

- 一、資本金 壹 億 圓
- 一、拂込資本 六 千 萬 圓
- 一、諸積立金 五千五百四拾萬圓
- 一、諸預り金 四億三千四百萬圓
- 一、支店數 二十一 (大正十四年八月末日)

**沿革及資本移動狀態** 延寶天和の古き昔は敢て語らず明治維新の草創、金融統制の目的を達成し牢固強く可からざる礎を築き我々今日の世界に炬火の輝きを恐れずも我々の業礎を固めたる三井組の過去は之を語らずも我々に於ける經濟事情を口にする程の者、金融關係を論議する程の者、三井の

名を獲外にして之を論じ能はざるべきは童兒も尙ほ知らざるなきまで明白なる事實である。此の三井の名に依つて過去幾多事業中の主要事業たる三井銀行を説くべく其の過去の歴史を尋ねるが如きは、餘りに陳腐極まる方法たるを知るが故に之を詳述するの煩を避け、其の源流以來の資本的異動を記すのみに止めたい、既に總論の本邦銀行業史中に詳叙せる如く、維新草創時に於ける爲替會社の隆盛に依り國立銀行條例の制定を見るに至り、大藏當局の意欲に基き小野組と相謀り國立銀行創設に畫策して之を完成し第一國立銀行の開業を見るに至りしは實に當時の三井組の力であつた、此の如く國立銀行の創設者たる三井組の力であつた、對しては當りて國立銀行の改革を行ひ資本金二百萬圓の額たる銀

行となり更に二十六年合名會社と爲し三十一年資本金を五百萬圓に増加した、此間明治二十三年當時の財界大恐慌時代にして動搖激中に處しながらも毅然として優秀の業績を挙げ其の餘力を利して財界救済に努め少なからざる功績を現はした事は永久に記録すべき事蹟である、而して之等の事情に鑑み其の内容の充實に専念し井上侯を最高顧問とし當時の財政通として財界の傑傑中上川彦次郎氏を聘して内部の大刷新を企圖し業務の刷新、新時代の對策、總て氏の畫策を容れて此處に同行第一次改革の實は集つた、これ同行事業誌の上に記述せらるべき第一期事業の完成である、稱し得るのである明治三十四年中上川氏退くや其の後継者として早川千吉郎氏を迎へて専務理事とし、四十二年には時代の趨勢に適應すべく資本金二千萬圓全額拂込済の株式會社に變更し各部に新選の人材を配列して第二次改革を施し其の實力の堅固と營業範圍の擴大を期し、爾來年々共に業績隆々として進展の一途を辿つたのである、此間に於ては絶えず時流の趨勢を慮り各地主要都市に支店出張所を設置して金融の圓滑を圖り産業の開發に資する感頗る多かつた、就中歐戰當時に於ける活躍は著明しきものであり大正八年下期、遂に一躍五倍の一億圓増資を決定して之を實現した、而も此處に特筆を記すべきは、從來三井王國として外間の容易に窺ひ近づくを得なかつた二百餘十年來の傳統の慣習を打破して、増資新株の一部を公衆に附し多年不開門として固く閉鎖されて來た三井財團の門戸も漸く此處に開放され外部の投資を受け入れたる事爲せる一大英斷に出でた一事である、而して此の外部資本を代表すべく新たに原部太郎、横濱天橋本太郎、東京岸本太郎、大阪(大阪)三氏を重役に列して天下の金融機關として之を私せざるの範を垂るに至つた、併し乍ら此の如く幾分の外部資本は加味されたことは云へ三井銀行は依然として三井一門の背景たる事なく、此の一大財團の上に更に關東關西の代表的財力を抱擁したのであるから其の内容に一段の光彩を添へた事なる事である、此の如く時代と共に改革に改善を加へられたる同行は其の營業政策の大綱たる堅實主義に準據して運次大の度を加へ今や總預金四億三千四百萬圓を受け入れ五千萬圓の積立金を擁し本邦金融界の中堅となつて財界發達の使命を完全に遂行してゐるのである。

歐戰前後の業績 云ふ迄もなく歐戰前は我國經濟事情の上に著しき變化を齎した、就中金銀業界に最も顯著なるものあつた事も争ひ難き事實である、試みに之れを同行の業績の上に徴するに明治四十二年末に於て僅々八千六百萬圓程度の預金額に過ぎなかつたものが五年後の大正三年末には九千九百餘萬圓となり、歐戰好況時に入るに増大して更に五年後の大正八年末には一億三千五百餘萬圓と云ふ大なる額に達したのである、今大正二年末以降十三年末に至る各年末現在の業績を比較すれば左表の如くである(單位千圓)

年次	資本金	諸積立金	諸預り金
大正二年末	10,000	10,000	10,000
三年末	10,000	10,000	10,000
四年末	10,000	10,000	10,000
五年末	10,000	10,000	10,000
六年末	10,000	10,000	10,000
七年末	10,000	10,000	10,000

以上に依れば其資本力に於て大正二年末の諸積立金五百萬圓弱、諸預り金九千二百萬圓強之れを拂込資本二千萬圓弱に對比するに積立金は二割五分、預金は四割六に相當する、而して大正八年時預前に於ては六割九分強の積立金と十五倍の預金を有したる助定である、更に増資後の十年末には六千萬圓の拂込資本であるから積立金に於ては四割六分強、預金は約七倍強に相當する、此の数字の増進率を見るも如何に歐戰影響の甚大であつたかを知らし得るであらう、次に此資本力が如何に運用され来たかを見るに、二年末の貸出は預金に對する九二%に相當し、有價證券は三%、預金現金は九%に相當する、更に十年末には預金に對する八五%の貸出二八%の有價證券に運用され七%弱の現金預金に過ぎないのであるから之等を總括して其の營業狀況を推察すれば天下の三井たる背景と信用とを有し而して叙上の資本力を抱擁する大銀行として尙且つ非常に堅實なる營業振りであつた事を十分に窺ひ知れるのである、此の如く歐戰後の反動期に際するも依然如何等の影響を蒙らなかつたが併し財界四圍の狀況甚だ悲觀的材料のみを以て充滿され、加ふるに十一年下期に於ける關東大震災に觸りて被災直後に於ては幾分の打撃を免る能はず、即ち大正十三年上半期に於ては預金四億一千六百萬圓、同下期に於て四億八百五十萬圓と計減の傾向を示してゐるが而も貸出金並に積立金等の諸勘定を計算すれば其の内容如何を直ちに判定し得る、況んや預金漸減傾向は獨り同行のみならず殆ど全體的の趨勢であつて、必ずしも業況の隆替を表示するものでは無いのであるから、歐戰好況當時に比するも其の業績の上は何等の遜色あるを認め難いのである。

完備せる検査機關 銀行内容の良否は主として貸出金の善悪に比例する、隨つて經營當事者の苦心は預金吸収政策に極むよりも如何にして善良に貸付べきかを考慮されつゝある事勿論である、而して此の目的の爲めには常にあらゆる機關を利用し全力を挙げて取引筋の實力信用等を調査して是れを以て、本店營業部を通じて當務に據られた古島事務、歐本に調査研究する事一再ならず其の人格、其の手腕、當代に稀なる銀行家として定評あり、今更ら其の評議を試むるの蛇足たるを知るが故に一切之れを省略するが、其の令賢範子は即ち中川氏の女であり云はれ中上川氏の理想と抱負とは總て氏が繼承して今日の同行經營の首班に列してゐる譯で、其の從來の業績に徴し誰か其の後継者として完全に使命を果したるものと評し得る、事を一言附加して置きたい、菊本氏は曾て大阪支店長、本店營業部長として龜島氏は神戸支店長、大阪支店長として今井氏は京都支店長、本店營業部長として各職を歴任し財界の爲めに大に寄與する處あつた實務練達の士、今や等しく本店常務としての重任に處し池田主幹と共に一應専念業務の良好なる事に努力してゐる、原、岸本以下各取捨役何れも本邦財界の雄山崎取捨役は現に大阪支店長を兼務して關西樞樞たり、米山取捨役は曾て池田常務と共に常務取捨役として組織變更以來行務に盡したる功勞者であるが、三井家の信託事業經營と共に之れを主宰して現に三井信託の社長となり劇大に努めてゐる、其他大橋、杉以下の監督役は或は資本關係に於て或は多年實務に經に好適の士である、此の如く金融事業界有数の俊英なる材幹を集め常に善處の方策を講らぬのであるから業績年々共に隆盛の域に進むべきは一層の疑義を懐く餘地ないのである更に營業幹部として直接業務を擔當せる諸氏は左の通りである。

職務	氏名	職務	氏名
取捨役社長	三井源右衛門	常務取捨役	池田 成彬
常務取捨役	菊本 直次郎	同	龜島 廣吉
同	今井利喜三郎	取捨 役	米山 梅吉
同	原 富太郎	同	岸本 兼太郎
同	福井 菊三郎	同	男爵 三井 高精
同	山崎 吉次郎	監 査 役	大橋 新太郎
同	杉山 虎雄	同	山本 龜光
同	二宮 峰男		

する必要がある、此調査にして若しも正確を失せんか其の招徠する所の結果は實に怖るべきもので、世上銀行業の破綻を云ふに於て原因の一部分は此處に在るのである、三井銀行に於ては此點に留意して自から守るに同時に向相手方をも傷害せしめざらん事に専心してゐる即ち同行の所謂自衛檢查なる機關がそれであつて、平素の取引に對し相手方の實力と信用の程度を精細に調査して居る、斯くの如くにして同行は其の預金高に於ても本邦銀行中第一位(昨年十數行を合併した安田銀行を別して)を占め拂込資本の八割強に相當する積立金を有する最高級の銀行として内外の信用頗る博大なるものあり、其の前途の發展も亦遂に測り知れぬものがある。

現任重役及營業幹部 叙上の如く本邦は勿論、之れを歐米先進國の同業に比するも敢て遜色なかるべき一流の大銀行に基因するに勿論なりと云へ其背景と巨大なる資本力とを運用するの妙を得れば今日の聲價は得られなかつたであらう、此意味に於て同行今日の大を爲さしめたものは即ち資本力運用の巧妙なる人物の劃策宜しきを得た結果である、稱するも敢て不當の言ではあるまいと思ふ、過去數十年間、三井家の大黒柱として重きに任じた三井高保男は勿論、中上川早川等の諸氏は共に非常なる功勞者である、中上川氏の後を受けて鋭意進展策を講じた早川氏も後年政界に志し貴族院に入るに及んで三井家の家業たる事業と政治とを混同すべからずの規定に準じて銀行を辭し後年議院議員に就任したが不幸、此大經濟家を以て任地に客死せしめ則ち今は亡し、前記諸氏の後を受けて倍舊の活躍振りを示せる現任重役諸氏亦何れも當代の傑傑揃ひである、即ち

以上諸氏で三井社長は云ふ迄もなく一門の御々たる上であり常務取捨役池田成彬氏は舊米澤藩名門の出、夙に慶應義塾を卒業し直ちに米國ハーバート大學に入り歸朝後同行に入

職務	氏名	職務	氏名
文書課長	乳井 龍雄	經理課長	岡本徳次郎
内國課長	江藤 得三	外國課長	見城 重平
検査課長	福田秀五郎	調査課長	鶴田爲次郎
本店營業部長	田 守藏	本店外國營業部長	高木 隆吉
小樽支店長	本間 鐵郎	丸之内支店長	松元 幹藏
名古屋支店長	高代順四郎	横濱支店長	外山 知三
大阪支店長	山崎吉次郎	京都支店長	松本徳次郎
神戸支店長	三木國太郎	大阪西支店長	長井 村太
下關支店長	林原 兼賢	廣島支店長	土屋 治厚
若松支店長	宇木 幸吉	門司支店長	小原喜三郎
長崎支店長	丸山豊太郎	福岡支店長	渡邊 省二
出張所長	須之内啓一郎	上海支店長	土原計左右
出張所長	松井 和宗	孟買支店長	平野 保助
出張所長	松井 和宗	緬育支店長	小池 正彪

三井銀行營業成績累年比較表

項目	第二十六期 大正十一年 六月末	第二十七期 大正十二年 六月末	第二十八期 大正十三年 六月末	第二十九期 大正十四年 六月末	第三十期 大正十五年 六月末	第三十一期 大正十六年 六月末	第三十二期 大正十七年 六月末
資本金	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
積立金	33,300,000	33,300,000	33,300,000	33,300,000	33,300,000	33,300,000	33,300,000
法定期金	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000
別當金	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000
配當金	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000	3,300,000
使用人退職慰勞金積立金	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000	1,100,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
當座預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000



期當時の業績を比較研究するに、左の如き数字を示し定に隔世の感を抱かすには居られない(最世則)

第十期(明治三十四年上期)	第五十八期	第五十九期
資本金	400,000	400,000
積立金	100,000	100,000
新築積立金	100,000	100,000
定期預金	4,000,000	4,000,000
當座預金	3,000,000	3,000,000
諸預り金	3,000,000	3,000,000
他店ヨリ借	2,000,000	2,000,000
前季繰越金	1,000,000	1,000,000
當期純益金	1,000,000	1,000,000
合計	15,000,000	15,000,000

株式第一銀行營業成績累年比較表

項目	第五十二期	第五十三期	第五十四期	第五十五期	第五十六期	第五十七期	第五十八期
資本金	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000
積立金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
新築積立金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
定期預金	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000
當座預金	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
諸預り金	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
他店ヨリ借	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
前季繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當期純益金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
合計	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000

たのである、更に他面資産動向が如何なる変化を来したかを見るに、諸貸出金に於て四百八十餘萬圓に過ぎなかつたものが二億三千七百七十餘萬圓となり、一千五百餘萬圓の割引手形は八百六十餘萬圓に増加し、二百八十餘萬圓の割引手形所有高が一億八百六十餘萬圓に増加し、十餘萬圓に過ぎなかつた預け金は六百三十六萬圓に増加して、其他土地建物及金銀所有高何れも十餘萬圓乃至二十餘萬圓の増を有し、其利益金動向に於ても十四倍強の純益を挙げ一期十三萬餘圓の積立金は二百四十餘萬圓を積立られ、年九分の配當は一期三分の好配を維持し得るに至つたのである、即ち同行二十年間の業績は叙上の如く著しき變化を来してゐるのであるが、其の主要原因は勿論、時代の推移に伴ひ経済事情の急變せるに適應して進歩發達を遂げたことに非ざるを得ないのであるが併し乍ら同行を今日の隆盛に赴かしたる間接原因はこれを經營者の人的努力に歸せねばならぬ、即ち第一國立銀行より普通銀行に組織變更後其の播磨時代の重役たりし海澤榮一、西園寺公成、三井八郎次郎、佐々木勇之助、熊谷辰太郎、須藤時一郎、日下義雄の諸氏に依つて哺育せられ、爾來幾多の變遷を経ながらも常に優秀の地位を以て善處し、近代の重役諸氏に至つて全く爛熟の境地に入り、其の經營的手腕益々潤滑たるものあるに至つた實に稱すべきである、即ち現職取佐々木勇之助氏は三十餘年間同行重役にして専念其の大成に始終し來つた練達之士、現今本邦金融業者間に於て恐らく其の右に出づる者あるまいと稱せらるゝ程の定評あり、之れに配するに石井、野口、杉田の各常務を以てし其の陣容、眞に水も濡らさぬ概がある、更に西園寺、野口、西村の各取締役、土岐、竹山、山口の各監査役、何れも財界に於ける紳々の譽れある士のみを網羅してゐる、其の營業内容に於て、其の當面經營者に於て是の間然する所なき同行が、今日の信用隆盛を志すに於て是に於ては無いのである、終りに同行現任各重役諸氏の顔顔を列記すれば左の如し。

- 頭取 佐々木勇之助
- 常務取締役 石井 健吾
- 取締役 野口 彌三
- 取締役 杉田 富
- 取締役 西村 道彦
- 取締役 土岐 弘毅
- 取締役 山口 莊吉
- 監査役 竹山 純平
- 監査役 山口 莊吉

負債ノ部

項目	第五十二期	第五十三期	第五十四期	第五十五期	第五十六期	第五十七期	第五十八期
資本金	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000	400,000
積立金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
新築積立金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
定期預金	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000
當座預金	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
諸預り金	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
他店ヨリ借	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
前季繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
當期純益金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
合計	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000	15,000,000

利益金動向

項目	第五十二期	第五十三期	第五十四期	第五十五期	第五十六期	第五十七期	第五十八期
前期繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
当期純益金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
合計	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000

此ノ處分

項目	第五十二期	第五十三期	第五十四期	第五十五期	第五十六期	第五十七期	第五十八期
役員賞與金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
役員恩給及退職給與金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
積立金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
新株配當金(年)	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
後期繰越金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
創立五十年記念特別配當金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
重役特別慰勞金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
行員特別慰勞金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
準備金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式十五銀行

株式十五銀行(本店東京市五橋區本橋町七)

一、資本金 一億圓

一、拂込資本金 四千九百七十五萬圓

一、諸積立金 三千萬圓

一、諸預り金 三億五千萬圓

一、支店數 百一十一

所謂華族銀行の時

明治の初年、金融公債條例の發布に依り各藩主並に諸公卿は、其の封祿の代償として公債を下附せられたのであるが、時の右大臣岩倉具視公の主張に依り同族保全の計たらしむべく華族四百八十四名の出資に依り、皇室及政府の特別保護の下に明治十年五月資本金二千七百八十二萬六千圓を以て第十五國立銀行を創立するに至つた、之れを現今一億圓の大資本を擁し三億五千餘萬圓の預金を有す

株式会社十五銀行の設立... 華族に限る云々... 明治十九年華族世界財産法の制定...

財界指導者の恩人... 是れより前、其の創立當時に於て文明の先驅、之れを交通機關の發達に俟つた...

浪速銀行... 同業銀行の合併... 浪速銀行は大阪十人商會の一人たる千原屋平瀨...

資本の異動と銀行の合同... 既に記した如く同業銀行設立當初は資本金一千七百八十二萬六千六百圓であつた...

Table with columns for years (1910-1920) and financial data (資本金, 準備金, etc.). Includes a section for '浪速銀行' and '十五銀行'.

に依り其の計額を増加して大正五年には早くも四千五百五十萬圓に倍の増加を挙げた... 浪速銀行の増資...

以上各表に基き仔細に之れを點検すれば同業銀行の發展の跡は歴然と判明する... 浪速銀行の増資... 浪速銀行の増資...

松方公使... 松方公使は松方公使... 松方公使は松方公使... 松方公使は松方公使...



業の經營を離れ平取給して閑地に就かれたのである。  
 ◇青山取給後 是勝原地公十三代の支流、關白藤原師實の  
 後裔、大藏大輔幸成の後である幸成徳川秀忠に仕へ其子幸利  
 清州八幡城主となり其後九代の當主即ち氏である、安政元年  
 生れ、明治初年郡山藩知事となり後子爵を授けられた、貴  
 族院議員に選ばれ尚ほ多數會社社長に推選されてゐる。  
 ◇清水取給後 是新潟縣出身、高田藩士、安政三年九月生  
 れ、明治七年大藏省銀行局の官費生となり卒業後第十五國立  
 銀行即ち同行前身の創立に際し入社して以來重役として今日  
 に及ぶ最古重役である。◇淺野取給後 是廣島藩士、元治元  
 年五月生れ、其に同行重  
 役として今日に至る。◇松方取給後 是正義公の四男、多年  
 浪速銀行取給して或は其他多數會社の代表者として名あり  
 世人周知の事に屬するを以て之を省略す。◇久野取給後

は熊本縣の出身、天保十三年十一月生れ、維新當時藩主細川  
 家の財政整理に任じて多大の功あり、明治十年第十五國立創  
 立と同時に入り爾來支配人に擧げられ在任實に二十有餘年、  
 同行最大の恩人である、丁酉銀行其他多數會社の重役として  
 名あり評々たる實業家である。  
 尚ほ山本、咲花、岩倉の諸氏何れも當代知名の士であり關  
 口監督役は舊神戸川崎銀行常務として世に知られ小川監督役  
 亦舊丁酉銀行取給後支配人より常務として經營の重任に在り  
 し名重役、更に西脇監督に至つては東京府に於ける資産家  
 して多數銀行會社重役たり、以上を通過して當面の重役諸氏  
 何れも財界界外に鑽々の譽れある人物多し更に直接業務  
 當者たる支配人以下各部課長の幹部職に多し選材を有する  
 る同行の前途數級の飛躍を現出する事期して疑ふの餘地ない  
 であらう。

株式十五銀行營業成績累年比較表

資本金	負債ノ部					資産ノ部															
	資本	公積金	特別積立金	家屋建築積立金	配當平均準備金	現金	債權	貸出	株式	債券	土地	建物	什物	其他	未償還	未償還	未償還	未償還	未償還	未償還	
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

資本金	負債ノ部					資産ノ部															
	資本	公積金	特別積立金	家屋建築積立金	配當平均準備金	現金	債權	貸出	株式	債券	土地	建物	什物	其他	未償還	未償還	未償還	未償還	未償還	未償還	
1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式三菱銀行 (本店東京市丸の内)  
 一、資本金 五千萬元  
 一、拂込資本金 三千萬元  
 一、諸積立金 二千五百五十萬圓  
 一、諸預り金 三億七百五十四萬圓  
 一、支店數 十七

沿革及資本異動狀態 三菱の名は三井と共に我國の富  
 力を代表するの名稱であり、其の稱呼を冠し、其の資本に依  
 つて行はる、總ての事業に對して、事新らしく由來記を説く  
 事は所謂蛇足に類するものであるが故に敢て歴史を講く事は  
 省略するが、天下の三菱を背景とし其の資本力に依つて營ま  
 れる株式會社三菱銀行の聲價が、本邦金融業界に絶然として  
 不撓の地位を占めつ、ある事蓋し當然の理でなくてはならぬ  
 同行が株式會社たる一個獨立の法人として活動を開始したのは  
 僅々數年前の事ではあるが其の濫觴を知るには遠く明治十  
 八年に遡らねばならぬ、即ち國立銀行條例に準じて當時開業  
 中であつた第百十九國立銀行を三菱社が買収し其の掌中に入  
 れて之を經營し行名を其ま、踏襲して營業を繼續し來つた  
 のであるが同二十六年三菱合資會社の創立されるに共に同行  
 の經營も亦其手に移り更に二十八年十月十六日に至り初めて

三菱合資會社銀行部を改稱され、資本金百萬元を以て名實共  
 に三菱家の經營事業となつたのである。爾來時代の進運と財  
 界推移の趨勢に順應して諸般の施設著々進み、其の背景の  
 魁大なる信用と營業政策の巧妙なりし相俟つて業績大いに  
 舉がり幾多先進銀行を凌駕し、常に少武堂々我經濟界業界  
 の爲めに少なからざる貢獻を膾炙したのみならず、國家有事  
 の際に屢々資金を供給して國運の伸縮に資し更に國際金融市  
 場に於ても亦其の活躍の事實に枚舉に遑ないのである。此  
 くして歐戰好況時に入り財界四面の狀態に適應するの必要上  
 大正八年八月十五日組織を變更して株式會社三菱資本金五  
 千萬圓、拂込金三千萬圓の大資力を以て極度に膨脹せる財界  
 活動の動脈となり我經濟的進歩發展を助成し促進せし  
 め來つたのである。  
 歐戰好況時の業績 同行が組織變更を實現した時代は  
 即ち歐戰最高潮期であり、我國の經濟界は勿論、一切の國民  
 が總て戰時資金の運送に浮れ切つて居た時代である、此の時  
 歐洲の天地には既に休戰條約締結せられ、さしもの世界的大  
 動亂も正に平和克復の第一期に入つて砲火の戦ひは今や商業  
 戰貿易戰に轉じたのであるから、今まで世界商戰場を獨り舞  
 臺として我商顔に經濟の活躍を試みつ、あつた我經濟的脅威  
 は非常なもので、翌九年春には大阪増田銀行の破綻に端を發  
 し各地に銀行騒ぎが演ぜられ財界漸く戰後の大反動期に遭遇



退職手當基金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
賞與	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
配當金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
定期預金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
活期預金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
現金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

**株式 川崎銀行** (本店東京日本橋區本町一丁目)

一、資本金 一千萬圓  
 一、諸積立金 八百九十四萬圓  
 一、諸預り金 二億一千三百萬圓  
 一、支店數 三十四

其の資本力に依つて營業する、事業亦其の多きを算せらる、一財團、川崎八右衛門氏を中心とする一派は、亦實に本邦金融界に於て極めて強靱なる勢力を有してゐる、資本金一千萬圓、諸積立金の川崎銀行は此川崎一家の資本と勢力とを背景として我金融界に重きを爲してゐるのである、當行は明治十三年の創立であつて、行齡四十五、決算期を重なること實に九十期、誠に本邦銀行事業界最も古き歴史を有する古參銀行の一なのである、創立當初は勿論僅少なる資本を以て、先代川崎八右衛門氏の獨力創業に成つたものであるが、時流を察知するの眼目、經營に勝れたる才能は兩々相俟つて業績の興隆を招き、年々共に内容の大を加へ遂に二億一千餘萬圓に至つたのであつて、殆ん個人銀行に等しい當行が此の形となす預金を受入れるに至つた一事に徴して見ると、世人の川崎一家一門に對する信用の如何に博大であるかを察知するに十分であらう、信用を唯一の生命とする銀行業中、往々にして其の生命を保持し得られないもの多々ある現状に於て、而も事業未だ極期に達しなかつた創業時代に先驅者たり開拓者たる幾多の難關苦境に際會しつゝ、未だ曾て一度の不始末をも演ぜずして今日の盛大を致した同様の如きは、誠に模範的銀行として稱するも決して過當ではあるまい。

豫金の對する百分比

一年末	八年末	十四年末
貸出	100%	100%
金銀	100%	100%

即ち預金に對する貸出は常に八十乃至八十五%の間に置かれ十二年の震災時に於てすら尚ほ且つ八十%を出でない貸出である事は如何に警戒に努め堅實なる方針に營業されてゐるかを窺ひ知るに十分である、而も一面有價證券、預金現金有高に於て常に一割強を所有し、預金支拂準備の責任を完全に保持し得る事に考へ及ば、其の實質を推知する事決して至難ではあるまいと思ふ、此の如く預金者に對する誠意と忠實を信認せし、堅實主義に立脚して經營の任に當りつゝ、而も半期間より百八十八萬乃至百九十九萬圓の純利益を計し得る其の業績は、實に模範銀行としての名に背かないものである、而も最も推稱に値する一事は、此の多大の利益を計し上ながらも、其の配當に至つては資本關係より外部的株主に限定され利益金の大部分は準備積立乃至後期積立として内容の充實を圖りつゝある事である、此故に之を故に八百九十四萬餘圓の總資本金の約九割を積立てるべき半期間には資本を完全に銷却し得る巨額の準備力を有してゐるのである、此の如何の方面より比較論評するとも、同様の業績は優良銀行中の優良なるものであり、帝都一流銀行の間に伍して何れの點に於ても遜色のない堂々たる銀行であるに稱するも決して誇美の言ではあるまいと思ふ。

經營者 此く良好なる業績を挙げつゝ、我國金融界に紅雲の氣を吐きつゝ、原因するものは、要するに川崎家なる背景を有する理由に由るが、又一面經營者自身の事業經營手腕に卓越せる事も有力なる原因とせねばならぬ、試みに現重役諸氏を列挙すれば

代表取締役 川崎八右衛門 副代表取締役 川崎 常務取締役 野村金五郎 常務取締役 杉浦 甲子郎 常務取締役 河合 謙二 常務取締役 安藤 浩 取締役 渡邊 眞平 監査役 伊東秀之介 監査役 加倉井邦彦

**株式 川崎銀行營業成績累年比較表**

項目	第八十四期		第八十五期		第八十六期		第八十七期		第八十八期		第八十九期		第九十期	
	六月末	十二月末	六月末	十二月末	六月末	十二月末	六月末	十二月末	六月末	十二月末	六月末	十二月末	六月末	十二月末
資本金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸積立金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸預り金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
諸貸出金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
有價證券	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
預金及現金	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
拂込資本	10,000,000	10,000,000												













假受	元六、八〇〇	三、三〇〇、〇〇〇
前明繰入金	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
其他共合計	三、〇〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇

神田銀行

- 一、資本金 一千 萬圓
- 一、拂込資本 六百二十五萬圓
- 一、諸積立金 三百十五萬圓
- 一、諸預り金 一千五百四十萬圓
- 一、支店數 五

起債市場の發達 歐戰後に於ける我國起債市場の發達は極めて著しく、其に長足の進歩を示してゐる。殊に大正九年財界反動後に於て最も目覚ましい活況を呈現したのである。試みに之れを社債發行額に就て見ると大正三年六百九十六萬一千圓程度なりしが、漸次増加して同七年には七千八百萬圓、八年には一億四千九百萬圓、最近の十三年上下兩期間を通じて三億四千九百萬圓に達し、十四年上半期間に於て二億四千八百萬圓を發行したるを以て、而して之れに加ふる銀行債券を以てすれば半期間少くも三億七千八百萬圓の發行高に達する譯であるが、之等の諸債が殆んど完全に消化され行くのは甚だ興味ある現象であるが、此は要するに從來行はれ來つた株式投資が財界反動以來銀行預金となり更に利便の良い社債投資に轉換された結果と見るを得やう。

神田銀行營業成績累年比較表

項目	第四期	第十二期	第十四期	第十五期
資本	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
儲蓄	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
負債	13,000,000	13,000,000	13,000,000	13,000,000

項目	第四期	第十二期	第十四期	第十五期
現金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
預金	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
債権	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資産	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000

小池銀行

- 一、資本金 三百萬圓(拂込済)
- 一、諸積立金 八十五萬圓
- 一、支店數

同行も亦神田銀行に其の性質に於て殆んど同一である。即ち其の營業科目とするは國債、地方債、社債の引受及其買入、金融仲介、一般銀行業務であるが就中社債債券の引受を主要業務とし、一般業務、殊に預金受入方面に於ては必ずしも多きを欲しない云ふ傾向にあり普通銀行に其の特色を異にしてゐる。隨つて其の期末預金残高の如きも多きも五百六百萬圓を出でないで寧ろ貸出の多からん事に關心してゐる。

小池銀行營業成績累年比較表

項目	第四十八期	第五十六期	第五十八期	第五十九期
資本	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
儲蓄	850,000	850,000	850,000	850,000
負債	3,850,000	3,850,000	3,850,000	3,850,000

通 知 預 金		別 入 預 金		借 入 手 形		再 引 手 形		仕 切 手 形		未 償 還 債 券		前 期 繰 越 金		其 他 共 計		資 産 部	
1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000	1,010,000

**株式会社 早川ビル・ブローカー銀行**  
(本店日本橋區本町)

一、資本金 二百五十萬圓  
一、拂込資本 百二十五萬圓  
一、諸積立金 十三萬五千圓  
一、支店數

商取引の發達に伴ひ手形利用は益々頻繁となり此處に手形仲介を業とする銀行の必要なるのは當然の理である、此の目的の下に手形取引の圓滑を圖り而して益々其の發達を助成せしむる使命を帯びて設立されたもの即ちビル・ブローカー銀行である、同行亦此大任務を帯びて大正七年下期に創業されて以來、年と共に發展し今や帝都に於ける同業中の白眉と

して重きを以て迎へられてゐる、其のコール取扱高の如き頗る多額に上り、十四年上半期間に於て四億七千萬圓を貸出し、四億五千萬圓を返済して残高二千五百餘萬圓を有し、割引手形亦一千餘萬圓の期末残高を計上してゐる、其の實質此の如きが故に一般預金受入れに就ては見るべき程の数字を有しな

取 締 役 早川芳太郎 取 締 役 早川 佐七  
取 締 役 早川 健利 監 査 役 早川周之助  
監 査 役 駒木銀三郎  
相 談 役 片山 繁雄

株式会社 早川ビル・ブローカー銀行 營業成績比較表

負 債 ノ 部	第 七 期	第 十 一 期	第 十 三 期	第 十 四 期
資 本	250,000	250,000	250,000	250,000
借 入	130,000	130,000	130,000	130,000
未 償 還 債 券	120,000	120,000	120,000	120,000
前 期 繰 越 金	10,000	10,000	10,000	10,000
其 他 共 計	10,000	10,000	10,000	10,000

株式会社 八十四銀行 (本店東京市京橋區南町三丁目)

一、資本金 五百萬圓  
一、拂込資本 二百三十萬圓  
一、諸積立金 七十九萬圓  
一、諸預り金 一千六百四十萬圓

東京に於ける素封家として知られた中澤彦吉氏の關係事業十數種を算する中、最も代表的のものは實に銀行業である、即ち八十四銀行と中澤銀行とは共に氏の資本に依つて爲されるもので、帝都金融界に於ても相當優越の地歩を占め信用も厚く毎期末一千四百萬圓の預金高を示してゐる、大正十四年

上半期末諸勘定を見るに、諸預金一千三百九十九萬餘圓で前期よりも四十餘萬圓、前々期に比し百萬餘圓の減少であるが一方貸出に於てはコールローン五十二萬九千九百圓を別として一千七百八十四萬餘圓で前期よりも三百五十萬圓の増加である、而して之に對する有價證券、預金現金等合せて四百萬圓を有してゐるから預金の三十%に相當する支拂準備がある勘定であり更に百萬圓以上の積立金をも有してゐるから内容は比較的充實した銀行である、現任重役は左の如氏である

取 締 役 中澤 彦吉 取 締 役 田村藤兵衛  
取 締 役 西出孫左衛門 同 久保 彦助  
同 山田 岩松 同 兼支配人 山田丈太郎  
監 査 役 秋元三左衛門 監 査 役 志賀 貞温

株式会社 八十四銀行 營業成績比較表

負 債 ノ 部	下 十 二 期	下 十 三 期	下 十 二 期	下 十 三 期
資 本	500,000	500,000	500,000	500,000
借 入	230,000	230,000	230,000	230,000
未 償 還 債 券	230,000	230,000	230,000	230,000
前 期 繰 越 金	79,000	79,000	79,000	79,000
其 他 共 計	1,640,000	1,640,000	1,640,000	1,640,000

株式会社 八十四銀行 營業成績比較表

資 産 ノ 部	下 十 二 期	下 十 三 期	下 十 二 期	下 十 三 期
現 金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
有 價 證 券	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000
預 金	3,399,000	3,399,000	3,399,000	3,399,000
其 他 共 計	1,640,000	1,640,000	1,640,000	1,640,000

株式 帝國商業銀行 (本店日本橋區本町)  
 一、資本金 五百萬圓  
 一、拂込資本 二百七十五萬圓  
 一、諸積立金 三萬五千圓  
 一、諸預り金 一千七百三十九萬圓

當行は明治二十七年十二月の創立で、歴史は相當古く東京宛  
 町に本據を有し、証券市場關係者の金融機關として活躍し、戦  
 好況期には毎期十數萬圓の純益を計上し、隆盛を極めたも  
 のであるが、戦後の反動期に入り、業績は次第に下降し、三十  
 一萬圓の損失を計上するに至り、併し其後經營  
 の上に大いに改善する處あり漸次損失を補填すること共一方

株式 帝國商業銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
資本	500,000	100.0%	500,000	100.0%	500,000	100.0%
拂込資本	275,000	100.0%	275,000	100.0%	275,000	100.0%
諸積立金	35,000	100.0%	35,000	100.0%	35,000	100.0%
諸預り金	17,339,000	100.0%	17,339,000	100.0%	17,339,000	100.0%
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

資本關係に於ても其の經營を安田家の手に移して以來、鋭意  
 新を加へられ、其の結果として本年上期には五萬一千圓の營  
 業利益を算し、前期純損益金二十三萬二千圓の一部を補填し、結  
 局十八萬一千餘圓の損失を後期に繰越したのであるが、財界  
 不況の際、一期半期に之れを補填し、盡す事は到底不可能であ  
 るが、而も今や漸く景氣立ち直りの傾向にあるを以て、業績復  
 活の期も遠きに非ざるべしと観測される、殆んや安田王國を  
 背負に有し左の如き諸重役を有するに於て、同様の前途は實  
 に有望たるを失はず、其の内容何等の疑懼を懐くを要しない  
 事勿論である、現重役左の如し。

資産ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
未拂込資本	...	...	...	...	...	...
諸積立金	...	...	...	...	...	...
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

株式 日比谷銀行 (本店日本橋區本町)

一、資本金 三百萬圓  
 一、拂込資本 百五十五萬圓  
 一、諸積立金 七十五萬圓  
 一、諸預り金 一千二百四十萬圓

瓦斯系紡績の創設者として、死地に瀕せる富士紡績再生の  
 恩人として、兩社合併に依り富士瓦斯紡績の名門であるに至ら  
 した本邦紡績事業界の先覺者、日比谷平吉君の名は我が  
 財界史上に銘記すべき功勞者の一である、其の翁が帝都商  
 業街の中心地帯を盤せる日本橋區本町から人形町一帯への興  
 業機關は勿論、總承布問屋の取引機關たるはむべく明記

株式 日比谷銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
資本	300,000	100.0%	300,000	100.0%	300,000	100.0%
拂込資本	155,000	100.0%	155,000	100.0%	155,000	100.0%
諸積立金	75,000	100.0%	75,000	100.0%	75,000	100.0%
諸預り金	12,400,000	100.0%	12,400,000	100.0%	12,400,000	100.0%
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

二十八十一月を以て創設したもの、即ち日比谷銀行であつ  
 て、爾來堅固なる營業政策を以て世に知られ、商街一帯に盤石  
 の如き堅固なる地歩を築き、以て今日に及んだのである、之れ  
 ミ其の性質を等しくするもの夫れ大阪に於ける尾州銀行なら  
 んが、兩者共に總承布問屋に於ける綿々の人物を以て經營され  
 てる、即ち日比谷銀行現頭取日比谷平吉氏は平左衛門君の  
 四男、慶應理財出身の新鋭、年齒漸く三十六の壯年實業家  
 である、長兄新次郎、義兄任次郎の諸氏と共に父業の大成に  
 努力しつゝある、現重役左の如し。

資産ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
未拂込資本	...	...	...	...	...	...
諸積立金	...	...	...	...	...	...
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

株式 森村銀行 (本店日本橋區本町三丁目)

一、資本金 五百萬圓  
 一、拂込資本 二百萬圓  
 一、諸積立金 百萬圓  
 一、諸預り金 一千八百八十萬圓

當行は森村組の金融機關として、先代森村市左衛門男爵の設立  
 に成り、明治三十年六月資本金五十萬圓の合名會社を創立す

株式 森村銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
資本	500,000	100.0%	500,000	100.0%	500,000	100.0%
拂込資本	200,000	100.0%	200,000	100.0%	200,000	100.0%
諸積立金	100,000	100.0%	100,000	100.0%	100,000	100.0%
諸預り金	18,800,000	100.0%	18,800,000	100.0%	18,800,000	100.0%
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

これが爾來行運大いに發展し、殊に歐戰好況期には異常の膨脹  
 を來し、大正九年百萬圓に増資し、十三年五百萬圓の株式會社に  
 組織を變更して今日に及んだものである、現在拂込資本二百  
 萬圓、積立金百萬圓、諸預り金一千八百八十萬圓を有し、諸貸出  
 一千三百二十萬圓に達し、半期間よく二十萬圓近き純利益を計  
 上してゐる、森村男爵家の銀行だけに、堅實主義の營業方針を  
 相俟つて内容は信頼するに十分である、現頭取は男爵森村開  
 作氏。

資産ノ部	下十二年		下十三年		下十四年	
	金額	前年比	金額	前年比	金額	前年比
未拂込資本	...	...	...	...	...	...
諸積立金	...	...	...	...	...	...
其他	...	...	...	...	...	...
其他共合計	...	...	...	...	...	...

株式 尾張屋銀行 (本店日本橋區本町)

一、資本金 百萬元(拂込済)  
 一、諸積立金 五十萬圓  
 一、諸預り金 一千六百六十萬圓

明治三十三年二月の設立、現在百萬圓拂込の資本を有し一

株式 尾張屋銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年	下十三年
資本金	100,000,000	100,000,000
諸積立金	50,000,000	50,000,000
諸預り金	1,660,000,000	1,660,000,000
其他	...	...
合計	1,810,000,000	1,810,000,000
資産ノ部		
未済資本	...	...
手形	...	...
引当金	...	...
其他	...	...
合計	1,810,000,000	1,810,000,000

株式 第三十六銀行 (本店八王子市橋本町)

一、資本金 三百萬圓  
 一、諸積立金 百五十萬圓  
 一、諸預り金 一千八十萬圓

明治十一年四月第三十六國立銀行として創立された歴史ある銀行、歐戰前七十萬圓の資本金なりしを大正五年百萬圓に、十三年三百萬圓に増資され安田系統に属する東京府下に於け

株式 第三十六銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年	下十三年
資本金	300,000,000	300,000,000
諸積立金	150,000,000	150,000,000
諸預り金	1,800,000,000	1,800,000,000
其他	...	...
合計	2,250,000,000	2,250,000,000
資産ノ部		
未済資本	...	...
手形	...	...
引当金	...	...
其他	...	...
合計	2,250,000,000	2,250,000,000

る堅實なる銀行として知られてゐる、現在一千百餘萬圓の預金を有し積立金亦三十餘萬圓に達してゐる、行歴の割合に積立金少きは歐戰當初の業況振はざりし結果に因るものか、現任重役左の如し。

頭取 安田 善造 常務取締役 田野 實常  
 取締役 飯田 武也 取締役 栗原 久作  
 同 同 同 同 同 同  
 監査役 綿貫 清久 監査役 園部 潜

株式 麴町銀行 (本店麹町區麴町五)

一、資本金 一千十萬圓  
 一、諸積立金 五百三十五萬圓

當行は川崎系の銀行であり其の別動隊として山手方面に於ける有力なる銀行である、明治二十二年十月の創業で行動費に三十萬圓を加へ、大正十二年末までは百萬圓の資本金であつたが十三年下期一圓一千萬圓を増加して總資本金一千十萬圓

株式 麴町銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年	下十三年
資本金	10,000,000	10,000,000
諸積立金	5,350,000	5,350,000
諸預り金	...	...
其他	...	...
合計	15,350,000	15,350,000
資産ノ部		
未済資本	...	...
手形	...	...
引当金	...	...
其他	...	...
合計	15,350,000	15,350,000

同三つた、其の背振が川崎系であるだけに堅實なる營業力に相俟つて世人の信用は頗る博大である、川崎秀雄、野々村金五郎、仁木傳吉、鴨川清、倉本庄五郎、高羽惣兵衛、河合鉄二の諸氏が重役であるが多くは川崎銀行の重役である。

株式 中澤銀行 (本店京橋區南町)

一、資本金 五百萬圓  
 一、諸積立金 三百五十四萬圓  
 一、諸預り金 八百十五萬圓

株式 中澤銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年	下十三年
資本金	500,000,000	500,000,000
諸積立金	35,400,000	35,400,000
諸預り金	81,500,000	81,500,000
其他	...	...
合計	666,900,000	666,900,000
資産ノ部		
未済資本	...	...
手形	...	...
引当金	...	...
其他	...	...
合計	666,900,000	666,900,000

當行は中澤彦吉氏の經營に成り八十四銀行と姉妹關係にある、大正九年三月財界の好況期に創設されて設立され爾來堅實主義に立脚して相當の地盤を作り上げ業績亦見べきものがある、現在重役は中澤彦吉、西村四郎、中澤健一、高橋琢磨、平澤内記、松本忠正、白井博之の諸氏である。

株式 泰昌銀行 (本店京都府南河内郡)

- 一、資本金 五百萬圓
一、拂込資本 二百萬圓
一、諸積立金 三十五萬圓
一、諸預り金 七百十四萬圓

當行は大正十一年二月資本金百萬圓を以て設立された十五

株式 泰昌銀行 營業成績比較表

Table with columns for years (下十二年, 下十三年) and rows for various financial metrics like 資本金, 拂込資本, 諸積立金, 諸預り金, 負債ノ部, 資産ノ部.

株式 永樂銀行 (本店京都府西門外)

- 一、資本金 七百萬圓
一、拂込資本 百七十五萬圓
一、諸積立金 六萬六千圓
一、諸預り金 六百八十五萬圓

我國貿易業者間の巨額として知られた高田商會の當主、高田軍三氏に依つて大正十年四月設立されたものであるが、財界反動期の不況に際せられて大正十四年二月高田商會の破綻

株式 永樂銀行 營業成績比較表

Table with columns for years (下十二年, 下十三年) and rows for various financial metrics like 資本金, 拂込資本, 諸積立金, 諸預り金, 負債ノ部, 資産ノ部.

株式 西脇銀行 (本店日本橋區新右衛門町)

- 一、資本金 五百萬圓
一、拂込資本 三百萬圓
一、諸積立金 九十八萬圓
一、諸預り金 六百十九萬圓

東京の豪商家として實業界の雄將として名ある西脇三郎氏一門の銀行である、明治四十三年四月の創立、百萬圓の資本金なりしも歐戰後の時勢に適合すべく大正九年五百萬圓に増資し二百萬圓の拂込を終つた、從來堅實な唯一の信條として手堅く經營し來つたのであるが、諸種の關係事業其他の貸出は相當多額に上つて十四年六月末現在では一千四百萬圓を超過してゐる、併し其大部分が完全なる手形貸付であり

株式 西脇銀行 營業成績比較表

Table with columns for years (下十二年, 下十三年) and rows for various financial metrics like 資本金, 拂込資本, 諸積立金, 諸預り金, 負債ノ部, 資産ノ部.

株式 辛酉銀行 (本店日本橋區區三丁目)

- 一、資本金 六百三十萬圓
一、拂込資本 二百一萬三千圓
一、諸積立金 五百六十三萬圓

當行は明治三十四年一月創立された豊山銀行三橋濱營業銀行の兩行が合併(大正十年)して改稱せるものであるが實業に依る損害等可成り深刻なりし爲め行運面白からず十二年下期に於て三十三萬九千餘圓の損失を計上し積立金其他に於て補填し尚ほ九萬三千餘圓を後期に繰越し十三年下期に至るも之れが恢復を見ず十萬圓の繰越損を計上するの已むなきに至つた、當時の業績左表の如し。

株式 辛酉銀行 營業成績比較表

Table with columns for years (下十二年, 下十三年) and rows for various financial metrics like 資本金, 拂込資本, 諸積立金, 諸預り金, 負債ノ部, 資産ノ部.





會社 田中銀行 (本店日本橋區本町)

天下の承平で通つた田中平八氏の創設した銀行たる事に於て有名である。明治十六年十月の設立、久しく合資會社組織なりしを時流に副ふべく大正六年百萬圓拂込済の株式會社に變更、堅實なる營業方針を以て世人の信用を得ること多大重役諸氏も總て田中家一門のみを以て滿たされてゐる。現代平八氏を始め銀之助、虎之助、善吉、高田家に入るの諸氏何れも知名の士である。

會社 田中銀行營業成績比較表

項目	下十二期年	下十三期年
諸預金	4,211,000	4,211,000
貸付金	1,127,000	1,127,000
手形	1,127,000	1,127,000
引当金	1,127,000	1,127,000
他	1,127,000	1,127,000
支拂	1,127,000	1,127,000
未支拂	1,127,000	1,127,000
未拂	1,127,000	1,127,000
前期繰越	1,127,000	1,127,000
当期繰越	1,127,000	1,127,000
其他	1,127,000	1,127,000
合計	11,270,000	11,270,000

會社 鐵業銀行 (本店日本橋區小馬場)

明治三十三年四月の創業、歐戰前五十萬圓の資本であつたが戰後の財界暴落に準ずべく二百萬圓に増資し百五十萬圓の拂込資本である。十四年上半期末には二百八十四萬圓の預金、三百七十四萬圓の貸出を有し二十萬二千餘圓の純利益を計上してゐる。其の行名の示す如く東京在仕鐵業仲間唯一の金融機關であり株主は多く個個開明である。随つて蒸原取を初め中尾、梅岡、加藤、佐野の諸重役何れも幹

會社 鐵業銀行營業成績比較表

項目	下十二期年	下十三期年
諸預金	11,270,000	11,270,000
貸付金	1,127,000	1,127,000
手形	1,127,000	1,127,000
引当金	1,127,000	1,127,000
他	1,127,000	1,127,000
支拂	1,127,000	1,127,000
未支拂	1,127,000	1,127,000
未拂	1,127,000	1,127,000
前期繰越	1,127,000	1,127,000
当期繰越	1,127,000	1,127,000
其他	1,127,000	1,127,000
合計	11,270,000	11,270,000

會社 東京商業銀行 (本店東京市)

甲州財閥の雄若尾家一門の御曹子若尾鴻太郎氏を頭取とする同行は創立以來二十有七年の歴史を經たす老練銀行である。資本も少く比較的零細な預金を集めてゐる關係上行動の古き割合に業績は上つてゐないが、若尾家の手に移つてからかなり刷新が加へられて其の前途に望みを囑せらるゝに至つた。

會社 東京商業銀行營業成績比較表

項目	下十二期年	下十三期年
諸預金	11,270,000	11,270,000
貸付金	1,127,000	1,127,000
手形	1,127,000	1,127,000
引当金	1,127,000	1,127,000
他	1,127,000	1,127,000
支拂	1,127,000	1,127,000
未支拂	1,127,000	1,127,000
未拂	1,127,000	1,127,000
前期繰越	1,127,000	1,127,000
当期繰越	1,127,000	1,127,000
其他	1,127,000	1,127,000
合計	11,270,000	11,270,000

會社 富倉銀行 (本店日本橋區馬場町)

設立 明治三十三年十月  
資本金 百五十萬圓

明治三十三年十月の創立、歐戰前五十萬圓の資本であつたが戰後の財界暴落に準ずべく二百萬圓に増資し百五十萬圓の拂込資本である。十四年上半期末には二百八十四萬圓の預金、三百七十四萬圓の貸出を有し二十萬二千餘圓の純利益を計上してゐる。其の行名の示す如く東京在仕鐵業仲間唯一の金融機關であり株主は多く個個開明である。随つて蒸原取を初め中尾、梅岡、加藤、佐野の諸重役何れも幹

會社 富倉銀行營業成績比較表

項目	下十二期年	下十三期年
諸預金	11,270,000	11,270,000
貸付金	1,127,000	1,127,000
手形	1,127,000	1,127,000
引当金	1,127,000	1,127,000
他	1,127,000	1,127,000
支拂	1,127,000	1,127,000
未支拂	1,127,000	1,127,000
未拂	1,127,000	1,127,000
前期繰越	1,127,000	1,127,000
当期繰越	1,127,000	1,127,000
其他	1,127,000	1,127,000
合計	11,270,000	11,270,000

今たる鐵道である處に内容の堅實性が窺はれる。天下これ程堅い銀行はあまりない云ふのは必ずしもシラレ氣ではない。現在重役左の如し。

取 梅岡正吉 桑原七兵衛 取 池田 金八  
取 梅岡 正吉 同業支配人 井上定次郎  
取 梅岡 次郎 監査役 加藤安四郎  
同 梅岡 平七



株式富倉銀行營業成績比較表

Table with 12 columns: 負債ノ部 (Capital and Reserves), 貸出ノ部 (Loans), 其他ノ部 (Other). Rows for 12th and 13th periods.

株式高砂商工銀行營業成績比較表

設立 大正八年八月

資本金 二百萬圓

Table with 12 columns: 負債ノ部, 貸出ノ部, 其他ノ部. Rows for 12th and 13th periods.

株式高田農商銀行營業成績比較表

設立 明治三十三年五月

資本金 百萬圓

Table with 12 columns: 負債ノ部, 貸出ノ部, 其他ノ部. Rows for 12th and 13th periods.

Table with 12 columns: 負債ノ部, 貸出ノ部, 其他ノ部. Rows for 12th and 13th periods.

株式東京山口銀行營業成績比較表

設立 大正六年六月

資本金 百萬圓

Table with 12 columns: 負債ノ部, 貸出ノ部, 其他ノ部. Rows for 12th and 13th periods.

株式東京山中銀行營業成績比較表

設立 大正二年五月

資本金 百萬圓

Table with 12 columns: 負債ノ部, 貸出ノ部, 其他ノ部. Rows for 12th and 13th periods.

株式 大信銀行 (本店神田區湯島町)  
設立 大正五年五月  
資本金 百萬圓

拂込高 二十五萬圓  
諸預高 百八十二萬圓  
重役 久保田勝美、甲藤通、川田豊吉、松山陽太郎、甲藤太郎

株式 大信銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年	
	期年	期年	期年	期年
資本	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
預積立	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
特別預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
常預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
他定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
支拂利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期繰越	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式 塚越晝夜銀行 (本店日本橋區本町)  
設立 大正八年四月  
資本金 百萬圓

拂込高 四十三萬八千圓  
諸預高 八十萬圓  
重役 塚越正司、田口勝次郎、武内利太郎、塚越常吉

株式 塚越晝夜銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年	
	期年	期年	期年	期年
資本	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
預積立	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
特別預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
常預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
他定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
支拂利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期繰越	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式 岡本銀行 (本店日本橋區江町)  
設立 明治二十二年十二月  
資本金 二百萬圓

拂込高 五十五萬圓  
諸預高 四十七萬二千圓  
重役 岡本善三、岡本三郎、岡本完藏、岡本四郎

株式 岡本銀行 營業成績比較表

負債ノ部	下十二年		下十三年	
	期年	期年	期年	期年
資本	200,000,000	200,000,000	200,000,000	200,000,000
預積立	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
特別預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
常預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
他定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
支拂利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期繰越	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

### 3、大阪府總論

本邦を代表する商業都市としての地位を有する大阪は、實に東洋に於けるマンチエスタールたるを失はぬ。町人の大阪、富の大阪、封建時代より今日に至る間の大阪の全生命は實に町人たる處にあつた。富の集散地たる點にあつたのである。此故に金融機關の如きも夙に發達し其兩臂をこし三百六十餘年の昔から遠く今日及んだ河津を始めて多くの金融業者を數へ得るのであるが、組織的の制度に依る金融機關として出現したのは之亦獨立銀行條例發布以後に於てのみならず、而も當時に於ける前取引は頻りに増進したるは云々、尙ほ經濟的膨脹率甚だ強弱であつた爲めに、大規模な取引なくして其機關の必要を要せず大銀行の出現は認められなかつたのであるが、時代の進歩は一日も止まらず明治二十年國立銀行の調劑當時には國立の業務繼承、或は私立銀行の新設等に依つて著しく事業の勃興を見るに至つた。當時最も勢力を有したものは▲三十四(岡田治助氏)▲三十三(平瀬源之助氏)(後の浪速銀行)▲四十二(田中市兵衛氏)(後の北濱銀行)▲百三十三(松本重太郎氏)▲十三(鴻池家)▲百四十八(山口吉兵衛氏)等何れも大阪を代表する銀行として有名であつた。其他加島屋廣田家の加島銀行、土居通夫、岸本五兵衛氏等の大阪實業、外山修造、宇徳平、平瀬源之助氏等の大阪貯蓄等も亦夫れく相當の地位を固め、兎も角も大阪金融界の搖籃期には群衆的の状態で、それだけ利便を多く又自然大成を促進される事となつて比較的短時日の間に、よく今日の盛大成を招けるに至つたのである。此間に於て小銀行合同の實現相繼ぎ漸次其の數を減少し、大正十二年末現在の調査では廢工銀行を別として大阪府に本店を有するもの普通銀行五十行(拂込資本二億二千九百六十七萬九千圓)貯蓄銀行八行(三百十萬八千圓)となり、最近に至つては更に減少して普通貯蓄を合して三十行を多く出でない云々現狀である。而して此間資本金百萬圓以上を有するものは、十二行であるが左に預金高の順序に依り之れを表示する。(單位千圓)

#### 預金五千萬圓以上を有する銀行

住友	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
三井	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
東京	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
大阪	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
三十三	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
三十四	2,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000

#### 預金五百萬圓未満の銀行

山崎	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
加島	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
近江	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
野村	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
藤田	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
大野	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
藤本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
日本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
尾州	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
富田	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
國分	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
五十一	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
和泉	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
大阪	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
和泉	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
貝塚	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
相互	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
川上	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
泉	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
西大	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
高六	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
高木	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
天木	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

**住友銀行 貸出 金銀有高 有價証券**

大正七年	一三、五六一、〇〇〇	一三、六〇〇、〇〇〇
八年	一四、九〇〇、〇〇〇	一五、〇〇〇、〇〇〇
九年	一六、三〇〇、〇〇〇	一六、四〇〇、〇〇〇
十年	一七、七〇〇、〇〇〇	一八、一〇〇、〇〇〇
十一年	一九、一〇〇、〇〇〇	一九、九〇〇、〇〇〇
十二年	二〇、五〇〇、〇〇〇	二一、七〇〇、〇〇〇
十三年	二一、九〇〇、〇〇〇	二二、六〇〇、〇〇〇

以上は銀行集会所組合銀行のみの成績であつて、組合に入らない銀行の分を加ふれば尚ほ多額を算する譯であるがそれは比較的少数であるから大體の趨勢は以上によつて判然とする、以下直ちに各銀行別の業績に移る事とす。

**株式大阪農工銀行** (大阪市東區今福三丁目)

農工銀行條例に依つて明治三十一年設立、以來既に二十餘年、其間時勢の要求に適應すべく度々増資を行ひ現在七百餘萬の資本を有し此種資本六十二萬五千萬、而して農工債券を發行すること前後六十二回、其他債權全部引受等をして大正十四年六月末總額四千二百六十八萬一千餘圓に達し四百七十五萬五千餘圓を償還して現在高千七百九十二萬五千餘圓を有してゐる、更に定期預金其他諸預り金六百六十六萬六千餘圓を有してゐる。

**株式大阪農工銀行營業成績年比較表**

項目	第四十八期 大正十一年 六月末	第四十九期 大正十二年 十二月末	第五十期 大正十三年 六月末	第五十一期 大正十四年 十二月末	第五十二期 大正十五年 六月末	第五十三期 大正十六年 十二月末	第五十四期 大正十七年 六月末
資本	700,000	700,000	700,000	700,000	700,000	700,000	700,000
積立金	330,000,000	330,000,000	330,000,000	330,000,000	330,000,000	330,000,000	330,000,000
諸預り金	660,000,000	660,000,000	660,000,000	660,000,000	660,000,000	660,000,000	660,000,000
債券發行高	3,660,000,000	3,660,000,000	3,660,000,000	3,660,000,000	3,660,000,000	3,660,000,000	3,660,000,000

**負債之部**

資本	700,000
積立金	330,000,000
諸預り金	660,000,000
債券發行高	3,660,000,000
其他負債	...
合計	...

**資産之部**

現金	...
有價証券	...
貸出	...
其他資産	...
合計	...

**住友銀行** (本店大阪市東區北濱五丁目)

資本金 七千萬圓  
 拂込資本 五千萬圓  
 諸積立金 二千三百三十萬圓  
 諸預り金 四億百六十七萬圓  
 支店數 六十二

幼穉であつたのみでなく、何等の統一なく又何等見るべき機關もなく、況んや金融機關等に至つては、甚だ貧弱千萬なもので、僅に爲替會社や通商會社等を有してゐたに過ぎなかつたのである。其の當時に於て西財界の巨頭として知られた住友家では、此の缺如せる金融機關の開設に著目し、明治四年初めて、北區富島町に一店舖を設け貸付金業を開始したのであるが、これぞ資本七千萬圓の堂々たる一流銀行たる今日の住友銀行の發端なのであつた。爾來業務は年々共に進み殊に外國との交通頻繁となつて、新に川口一帯の地が居留地に選定されて以來、其の周圍は漸次發展し、居留外國商人の商取引も逐次盛んに起るに至り、之れ等の爲めに非常なる便宜を以て其の業務は次第に擴張するに至り、業務亦頗る隆盛を來したのである。次いで銀行條例の制定されるや、明治二十八年同條例に準據する普通銀行として資本金百餘萬圓を以て茲に初めて住友銀行を創設し、爾來社會の進歩に連れ財界亦多忙となり業務は長足の進展振りを示したのであるが明治四十五年四月に至り、時勢の推移に適應すべく組織を變更して資本金一千五百萬圓の株式會社住友銀行を設立され、以て今日に及んだのである。其の間幾度か増資を行ひ、内地に於て六十數ヶ所の支店、出張所を設け、海外支店、代理店等十數箇所を設け、全く國際的金融機關として重きに任じてゐるのである。同行が他銀行に比して海外各地に支店、代理店等を多く有してゐるのは、要するに前記した通り川口居留地に於て、夙に營業を開始し、此の方面の取引頻繁であつた關係に基くもので、此の一事を以てしても、如何に其の信用程度が高いかを知ることが出来る。即ち以下同行の内容を要約し、これを批評する事にしよう。

**偉大なる住友王國**、直接間接二十萬圓を納め、大阪府下を通じて第一位の多額納税者として、天下の三井、三菱を向ふに過して如何なる大相撲を取らして敢て遜色を見ざる魁大な資本力を有する住友一門の名に依つて經營されてゐる住友銀行は、又實に我が財界を震撼する重要な血管である。ある云はねばならぬ。所謂精華の流を汲む名門の出である。當主吉左衛門男の事蹟は云はずもが、浪花五兩持の一日の隆盛を致さしめたるのみならず、凡そあらゆる事業界に其の巨資を投じて事毎に絶大な効果を挙げたり今や我が國企業界に其の比を見ざる底の隆々たる業績を顧り得た所以のもの、要するに當主吉左衛門男活潑の賜であつて、到底尋常凡介の資力者流とは全然其の趣を異にする事實を窺知するに難からぬものがある。

**急激なる預金増加率**、斯くの如き歴史を有する住友銀行が、其の資本的に如何に膨脹して来たかを見るに、四十五年四月一日一千五百萬圓の株式組織に變更して以來、大正五年六月三千万圓に増資し、更に九年には一億七千万圓に増加した。即ち其の資本は九年間に五倍の膨脹を來してゐるのである。此の絶大な資本が歐戰以來の財界好況時に於て如何やうに運用されて来たかを検討するに、先づ大正三年以來五年間に於ける運用の比較を見る(三單位千圓)

大正三年	...
大正四年	...
大正五年	...
大正六年	...
大正七年	...

大正三年	...
大正四年	...
大正五年	...
大正六年	...
大正七年	...

千餘圓を有し此資本力を以て四千六百五十萬圓の貸付、三百二十九萬餘圓の割引手形、コールローン、三百九十餘萬圓の預け金、二百三十餘萬圓の有價証券等に運用されたのである。而して營業狀態如何を見るに打ち續く財界の不安期尙ほ脱する能はず、十四年に入つても新興企業資金の需要を喚起せざるに反し別定整理資金の需要も隨つて金融狀態に變調を呈する有様なりしを以て、同行の状況亦自ら妙味を覺して運用上の不利等に因り割引手形其他に於て収入減少を示したが、一方著しく増加した貸付金の収入利息及び借入利息の増加に依つて之れを相殺し得て同期間五十七萬六千餘圓の純利益を計上し前期に比し三萬二千餘圓の増収であつた。之等を通過して同行の前途を推察するに、最近の業績尙ほ不振の域を脱し得ないのは一般的現象であるから特に同行のみの不振では無く、而も毎期利益率の増進を示しつつあるは即ち其の基礎的確實性を物語るものであり、一朝景氣立ち直り財界の恢復期實現するに至らば、其の活躍も亦自ら擴大するべく、要するに此處暫くの潜伏期に於て内容の充實を固り前途大いに機關すべき準備時代であるを最も妥當とするであらう。同行内容の堅實味は叙上の如し況んや其重役諸氏の顔面を見るに及ば、何れも當代の名流のみなるを知るに於て、必ずや前途の多幸なるべきを疑ふの餘地あるまい。現任重役は左の諸氏である。

取締役 弘世正三郎 常務取締役 中谷元造  
 取締役 高井幸三郎 西尾兵一  
 同業支配人 岡枝謙 監査役 中 辰之助  
 同 兒山善守 同 北村吉右衛門

期に達せる時であつたらば二億六千九百萬云ふ預金を  
吸収し得るのである。之れを大正三年の七千七百萬に比  
するに約四倍に相當するもので、つまり毎年約五千萬圓の預  
金を増加して行つたことになる。之れを、拂込資本七百五  
十萬圓(大正三、四、五年)に對する割合を見るに、三年に  
は九倍強、四年には十一倍強、五年下期には千五百萬圓全額  
拂込であるから八倍強、六年下期には千八百七十五萬圓  
の拂込であるから十倍、更に七年には千二百五十萬圓拂込  
となつてゐるから、預金は十二倍云ふ割合を示し、各年を  
通じて、拂込資本に對する平均十倍の預金を吸収して、あ  
つたことが判る。而して一方此の資本力が如何に運用され  
たかを知るべく諸貸出及び有價證券等に對する投資方面を見る  
こと、次に如く表示し得るのである(單位千圓)

年	諸貸出金	有價證券	預金及現金
三	10,466	1,011	10,466
四	14,013	1,411	14,013
五	17,560	1,711	17,560
六	21,107	2,111	21,107
七	24,654	2,411	24,654

右表の如く大正五年には貸出に於て一躍一億圓を突破し、  
六年、七年に進むに従ひ、一年間に五千萬圓乃至八千萬圓の  
貸出増加を來してゐる。これ即ち歐戰の影響で、財界が  
急激なる事業熱に驅られたる、其の他事情より資金需要に  
迫られ、銀行資金を借出せるものであつて、大正三年六千餘  
萬圓の貸出が七年には實に其の四倍の二億四千萬圓に激増し  
た所以である。今之れを、預金高に比較するに、大正三年に  
は預金に對する八十六%の貸出であり、四年には八十七%五  
年には九十%六年には八十七%七年には八十九%に相當する  
之れを總の銀行の百分、若くはそれ以上の貸出を行つてゐた  
當時に比するに、常に預金に對して貸出を内輸して警戒を  
忘らなかつた營業の堅實さが窺はれる。當時の銀行業者の多  
くが周圍の好況に馴れ、眩惑して、大いに財界の繁栄を  
めがけ、一杯の貸出を取つてしまつた状態であつた。それが必  
ずしも企業資金としての放資の貸付になつたとしても、信  
用を確保する、貸越の例は決して少くなかつたのである。  
以上を貸して、平氣でゐた云ふ當時のだから、各銀行業  
者の貸出数字が非常に増したのには當然であつた。住友銀行  
は此の時に當つても、資金運用の上で絶大の注意を拂ひ、周  
到なる対策を講じて、萬一に處するの準備を怠らなかつたこ  
とには、營業者の責任として當然である云へ、又一面經營  
者の手腕と活眼を賞せねばならぬのである。更に有價證券  
に對する放資の如きも預金に對して、僅々二十%を出し放資  
であり、之れ等を合算するも尚ほ且つ預金受入額と同額に等  
しいもので、拂込に依る資本金は殆んど別個の計算を爲し  
得るものである云ふ實狀を知り得られるのである。次に  
大正八年以降十二年下期までの財界反動期に於ける業績を研  
究して見る。

### 反動期に於ける優秀なる業績

歐戰以來出超に亞ぐ  
に出超を以てする財界の好況は、従つて銀行の手許貯蓄を良  
好ならしめたので、銀行事業の成績は頗る見るべきものがあ  
り、營業の数字は各項ともに累加的に増進して行つたこと勿  
論である。即ち此の當時に於ける同様の業績を示すべく、資  
本運用の数字を列挙するに左表の如くである(單位千圓)

年	諸貸出金	有價證券	預金及現金
八	28,200	2,820	28,200
九	31,747	3,175	31,747
十	35,294	3,530	35,294
十一	38,841	3,885	38,841
十二	42,388	4,240	42,388

▲運用状態  
八年 九千九百九十九萬圓  
九年 一億零七百九十九萬圓  
十年 一億三千五百九十九萬圓  
十一年 一億六千三百九十九萬圓  
十二年 一億九千一百九十九萬圓

▲資本力  
諸貸出金 一億九千九百九十九萬圓  
有價證券 一千九百九十九萬圓  
預金及現金 一億九千九百九十九萬圓

を以て究つて見れば、深甚なる努力と業績  
とを擧げられること知らねばならぬ。銀行の過去業績  
は、只だ優良であり、只だ順調に進行して來たものであ  
る云ふはそれまでであるが、營業成績をして優良云ふ結  
果を表現せしめる間の經營者の勞苦は、實に言語に盡し得ぬ  
ものがあつたこと勿論で、何れの場合、何れの場合に對して  
最も機宜に通じた經營政策を完全に行はれたこと、對して  
は非常なる敬意を寄せねばならぬであらう。現任後任は左の  
諸氏である。

職名	氏名
社長	住友友房
常務取締役	住友友房、住友友房、住友友房
取締役	住友友房、住友友房、住友友房
監査役	住友友房、住友友房、住友友房

此は約八十二%、有價證券は預金の二十九%に相當する、而  
かも所有有價證券の大部分は國債地方債であつて、性質の如  
きは種々、其の一部に過ぎず、極めて堅實性に富んだ放  
資状態であるといへる。若し其の財界状態を数字的に  
表示せんか、同行の實績が如何に充實してゐるかを知ら  
るのであるが、其の傾向を避くるとして、十二年下期間に於  
て、克く六百七十七萬圓の純益を挙げ、百五十萬圓の別途準備  
金、十五萬圓の職員退身準備金、十四萬圓の賞與及交際  
費等を控除し、一年一割の株主配當を行つて、尚ほ且つ一七  
十八萬餘圓の後期繰越金を残してゐるのである。斯くの如く  
毎期殆ど數百萬圓以上の純益を挙げてるのであるが株主配  
當の割合を見るに、大正三年より四年までは、毎期四分の配當  
五年は五分、六年より八年までは各期八分、九年より現在  
までは各期を通じて一年一割の配當を行つたのである。純益金  
の額よりすれば、尚ほ以上の高率の配當を爲し得べきである  
が、由來銀行資本に對する利益配當の如き普通の營業事業の  
それと異り、株主配當よりも、準備金を多くし、内容の  
堅實を期せねばならぬ責任があるのだから、普通銀行に在り  
て如何なる好況時にも、尚ほ且つ九年九分を出してゐた  
常例である、而かも住友銀行が年一割の配當を維持し、準備  
金、其の他資産計數上に頗る大なる数字を擧げてゐる。こ  
し、取りも直さず同行の内容が如何に充實してゐるかを窺知  
し得るに十分であらねばならぬ。以上によつて過去十年間の  
營業状態を研究した、吾等はいかに資本關係及び經營者間に  
就いての研究を加へるであらう。

### 卓越せる經營者

住友銀行の營業成績に就ては、  
既に數字的研究を述べ、其の内容の如何に堅實であるかを知  
り得た、全國六十五個所の支店、海外十個所の支店を有  
し、尚ほ廣く羽翼を伸ばすべく北米加州政府の認可を得てサ  
ラント市に加州住友銀行を設立し大正十四年三月二十二日よ  
り開業してゐる、而して今や資本金七千萬圓、此の拂込五千  
萬圓に及び、一千三百餘萬圓の諸準備金、四百餘萬圓の  
諸預り金を擁し、其の資本力の上にも、其の信用の強靱  
なる點に於ても關西は勿論、汎く我國金融事業界に於て、  
最も重要な地位を占むるに至つた所以のものは、元より住  
友を指導する大なる資本力と時勢の好運に際會した結果  
である云はば云へるが、而かも其の大資本を運用するに些  
の遺算なく之れを最も巧妙に善用して來たこと、即ち其の經  
營者間の優れたる手腕の然らしめたものであることを否定  
し得られないのである。

社長住友友房は云ふも更なり、八代常務以下各重役何れも住  
友王國の爲に多年忠勤を盡した功勞者であると同時に、本  
邦金融事業界に錚々たる名士の名士であるから其の關係を記すの  
煩を避けるが、特に記述して置きたいのは、住友王國の總本  
營たる合名會社住友總本店にも新時代に副ふ制度の改訂が行  
はれ、定年制の實施された結果として從業員總数の改訂が行  
つた中田錦吉氏後任に伴ひ大正十四年十一月一日を以て最高  
幹部級に大異動ありし一事である、即ち中田氏の後任として  
銀行常務理事たりし湯川寛吉氏理事に昇り、八代常務これ  
に代つて主席となつて行務を總攬する事になり本店支配人た  
りし大平賢作氏新任に任せられ、其の後任として  
外國部長大島聖造氏が補せられた、此くして八代常務を中心  
に今村常務、大平新取締役、大島新支配人其他の俊英が經營  
首腦者となつて行務の進展を策してゐるのだが、八代氏は會  
社理事として行務に専らする八代常務に代つて行務  
を遂行せしむるに好運の土であり、大平、國府、大島の諸  
氏亦何れも理想的の銀行實業家、住友銀行の前途に對して  
躍進を見るべき準備は完全に整へられたのである、更に主要  
役員として左の諸氏を擧げ得る。

職名	氏名
本店支配人	大島聖造
外國部長	大島聖造
常務理事	湯川寛吉
取締役	湯川寛吉、大平賢作、國府大島
監査役	湯川寛吉、大平賢作、國府大島

### 住友銀行營業成績累年比較表

項目	第二十一期	第二十二期	第二十三期	第二十四期	第二十五期	第二十六期	第二十七期
諸貸出金	10,466	14,013	17,560	21,107	24,654	28,200	31,747
有價證券	1,011	1,411	1,711	2,111	2,411	2,820	3,175
預金及現金	10,466	14,013	17,560	21,107	24,654	28,200	31,747
純益	677	1,013	1,349	1,685	2,021	2,357	2,693
準備金	1,011	1,411	1,711	2,111	2,411	2,820	3,175
資本金	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000

事業經營に銀行業の經營法が如何に至難なるものであるか  
は再三説き及ぶた處の如く、尋常一業の企業者流や所謂事業  
家なるもの、到底企求し得らざる難事であつて、其の業績

項目	第二十一期	第二十二期	第二十三期	第二十四期	第二十五期	第二十六期	第二十七期
諸貸出金	10,466	14,013	17,560	21,107	24,654	28,200	31,747
有價證券	1,011	1,411	1,711	2,111	2,411	2,820	3,175
預金及現金	10,466	14,013	17,560	21,107	24,654	28,200	31,747
純益	677	1,013	1,349	1,685	2,021	2,357	2,693
準備金	1,011	1,411	1,711	2,111	2,411	2,820	3,175
資本金	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000	7,000

科目	金額	科目	金額
引当金	1,000,000	資本金	5,000,000
預金	2,000,000	積立金	3,000,000
貸付金	1,500,000	未払金	1,000,000
現金	500,000	未払利息	500,000
有価証券	1,200,000	未払税金	300,000
不動産	800,000	未払手数料	200,000
その他	300,000	未払雑費	100,000
負債合計	10,000,000	負債合計	10,000,000
資産合計	10,000,000	資産合計	10,000,000

三十四銀行 (本店大阪府東区)

資本金 五千 萬 圓  
 拂込資本 三千七百五十 萬 圓  
 積立金 二千 七 萬 圓  
 諸預り金 二億四千四百十八 萬 圓

支店数 五十三

沿革と資本の移動 同行は序論に於て記した通り、  
 人に創立銀行の創設せられた當時、其の一つとして明治十  
 二年三月、資本金十萬圓を以て設立されたものであるが、同  
 十年九月に至つて百五十萬圓の株式会社に組織を變更し、

に民間銀行としての基礎を造つたのである。今同行が創業以  
 來今日までの發展の跡を檢討すべく、其の資本的に如何なる進  
 歩を示して来たかを見る。

▲明治三十年九月創立百五十銀行を合併し資本金、百  
 十萬圓に増加▲同三十二年二月日本共同銀行及日本中  
 立銀行を合併し四百七十萬圓に増加▲同三十四年十一月有  
 魚銀行を合併し五百萬圓に増加▲同四十五年一月信託業  
 業▲同六月倍額増資の一千萬圓なる▲大正六年七月  
 一月尼崎銀行を合併して一千三百萬圓に増加▲同七年六月  
 六月千五百萬圓に増加▲同九年六月倍額の五千萬圓に  
 増資して現今に至る。

即ち創業當初僅かに十萬圓を出でなかつた資本が、四十年後  
 の今日に於ては實に五百倍の膨張を來して居る。これを知ら  
 得る。而して金融事業の發展の跡を以て今日讀者間に重要な  
 研究資料とされて居る銀行合同論に就ても同行經營者が、夙  
 に將來の趨勢を遠視し善々合同實現に努めた結果として、  
 今日まで五個銀行を合併し、此の資金三百八十萬圓を加へ  
 てゐるのである。而して此の資本の膨張は合同に依る増加資  
 本のみでなく、明治四十五年及大正七年の兩度に於て何れも  
 倍額の増資を行つてゐる事實は、即ち同行の事業發展の速度  
 を知り得る唯一の基準である。

大正七年當時は歐戰の絶頂であり、我國財界が破竹の勢ひ  
 を以て隆盛に赴きつゝ、あつた折衝であるから、資金供給者  
 としての銀行業者が、素晴らしい發展を遂げた事は何等の思  
 議もないが、同行は其の創業當初より既に今日の大を爲すべ  
 く完全なる素質を具有してゐた。これも亦見逃し難き事實であ  
 る。(單位千圓)

前後五回に亘つて他銀行を併合し、銀行群立の弊を矯正し、  
 金融事業の圓滑と確實を期し、以て今日に及んだことは、  
 同行の基礎として磐石の堅きに處したことを勿論であり、  
 又一面に於て、確かに新業界の先驅者として誇り得るであら  
 うと思ふ。今や本邦屈指の大銀行として、嶄然頭角を擡ぐ陸  
 たる業績を挙げつゝあるのである。然らば同行が過去に於て  
 如何なる業績を挙げ、而して現在如何なる業績に在るかを數  
 字的に説明せねばならぬ。これを知るべく先づ創業以來の發  
 展率を表示して見る。次の如くである。(單位千圓)

年次	資本金	積立金	諸預り金	請貸出金	配當率
明治三十二年末	10,000	3,000	2,000	1,000	年八分
三十五年末	100,000	10,000	10,000	10,000	同上
三十八年末	1,000,000	100,000	100,000	100,000	同上
四十一年末	10,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	同上
四十四年末	100,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	同上
大正元年末	1,000,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000	同上
三年末	10,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	同上
五年末	100,000,000,000	10,000,000,000	10,000,000,000	10,000,000,000	同上
七年年末	1,000,000,000,000	100,000,000,000	100,000,000,000	100,000,000,000	同上
九年年末	10,000,000,000,000	1,000,000,000,000	1,000,000,000,000	1,000,000,000,000	同上
十一年末	100,000,000,000,000	10,000,000,000,000	10,000,000,000,000	10,000,000,000,000	同上
十二年年末	1,000,000,000,000,000	100,000,000,000,000	100,000,000,000,000	100,000,000,000,000	同上
十三年末	10,000,000,000,000,000	1,000,000,000,000,000	1,000,000,000,000,000	1,000,000,000,000,000	同上

歐戰を轉機とする業績 同行の銀行事業の歩みは、  
 我國に於ける銀行の事業界は歐戰前を以て、一つの轉機と  
 して發達したのであつて之れなくば或は今日の如く急激な  
 發展を望み得られなかつたかも知れない。此の故に於て  
 財界事情を説くには何れにしても歐戰を中心として考察せねば  
 ならぬのである。同行發展の経路も亦其のスタートを此處  
 に置いて研究せねばならぬ。而して歐戰の勃發は大正三年  
 であるが、我が財界に直接的影響を及ぼしたのは尙ほ其れ以  
 後である。然し影響を漸すべく其の種子は既に此の年に於  
 て胚胎してゐるのであるから大動亂勃發時に於ける營業狀  
 態から觀察せねばならぬ。即ち以下五箇年を一期として  
 營業成績を表示して見る。先づ其の資本状態を示す。左の如  
 くである。(單位千圓)

年次	資本金	積立金	諸預り金	貸付金	現金	有價証券	現貨
三年	10,000	3,000	2,000	1,000	500	1,200	800
四年	100,000	10,000	10,000	10,000	5,000	12,000	8,000
五年	1,000,000	100,000	100,000	100,000	50,000	120,000	80,000
六年	10,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	500,000	1,200,000	800,000
七年	100,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	5,000,000	12,000,000	8,000,000

これに依つて見るに、大正三年末に於ては資本金に對する  
 諸積立金の割合は三割八分に相當し諸預り金に於て三倍半の成  
 績を挙げつゝ、更に四年度には四倍強、五年度には六倍強  
 六年度には約十倍強の預金を吸集したものである。此の結果  
 として翌年即ち大正七下半期には資本金を二千五百萬圓  
 に増加し一千三百九十七萬五千圓の拂込みであるが、同年末  
 には實に十倍強の預金成績を示すに至つた。然らば此の資本  
 力を如何やうに運用して来たかを見る。次の如く表はれて  
 る。(單位千圓)

年次	貸付金	現金	有價証券	現貨
三年	1,000	500	1,200	800
四年	10,000	5,000	12,000	8,000
五年	100,000	50,000	120,000	80,000
六年	1,000,000	500,000	1,200,000	800,000
七年	10,000,000	5,000,000	12,000,000	8,000,000

即ち以上の數字に依るに大正三年には受入れた預金に對し  
 て百パーセントの貸出を行つてゐるが、此の當時に於ては  
 事業資金としての貸出は僅かに二百五十萬圓に過ぎず未だ  
 財界の昂上期には云ひ得なかつた事が窺知される。次に有價  
 証券の所有高は二十四パーセント現貨高は十二パーセント  
 に相當する十三年上半期の業績に依るに有價証券三十一パー  
 セント現貨高十三パーセントであるから大正三年當時と現時との間に非常の  
 差異あることは認められぬのである。更に右表に於て五  
 年、六年と進むに従ひ歐戰の擴大に伴ふ現貨として貸出金の  
 向上してゐる事實を知ることが出来る。而して大正七年の財  
 界好況の頂上にあつた貸出金は一億一千万圓に達して、一億五千萬圓の多額  
 に上つたのであるが、一方預金の方も十倍強の増加であるか  
 ら、其のパーセンテージは案外に低く、僅かに七十を示し  
 たに過ぎない。財界の有頂天時代に於て同行の營業振りが此  
 くの如く堅實に行はれたことは我が財界の爲めに誠に好運で  
 あつたことは言はねばならぬ。次に更に進んで事業發展の極  
 に達した大正八年から反動期に於ける業績を一覽して見や  
 う。



株式三十四銀行營業成績累年比較表

項目	第五十期		第五十一期		第五十二期		第五十三期		第五十四期		第五十五期		第五十六期	
	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年	大正十一年	大正十二年
資本金	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
準備金	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
貸付金	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
負債	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000
純利益	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000	1,000,000,000

項目	大正十一年	大正十二年
資本金	500,000,000	500,000,000
準備金	500,000,000	500,000,000
貸付金	500,000,000	500,000,000
負債	500,000,000	500,000,000
純利益	500,000,000	500,000,000

株式 山口銀行 (本店大阪市東區五町二丁目)

資本金 五千萬元  
 拂込資本 二千七百五十萬圓  
 諸積立金 一千八百六十萬圓  
 支店數 四十三

代表的商人銀行 大阪財界に一大王國の觀ある山口銀行は、今や名實共に一流の大銀行として推賞するに恥ないものである。其の業績を説くべく沿革を記せば可なり長編になるが、抑も封建領國の時代、奈良近邊の一僻村から大阪に乗り出し、萬難を排して外國商人との取引を行ひ、洋行商の先驅として知られた山口吉郎兵衛氏の昔に遡る。洋行商の銀行事業の發端は其の二代目吉郎兵衛氏が、元治元年即ち今より六十餘年の昔、山口兩替店を開始したに始まるのである。兩替事業は日と共に盛大となつて行つたが、其の後十五年の後、國立銀行條例の發布されると同時に資本金十萬圓の第百四十八銀行として認可されたのが抑々銀行としての第一歩を踏み出したスタートであつた。次いで三十一年間條例の廢止されると共に、新に資本金百萬圓を以て山口銀行の名を冠した個人銀行を創立されたのである。其の間幾多の苦辛と努力を必要とした事勿論であるが、信用を第一義とする銀行事業を経営すべく山口家の諸氏は全く好個の典型的人物揃ひであつた。寧ろ消極に過ぎる程の堅實方針を基礎として經營の任に處したので、社會の信用は莫大なものあり、所謂町家の銀行として實業都市に於ける理想的銀行の名を冠したのである。而かも時勢の進運は一日にして萬里を許さず、從來一族一家の人々のみを以て經營に任じての點に於て堅實一點張りの消極主義であつたのを、時代の進運と財界の發展に刺戟され、新時代に適應すべく大英斷を以て營業方針の一大變改を試み、當時日本銀行調査役として知られた町田忠治氏を迎へて經營の一切を委ねることにしたので、山口家が町田氏に注目したこも即ち、今日の盛運を齎した唯一の原因であつたのである。町田氏は直ちに、其の盟友重役達吉、佐々木駒之助氏等率ゐる大阪に乗り込み新任重役として業務の一大刷新を試み、從來とは異つた積極主義の營業方針を採り、一面大いに新時代に適應した英國式市内支店制度を採用し營業區域を格段試みたのであるが此の新しい試み

は悉く時流に投じ非常な聲譽と好評を博し、業績大いに舉るに至つたのである。  
 從來山口家個人經營の銀行であつたものを、大正六年五月に至つて組織を變更して株式會社となし、業績益々好良を加へ今や資本金五千萬圓拂込二千七百五十萬圓、諸積立金一千八百六十萬圓、諸積立金二千八百六十萬圓を擁する大銀行として、大阪財界に重きを爲すに至つたのである。東京に於ける安田、三井、十五、三菱等に次ぎ、大阪住友、三四の二行に次いで全國一千餘の銀行業者中に於て、第十位を下らざる業績の優良なるを得た所以のものは、之れ取りも直さず堅實なる基礎の上に、新進有爲の經營者を有してゐたことと云つて、山口銀行今日の隆昌を得たこと必ずしも偶然の結果であるとは云ひ得ない。而かも其の背後に何等貴族名門の特權的背景を有せず、眞に獨立獨立一個人の腕を以て又今日日の盛運を顧も得た山口家の事業として實に推賞を禁じ得られないものである。

歐戰後の事業成績 三四の小山、住友の志立、浪速の野元、山口の町田と云へば一時關西銀行界の花形として、何れも名譽を博し、之れあるが故に關東銀行業者の何者にも敢て遜色を見せずと云はれた位、一世の人物揃であつた。然も花盛り、星代に從つて、要諦定めなきが人の世が、志立東都に去り、野元九州の西陣に身を置き、小山遂に黄泉の客となつて再び歸らず、只一人、山口の町田のみ依然として重役の任に在るは云ふもの、氏は人も知る秋田縣選出の代議士であり、憲政會の領袖として政界に重きを爲す人、最近に於ては殆んき政治に没頭して、又他を顧みるの暇なしと云つた有様、往年大阪財界四人組の名を成した何れもが東散西離、此處にも離散集合なきを知り得られる、當時の四人組の残る三者が胸中の感懐も如何ぞや云ひたい處である。

斯くて山口銀行中興の祖とも稱すべき、町田氏は東都に移り住みて今は直接營業の任に當らざるも、氏が扶植した『最後の一錢まで支拂ふの準備』の覺悟がなければならぬ『徐々に急げ』の金言は同行經營當事者の何れもが座右の銘として常に其の職目を忘れず、全行員亦之れを體して怠らず、其の所請後々に急げの標語を振り懸して一歩一歩より、堅實の域を擴大して近時素晴らしき業績を挙げ得たのである。何れも同業者を訪ふも『山口さんの近來の發展は何うも驚きましたネ……』恐ろしく預金が激増したやありませんか！

この言を耳にせぬことがない、同業に驚異の眼を注ぐは、其の業績の隆々たること何ぞ言を要せんやである。今試みに最近三箇年間に於ける資本關係と運用關係とを表示すれば次の如くである。(單位千圓)

	十一年	十二年	十三年
資本	10,000	10,000	10,000
準備金	10,000	10,000	10,000
預金	10,000	10,000	10,000
貸出金	10,000	10,000	10,000
有價証券	10,000	10,000	10,000
現金	10,000	10,000	10,000

以上の数字に依つて見ると、十一年以降各年の貸出は預金に對する七十五割に相當し、大震災時の十二年の如きは、預金増昂率の高きにも拘らず、其の貸出は却つて七十五割に過ぎないのであるから、經營の上に出たの留意が拂はれてゐることを知り得る。若し夫れ支拂準備として有價証券に至つては預金に對し二十六割を有し此方面に於ても亦頗る細心の注意が施されてゐることを観測し得るのである。

反動期の資本運用状態 過去三箇年間に於ける、業績の大要は、既に記した處に依つて知られたことと思ふ、更に之れを收支動定の上から見て如何なる利益率を挙げ、而して如何なる利益配當を行つて来たかを見るに、六年下期より十三年末までの各年末に於て次の如き数字が現はれて來るのである。(單位千圓)

年度	収入	支出	差益	配當
六年下期	3,264	2,624	640	0.6割
七年下期	3,976	3,176	800	0.4
八年下期	4,100	3,100	1,000	0.4
九年下期	4,200	3,200	1,000	1.0
十年下期	4,300	3,300	1,000	1.0
十一年下期	4,400	3,400	1,000	1.0
十二年下期	4,500	3,500	1,000	1.0
十三年下期	4,600	3,600	1,000	1.0

以上のように六年、七年には六十萬圓乃至七十萬圓程度の利益に過ぎなかつたものが、八年には百二十萬圓の利益を挙げ、九年以降には八十萬圓前後の増加率を示し、十三年末に於ては實に二百五十餘萬圓の利益を計上してゐるのである。而して之れが配當の如きも八年までは六分乃至九分の配當に過ぎなかつたが、九年以降は定期一割の利益配當を行ひ、而かも一百万圓の準備金と七十七萬圓の繰越利益金を増設

株式会社 山口銀行 營業成績累年比較表

資産之部	第十一期 大正十一年 六月末							第十二期 大正十二年 十二月末							第十三期 大正十三年 六月末							第十四期 大正十四年 十二月末							第十五期 大正十五年 六月末							第十六期 大正十六年 十二月末							第十七期 大正十七年 六月末						
	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券	現金	預金	貸出	有價証券																	
現金	100,000	200,000	300,000	400,000	150,000	250,000	350,000	450,000	200,000	300,000	400,000	500,000	250,000	350,000	450,000	550,000	300,000	400,000	500,000	600,000	350,000	450,000	550,000	650,000	400,000	500,000	600,000	700,000	450,000	550,000	650,000	750,000																	
預金	200,000	300,000	400,000	500,000	300,000	400,000	500,000	600,000	400,000	500,000	600,000	700,000	500,000	600,000	700,000	800,000	600,000	700,000	800,000	900,000	700,000	800,000	900,000	1,000,000	800,000	900,000	1,000,000	1,100,000	900,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000																	
貸出	300,000	400,000	500,000	600,000	400,000	500,000	600,000	700,000	500,000	600,000	700,000	800,000	600,000	700,000	800,000	900,000	700,000	800,000	900,000	1,000,000	800,000	900,000	1,000,000	1,100,000	900,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000	1,300,000	1,400,000	1,500,000	1,600,000																	
有價証券	400,000	500,000	600,000	700,000	500,000	600,000	700,000	800,000	600,000	700,000	800,000	900,000	700,000	800,000	900,000	1,000,000	800,000	900,000	1,000,000	1,100,000	900,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000	1,300,000	1,400,000	1,500,000	1,600,000	1,700,000	1,800,000																
負債之部	500,000	600,000	700,000	800,000	600,000	700,000	800,000	900,000	700,000	800,000	900,000	1,000,000	800,000	900,000	1,000,000	1,100,000	900,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000	1,000,000	1,100,000	1,200,000	1,300,000	1,100,000	1,200,000	1,300,000	1,400,000	1,500,000	1,600,000	1,700,000	1,800,000																	
資本	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000																
準備金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000															
預金	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000														
貸出	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000														
有價証券	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000													

に過ぎないのである。更に坂本、山口の兩幹部は世に定評ある好幹部であり、町田、坂野、岩井、肥田、高橋の諸氏何れも幹事の士である。此の重役諸氏の組織を有するものに依つて見ても、其の内容の堅實さを知り得るのである。

してゐるのである。更に十四年上期に於ける業績を見るに、財界尚ほ不況の域を脱せず金融界亦不振の状態なるに拘らず、同業の業績は寧ろ良好の成績を挙げ得たのである。即ち預金に於ては二億一千八百六十萬圓で前年に比し三百九十萬圓を増加し、貸出に於ては七百五十萬圓の増一億七千五百萬圓に達し、而も純益金三百九十七萬圓を計上したのである。而して利益率に於て前期よりも著しく劣るが如く見られるが東京震災の遺債残額百三十萬三千餘圓を常期に於て全部償却したものであるから純利益は四百五十萬圓以上を挙げたのである。更に此利益金が如何に處分されたかを見るに八十萬圓を準備金に充て、一割の株主配當を行ひ尚ほ八十一萬圓を後期へ繰越されてゐる。以上を通過して第二期の準備金を有し合計で九千餘萬圓の準備金、更に一千餘萬圓の準備積立、二千二百餘萬圓の未拂貸出金を合すれば僅に一億三千萬圓の支拂能力あり況んや一億七千餘萬圓の堅實なる貸出を有するに於て實に三倍餘の支拂保障を完備し尚且つ所有財産は完全に残存されてゐる。其の内容が如何に充實し堅實なるかを知らしめて置かう。

卓越せる經營者 以上記して來た處に依つて、山口銀行が其の預金所有の高上から、全國主要銀行中に於て安田、三井、住友、第一、三菱、三國の次に位し、其の内容に於ても一流大銀行としての實質を具備してゐることを知り得たであらうと思ふ。其の誇りとする市内支店配置制度に依つて、殊に信用關係の深い商業都市としての大阪に於ける金融業者が當然必要とする各種の調査も完全に行き届く爲に相互に便利此の上もなく、從つて其の取引は極めて良好の成績を納め得られてゐるのである。今や大阪市内及び接續地に十八箇所の支店を有し、更に東京、京都、名古屋を始めとし神戸、堺、岡山、福岡、朝鮮の各地に亘つて、支店若くは出張所等を設置して遠征なき金融網を敷き我が産業界の爲めに貢献する處、甚だ大いである。

斯くの如く是の進歩發展を遂げた同行が其の經營者として如何なる人物を推戴してゐるかを見るに先づ重役として

- 取締役社長 山口吉郎兵衛 常務取締役 佐々木大助之助
- 同 山崎元次郎 取締役 町田 忠治
- 同 坂野 兼通 同 岩井 勝次郎
- 同 肥田 熊藏 同 森信 敬二
- 監査役 山口謙四郎 同 平瀬 市五郎









資本金 一千万圓
拂込資本 五百十二萬五千圓
諸積立金 五百八十萬圓
諸預り金 九千九百八十六萬七千圓
支店數 四十六

榮ある其沿革

敢て明治維新史を尋ねずとも、所謂隆長土肥の地が如何に傑出せる人物を輩出せるかを知るに甚だ容易である。維新當時に於ける功臣偉人の殆んど大部分が、即ち此の何れの地の山水に育たまはざるは無しと云つた有様、試中園長二藩より最も多くの人材を出してゐる。此處に説くまでもない、薩は暫く措き、長州の地が産した偉人の數、總括に述べしに、山縣、乃木の三者は實に其の代表的士であり且つ日本の産した世界の代表者である。云ふも敢て過言ではあるまい。軍神乃木將軍は自から別個の問題として之を語る、年齒の順序から云へば山縣最も長じて居たのであるが、社會的に名を爲したのは寧ろ伊藤の方が前であつた。云ひ得る、即ち後の公府伊藤博文氏の名は明治維新以來、政界の覇者として轟いてゐる、氏が政界に志し政治家を以て終始したに反し、公府山縣有朋氏は軍人として半世以上を國家に捧げ後政界に轉じたものであるから、兩者共に同じく位人身を極め幾度か總理大臣の印綬を帯びたのである。其の政治的聲價は伊藤公の方が遙かに大きき世人に印象を残してゐるのである。而して此處に同じく長州の産した偉人中の一人として見逃し難きは故藤田傳三郎男である。氏は山縣伊藤の諸氏と共に勤王の志深く幕末の際には大いに尊王攘夷の論を唱へて國事に奔走し、明治維新の大業を遂成せしむる上に與つて力あつたのだが、伊藤山縣の諸氏が等しく官途に就いたに反し、徒らに官に吏して爲政の事を司るのみが國家に寄與するの謂ひでない、宜しく産業を興し國富を増進して國力の充實を計る。此の國勢を伸張する所以であるとして、雖然身を實業界に投じ、初め製糖業を営み後明治六年藤田組を組織し各種の事業を創設して之を經營するに至つたのであるが、其の炯眼鋭く時流の趨勢を遠視し、政策一として外る、事なく、遂に一代にして巨富を重んずる實業家となつたのみならず、一面公共事業に盡して國家に貢獻する處少なからず後特に華族に列し勇傑を授けらるゝに至つたのである。斯くの如く三者を並べて各異つたのであるが其國家の爲にする歸結に於ては敢て異なる所なかつたのみでなく、等しく長州が産した最も代表的人物と稱するに些かの不遜も無いのである。

此の代表的偉人藤田傳三郎翁の血を享けた當主平太郎男は翁の遺業を繼承して克く其の志に違はず、各種關係事業をして益々強大を加へたのみでなく、世の進運に適應すべく大正六年十月、銀行業務を創設するの意思を以て認可を申請し、翌七月一日業務を開始したのである、これを即ち現今資本金一千万圓、此拂込金五百十二萬五千圓の株式會社藤田銀行なのであつて今や預金一億圓を突破せんとし諸積立金亦五百餘萬圓に拂込資本を超過する堅實なる内容に博大な信用を以て實業都市の機關銀行として名實共に一流銀行たるの名に恥ぢない充實繁榮を示し、奮々として其の進歩の軌跡を刻みつけてゐる。其の固定資付の如き甚だ多量なるのみならず、諸積立金も亦多量に蓄積せしむるに至らぬ。云ふも良好な成績を挙げ得るのである。大正十一年上半期以降十三年上半期に至る間の運用状態を表示する(單位千圓)

Table with financial data for 1911-1913. Columns include 資本金, 諸積立金, 諸預り金, 支店數, and 運用状態.

別の影響を受けることなく、其の固定資付の如き甚だ多量なるのみならず、諸積立金も亦多量に蓄積せしむるに至らぬ。云ふも良好な成績を挙げ得るのである。大正十一年上半期以降十三年上半期に至る間の運用状態を表示する(單位千圓)
資本金 一千万圓
諸積立金 五百十二萬五千圓
諸預り金 九千九百八十六萬七千圓
支店數 四十六
運用状態
資本金 一千万圓
諸積立金 五百十二萬五千圓
諸預り金 九千九百八十六萬七千圓
支店數 四十六

多數先銀行に比肩するも何等の特色なき確乎不拔の基礎を固め得た事は寧ろ驚異に値するものと云ふべきである。即ち以下同行の内容を数字的に解剖して見よう。

歐戰以來の業績 大正六年云へば、歐戰に依る影響正に最高潮に達した時代であり、我が國財界は所謂黄金の洪水に見舞はれ、好況の頂上に處した時代である。試みに當時の正貨状態を見るならば、大正五年に於て、内地二億二千七百五十萬圓、海外四億八千六百九十四萬圓、合計七億四千四百四十餘萬圓に過ぎなかつた正貨状態は翌六年十二月末に至つて一億一千五百餘萬圓に激減し前年同期に比して二億七千五百餘萬圓の増加であり、爾來累加的に増進して八年末には實に二十億の流通高を示したのである。藤田銀行は實に此の空前の好況期を機として設立されたのであつて、開業早々に於て既に大成すべく幸運に祝福されてゐたのである。此の宿命のな創業歴史を有する藤田銀行が過去に於て如何なる業績を挙げ今日の聲價を稱せらるゝに至つたかを数字に依つて説明して見る。先づ大正十一年以降十三年上半期に於ける資本力を表示するに次の如く掲げる事が出来る。(單位千圓)

Table with financial data for 1911-1913. Columns include 資本金, 諸積立金, 諸預り金, 支店數, and 運用状態.

之れに依つて見るに、創業後五ヶ年、即ち大正十一年に於て早くも九千五百萬圓の諸積金を吸収し、三百九十九萬圓の諸積立金を積立てたことが判然する。普通預金五千萬圓を有するものを以て先づ一流銀行と稱し來つたものであり、而かも五百萬圓の預金を得るまでには相當の營業年月を経なければ望まれないとされてゐたに拘はらず、藤田が克く數年間に一億に近い預金成績を挙げ得たことは、寧ろ新界に於ける一つの驚異とするに足るのである。然らば何が故に斯くの如き好成绩を挙げ得たか云ふに、勿論財界好調の影響であつたことは云ふまでもないが、而かも大正六年、我が邦屈指の大實業家たる藤田家の絶大な信用を背景として創設された銀行であり、藤田一族が首腦となつて、經營される銀行であるから云ふ、所謂預金者心理をして無限の信用を繋がしめた點に在るので、此の點は如何なる絶大な資本を以てするも、尚ほ且つ追隨し難い至上的強味を云ふべきである。此の強味に對して翁が集まり來つた預金は、一年一其の額を増加し十四年上半期末現在に於ては九千九百九十萬圓に達し正に一億圓突破の實現も遠きに非ざらした。これを拂込資本に對比すれば實に十九倍強の預金であり、積立金に於ては十三年末六百五十二萬餘圓を有したが十四年上期に於ては雲英手形其他諸積等の銷却を断行した爲め、同期末に於ては約二百萬圓を減じ四百六十萬圓に減少した、而も尚ほ拂込資本に對する九割弱を有するのだから、其内容が如何に堅實であるかを窺知し得るのである。

堅實なる營業内容 此の如く其の資産勘定に於て顯る充實なる内容を有する同行が一方如何に之れを運用してゐるかを窺ふ、其の貸出しに於ては専ら堅實主義を旨として相手方の信用其の他の調査は勿論、内部監督亦極めて厳重なる組織の下に行はれてゐる。財界の反動期に際しても最も最近に於ける營業成績を示す三次の通りである。(大正十三年十月三十日現在)

Table with financial data for 1911-1913. Columns include 資本金, 諸積立金, 諸預り金, 支店數, and 運用状態.

以上有力なる三銀行の買収に依り、悉々之れが正式の手續を了せられた上は、現在の資本力は當然増進する、事となり、其の預金高其の他所有財産額も亦大を増すことになるのであるから、同行が商業都市の金融機關たる實績を挙げ得るのは、更に今後の飛躍に快つべきである。此の如く内容やが上にも充實堅實なる基礎を鞏固の度を加へしめた所以のもの、勿論一般財界の好況に乘じ、自然的に業績の隆昌を致したことも争はれないが、而かも亦其の機會に善處し克く對策を講じたのは、經營者の卓越せる手腕に原因する處決して少なくないのである、以下少しく此の方面の研究をやつて見よう。

經營者如何

同行經營者として如何なる人々が其の衝に當つてゐるかを窺ふ、各重役及び最高幹部として左の諸氏を以て列して見よう。
取締役 藤田平太郎 常務取締役 鈴木庫太郎
取締役 藤田三郎 同(兼) 坂 仲輔
同 上田 常記 同 市川 誠
監査役 藤田徳次郎 同 西村 謙作
業務部長(兼) 上田取締役 同 次長 高山 準平
營業部長(兼) 市川取締役 同 次長 水本 通孝
營業部長 齋藤正一郎 調査部長(兼) 鈴木 常務
同 次長 山中 安吉 同 野津 醇
頭取藤田平太郎男は先考傳三郎翁の嫡男で、藤田男爵家の當主であり、明治二年生れの本年五十六歳、正に人生の活動盛りである。初め慶應義塾に學び後英國に留學して傍ら職業の見學を行ひ大いに知識を充たして歸朝後、藤田家の祖業藤田組、其の他を統轄する當代の敏腕家、監査役徳次郎氏は、取締役三郎氏と共に男の實弟であり何れも泰西仕込みの新進實業家として、藤田家の事業に専念してゐる。鈴木常務は藤田家の出、夙に東京帝大法科を卒業して日本銀行に入り、營業局調査役から新潟支店長等を歴任した後、藤田組に入り、藤田家の事業を大成せしむる上に非常な効果を齎したもので實に藤田家重要な大器である、眞に藤田本店事務理事たりし坂仲輔氏病歿するや、世人より後任總務として目せられた程、藤田組に於ける藤田家の事業の爲によく重責を充つた功勞者として、或は多年同家事業の爲によく重責を充つた功勞者として、或は關西實業界の重鎮として、官界出身に似合はぬ名實業家の譽れ高かつたのであるが、十四年春以來病を得て又た昨年八月十四日遂に易世した事は、藤田組は元より廣く我財界の爲に誠心痛惜に堪へぬ、而も花再び枝に復らず、氏の後任として田中隆三氏を迎へられたので銀行部取締役の空位も勿論氏に依つて満たされるであらう。更に鈴木常務と共に行務に操縦する重役に上田常記、市川誠の兩氏が在り、上田氏は











所謂通商材の妙に依り同行の業績をして萬代不易の泰きに  
 慮せしむるの策であると思ふのである。況んや取締役兼支配  
 人として松葉助氏を始め加藤、三輪の故郷家のあるに於て  
 横田氏の女房役として必ずや見るべき成果を齎すこと勿論で  
 あらう。此の如く谷村會長、横田事務を中心として松葉、  
 加藤、三輪の三者が相協賛する時、同行の基礎は更に九鼎大  
 呂の重きに處すべく、其の業績の將來も亦数段の光彩を發揮

株式藤本ビルローカー銀行營業成績累年比較表

項目	第三十一期 大正十一年 六月末	第三十二期 大正十二年 十二月末	第三十三期 大正十三年 六月末	第三十四期 大正十二年 十二月末	第三十五期 大正十三年 六月末	第三十六期 大正十三年 十二月末	第三十七期 大正十四年 六月末
負債ノ部	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資本金	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000
預金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
貸付	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
其他	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
損益	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000

するに至るべきを疑はないのである。現重役左の如し。

- 取締役 谷村一太郎
- 取締役 渡谷保太郎
- 取締役 加藤 功
- 取締役 八木與三郎
- 監査役 桑原 虎治
- 専務取締役 横田 義夫
- 取締役 松葉 助
- 取締役 三輪 小十郎
- 取締役 柳 廣藏

株式大阪貯蓄銀行(本店大阪市東區伏見町二)

資本金 二百萬圓(拂込済)  
 諸積立金 五百八十三萬圓  
 諸預り金 九千六百十六萬圓

有するに至つた、云ふ迄もなく貯蓄預金は此種的小口預金で  
 あるから此の巨額を得るには口數を非常に多く集めねばなら  
 ず、隨つて其處に銀行自體の信用程度を論議せらるゝのであ  
 るから、貯蓄銀行大成の體も此處に在る理であるが、同  
 行が叙上の如き巨額の預金を有するに至つた事は、取りも直  
 さず其の信用の深厚なるを立證して餘りあるもの云はねば  
 ならぬ。

最も古い歴史 同行は人も知る大阪銀行界の播磨時代  
 より今日の隆盛を招きしめたる恩人、平瀬源之助翁等の手  
 に依つて明治二十三年に創立されて以來、時勢に適應する經  
 營方針を以て終始、起伏なき世界を突破して逐年  
 業績の隆興を告げて今日に至つたもので、大阪に本店を有  
 する銀行中、其の歴史に於て相當古きものである、否寧ろ株式  
 組織の民間銀行としては最も古の福利である、而してそれ  
 と同時に所謂船場商人の根據地たる伏見町の一角に居を構へ  
 た地の利より云ふも其の創業早々にして前途運進なるべく素  
 地付られて来たのである、今や二百萬圓の拂込資本を以て、  
 よく前述の如き莫大なる預金を吸収し、五百八十餘萬圓の諸  
 準備金を有する堂々たる銀行として總大の信用を博してゐる  
 預金の運用状態如何 此の莫大な預金が如何なる方面  
 に運用されてゐるかを見るに、大正十四年上期末の計算に依  
 るに

公債及外國債 五九、〇八五千圓  
 社債及株式 二六、六八九

株式大阪貯蓄銀行營業成績累年比較表

項目	第六十三期 大正十一年 六月末	第六十四期 大正十二年 十二月末	第六十五期 大正十三年 六月末	第六十六期 大正十二年 十二月末	第六十七期 大正十三年 六月末	第六十八期 大正十三年 十二月末	第六十九期 大正十四年 六月末
負債ノ部	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資本金	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000	200,000
預金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000
貸付	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
其他	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000
損益	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000	100,000

絶対なる信用 貯蓄銀行にして九千萬圓以上一億に近  
 い預金を吸収し居れるもの東京の不動銀行を別として恐らく  
 當行を以て唯一無二稱すべきであらう、大正十一年頃まで  
 は四百五十萬圓の預金を往來し居たものが十二年下期以後増加率  
 を以て十四年上期末には九千六百十六萬圓の貯蓄預金を

以上は其の大部分は有價証券であるが、公債社債類は殆  
 んど現金と大差なき融通力を有し株式も質優良なるもの  
 を選擇し而も僅かに八十八萬二千圓に過ぎない、而して諸  
 貸付は有價証券抵保百三十五萬三千圓で他は預金者に對する  
 貸付であるから論ずるに及ばない、叙上の如く合計八千四百  
 三十六萬九千圓を運用されてゐる外は四百三十五萬圓の預  
 け金と百六十五萬圓の現金、合して六百萬圓を有し之れに  
 加ふるに五百餘萬圓の積立準備金を以てすれば他の所有財産  
 等を計算外とするも尚且つ預金に對する十分な保證準備を  
 備へてゐる譯であるから、其の内容は極めて完全なるものと稱  
 するに躊躇しないのである。

現任重役諸氏 同行の業績叙上の如く良好なるに徴し  
 最も信頼するに足る銀行たる事に疑はないのであるが、更に  
 之れを力強く裏書するの一事は、關西世界の巨入口王國を  
 背景に有することである、即ち同行資本の大部分は山口家に  
 依つて投せられ、普通銀行中の巨將山口銀行と姉妹關係にあ  
 るので重役の如き其の系統の十が多い、即ち現任重役は左  
 の諸氏である。

- 取締役 平瀬三七雄
- 取締役 山口吉郎兵衛
- 取締役 坂野 兼通
- 監査役 野々村政也
- 取締役 山口竹治郎
- 取締役 外山 捨造
- 監査役 宅 徳平





於て、其の犠牲的献身的努力に對し何等の報酬をも得やうとせぬ同行重役諸氏の誠意より自らの収入を薄くして有事の際に備へるが爲めに之れを資本力に投入して居る點は即ち愛行の念深きを立證するものであり、而して其の業績の益々隆實となり、信川の博大を加ふる所以である。現任重役は左の諸氏である。

株式 攝池銀行 營業成績比較表

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	資本金	1,000,000
諸積立金	1,000,000	未償資本	800,000
諸預り金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
其他	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
合計	4,000,000	其他	1,000,000
		合計	4,000,000

株式 國分銀行 (南河内郡國分村)

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

株式 五十一銀行 (岸和田市本町)

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

株式 五十一銀行 營業成績比較表

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

株式 和泉銀行 (本店岸和田市)

之亦寺田家の事業である。資本金百萬元、全額拂込済みで預金三百五十六萬圓、貸出二百四十七萬圓、積立八十三萬六千圓を有し、二百五十萬圓の有價証券、三十九萬圓の現金を有して居る。資本の割合から云へば五十一銀行よりも良好な成績を云へよう。重役は殆んど寺田一門で堅められて居る。十四年上期の業績より主要科目を抜き上げて見るに次の如くである。

第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	
諸預り金	3,568,243	3,568,243
諸積立金	836,100	836,100
他店ヨリ借	495,605	495,605
諸貸出金	2,476,687	2,476,687
有價証券	1,501,527	1,501,527
現金有高	592,705	592,705
純益	86,188	86,188
配當率	(年一割)	(年一割)

株式 大阪實業銀行 (大阪市西區新町通四)

日清戦役後即ち明治二十八年頃、當時大阪財界の頭目株主として羽振を利かした土原通夫、片山和助、今井武兵衛、道

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

株式 大阪實業銀行 營業成績比較表

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

株式 貝塚銀行 (本店泉南郡貝塚町)

創業以來五十八期の決算を迎へてゐる古銀行であるが、僻地の地に在るだけ其の業務は擴大されてない、試みに大正

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

十一年下期三十四年上期の業績を比較して見るに左表の如く預金は漸減の傾向であり利息金亦低下して居る。近き岸和田寺田家の銀行合同實現せば同行も當然其の傘下に加へられるであらう。現在重役は左の諸氏である。

吉田榮三郎 清田辰吉  
以上の諸氏であるが北村重取は大阪府下に於ても有数の財封家であり大阪農工銀行重役の一人たり當代の名望家として知られて居る。山岡、良本其他の各取締役何れも地方の資産家たり有力者たるが、淺井支那人亦其に銀行實務精通家として知られ、結核病に苦むるが故に退任して未だ曾て對策を講ず、同行の業績をして今日の隆盛ならしめた唯一の功勞者である。其の反動期後の財界不況期に際して善處し來つた點より見るも必ずや一段の活躍を期するに疑ひなく、其の業績を見るべきも多かるべしと期待される。左に同行十一年下期末三十四年上期末の業績を比較對照して見よう。

負債ノ部		資産ノ部	
第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末	第五十五期 大正十一年 十二月末	第六十期 大正十四年 六月末
資本金	1,000,000	未償資本	800,000
諸積立金	1,000,000	貸付金及割引手形	1,000,000
諸預り金	1,000,000	預金及他店借	1,000,000
其他	1,000,000	其他	1,000,000
合計	4,000,000	合計	4,000,000

岸和田市を代表するもの實に寺田一族であり、岸和田の富カ即ち寺田一門の富である云はれる程、寺田一派の勢力は大きい、其代表的事業の一を岸和田初級とし一を五十一銀行とする、尙ほ他に和泉銀行、寺田銀行等あれこれと近き合同の機運ありつゝあり、やがて一九一〇に歸せらるゝものと察せられるを以て五十一銀行即ち代表金融機關たるの地位に處するものである、これを業績の上より見て市中銀行に比し直ちに良好の成績なりとは斷じ難きも而も岸和田の如き邊僻の地に於て此の成績あるは寧ろ優良の業績と稱し得る、只幾分消極に失するは手堅い事此上なければ活躍すべき前途ある同行として果して如何なるものか、經營者の一考を要すべき點ではあるまいか。現任重役は左の諸氏である。

取締役重取 寺田元吉 取締役 寺田其與茂  
取締役 岸村徳平 同 濱口龜太郎  
同 田代 同 監査役 谷 深藏  
同 監査役 浦田其右衛門 同 佐々木信次郎

頭取 取廣海太郎 常務取締役 高田源四郎 同業支配人 西野常太郎 監査役 宇野藤吉  
 取締役 寺田徳三郎 取締役 岸上又一 監査役 脇坂清部

株式 貝塚銀行 營業成績比較表

項目	第五十二期	第五十七期
負債ノ部		
資本	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000
未拂利息及未経過引料	1,000,000	1,000,000
当期純益	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000
資産ノ部		
未拂込資本	1,000,000	1,000,000
出資	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ貸出	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有土地建物什器	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000

株式 岸和田銀行 (岸和田市町)  
 岸和田に於ける寺田王國を向ふに題し或は弱縁に或は金融機關に、相當の地歩を固めて相對峙し以て單調平凡に化せんとする同地實業界に一服の清涼劑を投じ得るものは、實に宇野氏一派である。此の牙城あるが爲めに、岸和田の富は尙ほ寺田氏一門の壟斷を阻み得る所以であつて、同地財界の爲めに慶すべき事業云々はねばならぬ。即ち岸和田銀行は宇野氏

株式 岸和田銀行 營業成績比較表

項目	第五十七期	第六十一期
負債ノ部		
資本	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000
未経過引料	1,000,000	1,000,000
当期純益	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000
資産ノ部		
未拂込資本	1,000,000	1,000,000
出資	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ貸出	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有土地建物什器	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000

株式 川上銀行 (本店大阪東區船場)  
 當行は大正八年五月の設立で川上利助氏の個人銀行である。歐戰好況期には相當の成績を挙げたが反動期以來業績は漸次大正十三年上期遂に整理を發表するの已むなきに至つた。而

株式 川上銀行 營業成績比較表

項目	第十二期	第十三期
負債ノ部		
資本	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000
未経過引料	1,000,000	1,000,000
当期純益	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000
資産ノ部		
未拂込資本	1,000,000	1,000,000
出資	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ貸出	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有土地建物什器	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000

株式 和泉貯蓄銀行 (岸和田市)  
 資本金 百 萬 圓  
 拂込資本 二十五萬圓  
 諸積立金 十一萬五千圓

株式 和泉貯蓄銀行 營業成績表

項目	負債ノ部 (十四年上期)	資産ノ部 (十四年上期)
資本	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000
未経過引料	1,000,000	1,000,000
当期純益	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000
資産ノ部		
未拂込資本	1,000,000	1,000,000
出資	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ貸出	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有土地建物什器	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000

株式 日本相互貯蓄銀行 (本店大阪東區船場)  
 資本金 二百五十萬圓  
 拂込資本 十二萬五千圓  
 準備金 八千圓

株式 日本相互貯蓄銀行 營業成績表

項目	負債ノ部 (十四年上期)	資産ノ部 (十四年上期)
資本	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000
未経過引料	1,000,000	1,000,000
当期純益	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000
資産ノ部		
未拂込資本	1,000,000	1,000,000
出資	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ貸出	1,000,000	1,000,000
所有不動産	1,000,000	1,000,000
所有土地建物什器	1,000,000	1,000,000
其他	1,000,000	1,000,000
其他共合計	1,000,000	1,000,000









公積金	特別公積金	定額預金	通知預金	他種預金	未経過利息	前年繰越利益	当期純益	其他共計	貸出未済資本	諸債	手形	當座預金	引当金	他種引当金	所有権証券	債権証券	株券	営業用土地建物什器	現金	其他共計
1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000	1,166,000

株式 神戶岡崎銀行 (本店神戶市東區本町)

資本金 二千 萬圓  
 拂込資本 千二百五十 萬圓  
 諸積立金 六百五十 萬圓  
 諸預り金 二千五百七十六 萬圓

神戸市に於ける有数の實業家として或は海運界に、或は保險界に、或は金融界に多岐にわたる事業を有し、聲名頗る高き岡崎家の事業たる當行は、歐戰好況期の最中たる大正六年五月資本金一千萬圓を以て設立され爾來長足の發展を遂げ財界の影響するに伴ひ同行亦倍増資を行つて現今の二千萬圓、千二百五十萬圓拂込の堂々たる銀行となつたのである。此間經營の手腕に卓越せる岡崎頭取は勿論、岡崎忠雄氏の新進潑潑たる經營振りは多數同業をして驚異の眼を瞠らしめたる程で僅かに數年にして兵庫縣下唯一の資本を有する銀行たらしめ

株式 神戶岡崎銀行營業成績累年比較表

資	負債之部	第十期	第十一期	第十二期	第十三期	第十四期	第十五期	第十六期
資本金	負債之部	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000

其の尨大なる資本力を以て我産業界發達の上に盡したる功績は決して少くなかつたのである。現に二千五百萬圓の諸預り金を有し三千八百萬圓の諸貸出を算するに至り、殊に大阪支店の如きは北濱市場に有名なりし岩本榮之助氏榮華の誇りとして残された堂々たる店舗を買収し北濱一帯に相當有力なる地盤を作り得たる關係もあり、證券取引資金の供給にも努力してゐるので新界に於ても好評を博してゐる。斯くして毎期數十萬圓の純利益を計上してゐるのである。同行は云ふまでもなく岡崎忠雄氏の側有銀行である關係上、重役の如きも多く他より迎へず、事務たる忠雄氏が殆ん其の全部を切り廻してゐる。殊に岡崎頭取は過數の多額納税議員選舉に際して貴族院議員に選出されたので政治的方面にも多忙の身であり勞々々息たる忠雄氏の一層活躍を要する譯であるが性豪の活動家たる氏は尚ほ數段の飛躍を續けるであらうと稱されてゐる。現重役は次の諸氏である。

- 取締頭取 岡崎 忠雄
- 監査役 百崎 俊雄
- 取締頭取 岡崎 藤吉
- 專務取締役 岡崎 忠雄

資	負債之部	第十期	第十一期	第十二期	第十三期	第十四期	第十五期	第十六期
資本金	負債之部	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000

株式 五十六銀行 (本店明石市西區本町)

資本金 百三十萬圓(拂込済)  
 諸積立金 百三十二 萬圓  
 諸預り金 一千六百六十 萬圓

明石市に於ける實業家として名聲を著して知られた大澤吉太郎氏一派の勢力は赤兵庫縣に於ける重要な地歩を占むるものである。其の多數關係事業中同行の如きは代表的事業の一つであらねばならぬ。創業以來既に三十年に亘る古き歴史を有し現今一千六百六十萬圓の預金と百三十萬圓の諸積立金を有してゐる。之れを拂込資本の百三十萬圓に對比

すれば前者は十三倍弱、後者は十割強に相當し全資本を超過する積立金を擁してゐる事は如何に内容の堅實であるかを窺知するに十分である。此の業績の上に處して米澤頭取を始めとし多數重役諸氏の奮闘協宜に通じ信用益々加はり業務益々發展の途を辿りつゝある。就中米澤氏一氏の如き頭取の令息として乃父を代表し行運の進展に努力してゐるのであるから其の前途は甚だ多量に云ふの他ないであらう。

- 頭取 米澤吉太郎
- 取締役 中濱平三郎
- 同 柏木得男
- 同 高井利一郎
- 監査役 浪花 貴一





株式 加古川銀行 (加古郡加古川町)  
設立 明治二十九年三月  
資本金 百二十萬圓  
拂込額 百二十萬圓  
總株數 二萬四千株  
重役 (頭取) 永田章(取替) 尾尾龜松、岡崎吉藏、村原助次、山中藤吉、巖田武三、蟹江壽一、監査) 谷村文藏、平田友治、岡山文次郎

株式 東播銀行 (加東郡社町)  
設立 明治二十九年二月  
資本金 二百萬圓  
拂込額 九十五萬圓  
總株數 四萬株(舊一萬二千株)  
重役 (取替) 石井兵衛、白井吉次郎、岡澤健立、大、末庄泰二、阿江勳、上月安重郎、運來兵衛(監査) 大熊千太郎、廣田傳左衛門、田淵仁一郎

株式 小野銀行 (加東郡小野町)  
設立 明治二十六年七月  
資本金 百萬圓  
拂込額 四十五萬圓  
總株數 二萬株(舊三千株)  
重役 (常務) 永池祐治(取替) 兒島政次郎、橋本謙助、兒島秀次郎、藤尾助藏、岸本丈太郎(監査) 岸本長司、前田小彌太

株式 柳城銀行 (加東郡小野町)  
設立 明治三十二年六月  
資本金 百萬圓  
拂込額 五十萬圓  
總株數 二萬株(舊七千株)  
重役 (頭取) 田中武雄(取替) 堀林之助、坪田久太郎、安積靜、奥本傳吉、濱田藤次郎、(取替) 支那) 小宅正造(監査) 上田義一、坪田憲、兒島秀次郎

株式 上郡銀行 (赤穂郡上郡町)  
設立 明治二十八年十月  
資本金 百萬圓  
拂込額 六十二萬五千圓  
總株數 二萬株(舊一萬株)  
重役 (取替) 西脇秀三郎、長安儀右衛門、西川新、高田貞治(監査) 竹田貞一、三宅藤太郎(支那) 孝橋謙夫(副支那) 前川義之助

株式 多可銀行 (多可郡中村)  
設立 明治二十九年六月  
資本金 百萬圓  
拂込額 七十二萬五千圓  
總株數 二萬株(新舊等分)  
重役 (頭取) 藤井忠兵衛(副頭取) 山口新五郎(取替) 土本與左衛門、藤田平右衛門、藤井孫右衛門、池田利右衛門(監査) 宮田彌太郎、細田昌二、藤井六太郎(支那) 藤井信太郎

株式 西脇商業銀行 (多可郡西脇町三〇)  
設立 大正九年一月  
資本金 百二十五萬圓  
拂込額 二十五萬圓  
總株數 二萬五千株  
重役 (常務) 藤井滋吉(取替) 石井兵衛、西村隆次、岡澤健立、藤井謙、藤井忠兵衛、上月安重郎、末庄泰三郎、末庄靜一(監査) 土肥信太郎、村上喜兵衛、丸山高右衛門、末住梅吉、遠藤松次郎

株式 五十五銀行 (山形郡石町)  
設立 明治十一年九月  
資本金 百六十八萬圓  
拂込額 六十八萬圓  
總株數 二萬株(舊七千二百株)

株式 加西銀行 (加西郡北條町)  
設立 明治三十年五月  
資本金 百二十萬圓  
拂込額 百二十萬圓  
總株數 二萬四千株  
重役 (頭取) 近藤源吉(取替) 服部顯、田中市太郎(取替) 支那) 河島彌十(監査) 宮崎仲藏、牧野市五郎、田中寅之助、稻富豊助

株式 北條銀行 (加西郡北條町)  
設立 明治三十四年五月  
資本金 百二十五萬圓  
拂込額 百二十五萬圓  
總株數 四萬株(新舊等分)  
重役 (頭取) 志方謙藏(取替) 宮崎甚吉、岩本熊太郎、岩本助兵衛、柏木顯治、山口大郎、中川萬興(監査) 內藤清治、三枝角太郎、增田耕作、佐伯虎吉、菅原四郎、玉置五兵衛

株式 龍野銀行 (播磨郡龍野町)  
設立 明治二十二年二月  
資本金 百拾萬圓  
拂込額 九十六萬二千五百圓  
總株數 二萬二千株(新舊等分)  
重役 (取替) 廣茂吉、三宅雄城、堀真一、淺井彌兵衛、瀧口大七、三木定七、竹内伊八郎、片岡敬次郎、井口敬正(取替) 支那) 須藤良三(監査) 林宗兵衛、玉田政太郎、種管理兵衛、仲原貞

株式 網干銀行 (播磨郡網干町)  
設立 明治二十七年十一月  
資本金 百二十萬圓  
拂込額 七十萬五千圓  
總株數 二萬四千株(新舊等分)  
重役 (取替) 富岡勝吉、松本水五郎、山本重藏、船田實之助、吉田善之助、川中實吉(監査) 富岡清治、太田勝作、改野三三

株式 豐岡銀行 (播磨郡豐岡町)  
設立 明治二十年十月  
資本金 百萬圓  
拂込額 六十二萬五千圓  
總株數 二萬株(新舊等分)  
重役 (頭取) 原庄七(常務) 橋本卓爾(取替) 坂川恒太郎、瀧田清兵衛、富田登(監査) 小堀瀧兵衛、松井增太郎、西垣勳次郎(支那) 坂井喜三郎

株式 福本銀行 (神戶郡福本町)  
設立 明治二十一年六月  
資本金 百萬圓  
拂込額 五十八萬圓  
總株數 二萬株(舊六千株)  
重役 (取替) 藤澤信一、木村藤太郎、渡邊清右衛門、藤田耕次、藤澤三太郎、高橋大治郎(監査) 大渡鶴吉、奥野博治郎(支那) 藤澤三太郎

株式 東淡銀行 (津名郡東淡町)  
設立 明治三十一年十月  
資本金 百五十八萬圓  
拂込額 五十八萬圓  
總株數 二萬株(舊六千株)  
重役 (常務) 藤山虎三郎(取替) 武田俊夫、正木正行、田邊孝之、田邊理三郎、井手本三郎、渡嘉四郎(監査) 上田多吉、六條雅吉、正井隆久藏

株式 淡州貯蓄銀行 (津名郡淡州町)  
設立 大正十年十二月  
資本金 百二十五萬圓  
拂込額 二十五萬圓  
總株數 二萬五千株  
重役 (取替) 增田俊太郎、加藤淳一、仲野理一郎、田中一郎、田中萬米、太田文太郎、濱中二平、隨賀與一郎(監査) 澤田小一郎、正木長八郎、奥村安一郎、服部和吉、仲野安一

6、愛知縣總論

愛知縣の財界の地位は之れを論ずる迄なく既に種々の事實が自ら価値を付けてゐる。就中最も興味あるは同地主業銀行を中心とした財界の勢力消長問題に於けるものなり。

株式 愛知農工銀行 (名古屋市中區新栄町二)

設立 明治三十一年五月
資本金 六百 萬 圓
拂込額 四百五十 萬 圓
株数 十二萬株(舊八萬株)

切つて大正九年當時の業績の一部を見るに其の経営方針の如何に堅實主義を以て善處してゐるかを窺ふ事が出来る。

現任経営者 此を創業當時に比すれば著しく變化を來してゐるが、而もそれは時代の進展に伴ひ人物の上にも新陳代謝の行はるべきは當然であり、又これらに依つて業績の隆興を期し得るのである。

株式 愛知銀行營業成績累年比較表

Table with columns for years (大正十一年 to 大正十五年) and rows for assets (資本金, 諸準備金, 負債) and liabilities (預金, 定期預金, 當座預金).

の部類に属する。現今六百萬圓の資本金、四百五十萬圓の拂込額、二百三十餘萬圓の積立金、六百八十餘萬圓の預金を有し、二千餘萬圓を貸出している。

株式 愛知銀行 (名古屋市中區西區)

資本金 一千五百 萬 圓
拂込資本 一千二百 萬 圓
諸準備金 六百九十八 萬 圓
諸預り金 一億三千三百八十 萬 圓

沿革と資本の移動 名古屋三銀行の第一位に處する同行は明治二十九年三月、恰か日清戦後の財界恐慌に際し當時第十一、第十三、第十四兩銀行を合併して時めきし徳川義助、伊藤次郎、伊藤三郎、伊藤山太郎等名古屋に於ける素封家、名望家を擁護し資本金二百萬圓を以て前記兩銀行の事業を繼承し愛知銀行と改稱せられたものであつて、即ち舊藩主たる徳川家と名古屋土著の舊家たる伊藤、岡谷兩家を始め多くの名望家を一堂に集めたかの感あらしむるものが我愛知銀行である。

事業概況及其内容

由來名古屋の土地は遷徙主義の傳統せる土地であり新取的風氣の乏しき慣習に因はれた處である。稱せられた爲めに、其の土地にははる多くの事業界も自然此の風習に馴致して美觀な地味であり、温進善實の質を豊富に有してゐる、其の創設者の一派が名古屋に於ける名門士流社會を擁護してた愛知銀行に品格を高にして紳士的態度の備はるは之れ自然の勢ひ云ふべく稱して貴族的銀行の名ある亦故なきではないのである。











未拂利息及未経過引料 三三、五八四  
常期純益金 二一六、六四一  
合 計 三四三、一九七四

資産ノ部

未拂込資本 一、一五〇、〇〇〇  
所有有價証券 一九、六〇三、三八〇  
諸貸付金 二、八五三、三七一  
預金 九、八八〇、七五〇  
土地建物什器 四一、一八七〇  
新築費助定 二一、六四一  
現金 有 三九八、二五九  
合 計 三四三、一九七四

配當計算

金二十一萬六千六百四十二圓  
内 拾萬圓 常期純益金  
五千圓 諸積立金  
八千圓 役員恩給基金  
六萬三千六百六十七圓(年一割一分)株主配當金  
四萬三千七百七十四圓 後期繰越金

株式 中笠銀行 (多郡市町)

設立 大正六年四月  
資本金 二百萬圓  
拂込額 百萬圓  
諸積立金 二十三萬圓  
諸預り金 四百九十三萬圓  
重役 中笠半左衛門、中笠又左衛門、中笠半六、中笠良吉、都築廣次、中笠半助、中笠紅平

株式 知多銀行 (多郡内河町)

設立 明治二十八年  
(大正十一年組織變更)  
資本金 百萬圓  
拂込額 二十五萬圓  
諸積立金 二十四萬五千圓  
諸預り金 四百七十八萬圓  
重役 (頭取)内田佐七(常務)神谷市太郎(取締役)伊藤嘉七、日比久四郎(監査役)天岩善七郎、伊藤敬四郎、内田七郎

株式 衣浦銀行 (多郡内河町)

設立 明治二十八年五月  
資本金 百萬圓  
拂込額 三十二萬五千圓  
諸積立金 十萬圓  
諸預り金 三百十六萬圓  
重役 (頭取)伊東重雄(取締役)伊東重二、野田長兵衛、新美次郎八、加藤利左衛門、伊藤忠雄、伊藤忠雄

株式 碧海銀行 (碧海郡安城町)  
設立 明治三十二年三月  
資本金 二百萬圓  
拂込額 八十七萬五千圓  
總株數 四萬株(舊一萬株)  
重役 (頭取)太田佐兵衛(事務)原田鏡太郎(取締)神谷八郎、岩田以手紙、岩間新右衛門(監査)眞野丈、堀尾要、藤井清七

株式 稻澤銀行 (中島郡稻澤町)  
設立 明治三十三年四月  
資本金 百萬圓  
拂込額 三十六萬二千五百圓  
總株數 二萬株(舊三千株)  
重役 (頭取)小田佑一(取締)岩田吉兵衛、原平左衛門、田中甚三郎(同支配)三輪常三郎(監査)小田次郎、小田藤吉、丹羽政美

株式 北設樂銀行 (北設樂郡田口町)  
設立 明治三十四年四月  
資本金 百萬圓  
拂込額 四十萬圓  
總株數 二萬株(舊四千株)  
重役 (頭取)熊谷隆平(頭取)福谷守男(取締)夏目伊藤、佐々木信八、松下米三郎(監査)本多藤雄、丸山利吉、原田眞一、深見林右衛門、後藤泰治郎

株式 大野銀行 (八名郡大野町)  
設立 明治二十九年四月  
資本金 百五十萬圓  
拂込額 百七十五萬圓  
總株數 二萬三千株(舊一萬三千株)  
重役 (頭取)大橋正太郎(常務)鈴木和一(取締)中根福太郎、戸村文三郎(監査)天谷健次郎、渡邊龍藏

株式 尾張貯蓄銀行 (名古屋市中區上野津町)  
設立 明治二十七年七月  
資本金 百萬圓  
拂込額 二十七萬二千圓  
總株數 二萬株(舊六萬株)  
重役 (頭取)尾崎善雄(取締)青山孝太郎、千賀千太郎(監査)内藤龍藏、池田仙一郎(支配)眞野丈

7、靜岡縣總論

本縣は其の管轄範圍非常に廣汎なるのみならず、静岡、濱松の古來有名な小都會地を有するに、三島、島田、掛川、二俣、熱海等に普及達達し其の行數に於て東京、兵庫に次ぐ第三位に在る大正十二年現在の調査に據れば普通貯蓄合計で三百三十八萬の多きに達し此は前年比で九百九十七萬六千圓に計上され、勿論前年比の異動ははたたりとすも、大體に於て現今の趨勢を知り得る譯である。而して叙上三十八行の中、資本金百圓以上を有するものは僅かに二十行に過ぎず尙ほ資本金の上にて著しく低位にあるを認めない譯に行かぬ、同縣も亦兵庫縣と同じく合同促進の要がある。即ち静岡、濱松の三市を中心として其の有力銀行の傘下に合同して資本集中を策し内容の充實を圖るべきが急務であらうと思はれる。更に以上三市に於ける差況の消長を見るに百萬圓以上の銀行数を有することに於て濱松最も優れ預金吸收率の上にては沼津最高位にある、試みに全縣下各主要地に於ける代表的もの數行に就て資本金、預金、貸出等の比較を表示すれば次の如くである。(單位千圓)

銀行名	資本金	預金	貸出
駿河(沼津)	1,100	1,100	1,100
三十五(静岡)	1,100	1,100	1,100
遠州(濱松)	1,100	1,100	1,100
伊豆(三島)	1,100	1,100	1,100
沼津(沼津)	1,100	1,100	1,100
遠江(濱松)	1,100	1,100	1,100
御厨(沼津)	1,100	1,100	1,100
二俣(二俣)	1,100	1,100	1,100

株式 駿河銀行 (沼津市本町)  
資本金 六百萬圓  
拂込資本 三百九十萬圓  
諸積立金 百十五萬圓

諸預り金 三千四百二十萬圓

沿革 當行は明治二十八年十月の創立で行給既に三十年決算期を迎へる、六十圓に及び其間常に時流を遠視し克く之れに順應して經營し來れる結果業績大いに擧り、歐戰好況期に際するや其の内容を充實し資本金亦二百七十萬圓に達したが十二年更に増資し以て其の根據地をなす業況銀行を合併して五十萬圓を増資し以て其の根據地をなす業況甚だ賑はれたるが、財界反動期に現象として一般に企業資金の需要なく金融界亦漸く開放の度を深くしたのであるが同年下期未嘗の大震災關東一帯を襲ふ所となり、同縣下以東の中心地なりし爲め之れが復興資金の需要著しく増加したるより其の供給目的の下に翌十三年二百八十萬圓を増加して總資本六百萬圓となし、三百九十萬圓の拂込資本となつて今日に至つたのである。

歐戰前後の差況 叙上の如く同行は資本金に異常の進展を示してゐるが、之れを業績の上にて如何に活用し來つたか即ち歐戰前後の營業狀態如何を檢討して見るに次の如く表示し得る。(單位千圓)

年次	大拂込資本	積立金	預り金	貸出	有價証券
二年	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
八年	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
十年	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
十二年	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
十三年	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100

即ち右表の示す如く各科目に於て大正二年當時が如何に貧弱なりしかを知るに同時に八年以後好況期に於て著しい影響を示してゐることが判然する。就中其預金に於て二年頃の三百萬圓程度なりしものが、八年には五百萬圓となり更に七倍となり十三年に至つては更に五倍強となり更に七倍に達したるに於て、之れが如何に活用し來つたか即ち歐戰前後の營業狀態如何を檢討して見るに次の如く表示し得る。(單位千圓)

最近の業績如何 次に十四年度上期の成績を見るに預金に於て前期に比し二十萬圓の増加を示し貸出に於て二百五十萬圓の減少を示し、これ一面に於て貸付金の回収されたる割合に新規貸出の手段へられたる事を物語るもので、現今の財界事情に鑑み誠に當を得たる營業方針に稱すべきであらう。而も收入利益其他利益助定に於ては特に著しき減少を來さず常期純益は前年同期に比し一萬九千圓の増収となり株主配當も従来一割一分なりしを当期は一割二分の配當を行つてゐる、これらの總てを通じて見たる同行の業績は要するに財界

時代代なるが故に市場面を展開するの緒に就き得ないが、而も總括的に之を評すれば外面的に伸びざる内面的充實を圖る意味に於て極めて顯明にして且つ堅實なる現況であり前亦大いに活躍に資する準備全く成れり。諸君の御注意あり。此の如く良好なる業績を挙げ得た同行重信諸氏は大の如き御願れであるが何れも懸下掲指の名士であり其の關係手腕等に至つては世既に定評ある高なるが故に特に是を記す。

株式駿河銀行營業成績比較表

負債ノ部	第五十二期		第五十七期		第五十九期		第六十期	
	下十二期	下十三期	下十二期	下十三期	下十二期	下十三期	上十四期	下十四期
資本積立金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
公積金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
特別當座預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過引当	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期末繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
負債ノ部合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資産ノ部								
未経過引当	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期末繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資産ノ部合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

株式三十五銀行 (静岡市奥島町)  
 資本金 五百八十萬圓  
 繰込資本 四百七十五萬圓  
 諸積立金 百五十五萬圓  
 諸預り金 二千四百三十萬圓

静岡に於ける製茶事業界唯一の金融機關として自覺し活躍を期し地方産業界の上に多大の貢献を爲し、ある三十一年五銀行は、明治十一年五月の創業で行信實に四十八年の古き歴史を有し、本邦銀行中於ても古き種の銀行である。

方針の堅實なるを内容の充實せるを而して經營者事務の有力家たる點に於て一般世人から絶大な信用を博し、業績年々共に増え、資本力又逐年増大され歐戰好況期以來頗る起天の度を加へ資本五百萬圓に達した。而して幾近銀行合辦論の喧傳せらるや、同行經營者諸氏は資本集中主義の最も堅實なる發達を期す所以なる點に著眼し之れが實現に對意し大正十一年先づ同種下の静岡田、遠隔の二行を合併して資本金五百萬圓を加へ、更に十二年一月産業銀行を合併して廿五萬圓増し、總資本五百八十萬圓の多きに達し以て今日及んだのである。而して此の繰込四百七十五萬圓を以て最も時勢に適應した運用方法を試み完全なる金融機關たる職責に任じつ、ある、試みに相互の業績を覽見するに、大正十

株式遠州銀行 (濱松市鳴尾町)  
 資本金 七百萬圓  
 繰込額 四百八十五萬圓  
 諸積立金 二百五十萬圓  
 諸預り金 一千八百八十五萬圓

以上によつて明示せる如く預金は逐次増加を示し、貸出率は預金に對する八八%を出で、堅實なる營業方針たるを窺はれる。殊に毎期五十餘萬圓の純利益を計上し一年一割の株主配當を行ひ得た業績は蓋し同種下に於ける首位を爭ふ良好の業績と稱せねばなるまい。現在重役の任に在る諸氏は次の如く、何れも縣下有数の人材揃ひなるに徹し同行前途の飛躍を推測するに足るであらう。

百餘萬圓を有し、社會の信用極めて偉大な遠州銀行は實に濱松の金融界を代表するものである。濱松市の經濟的活潑力の旺盛な事は今更論するまでもなく或る意味に於て静岡市を凌駕するかの觀あるを否まれない。隨つて金融機關の發達も亦頗る目覺しき者あるとに異論ないであらう。此活動力に富んだ濱松の財界をして健全なる活躍を成さしめつ、ある同行は歐戰好況期の大正九年三月に創立され爾來最も時宜に通じた經營方針に準じて逐年隆盛の域に達し反動期に際しても巧みに其の波瀾を乗り切り預金の如きも益々増加の一途を辿り創業後幾多の難年を出でざるに早くも二千萬圓に達する巨額を擁し得たのである。殊に十二年下屆の大震災時に於て同地方に輿論なき商取引停止状態の可成り續きたるに對し、其の業績は頗る良好で昨年十二年末より寧ろ優良の成績を示し得た。即ち十二年末には純益四十四萬一千餘圓を挙げたに比し十三年末には四十萬圓を出でなかつたのである。而も最近の經濟界は恐慌の狀態なるに徴して同行が此の如き良好の成績あるは之れ要するに經營者諸氏の卓越せる手腕に歸せねばならぬと同時に此の模範的經營者を有する同行の前途は其の幸福であり且つ多望である云はねばならぬ、現任重役は左の諸氏である。

職務	氏名	職務	氏名
取締役頭取	高林 義虎	常務取締役	中山 均
取締役	神谷 八太郎	取締役	田畑 良三郎
取締役	竹山 純平	取締役	内田 正
取締役	深澤 吉平	取締役	藤田 三郎
取締役	佐藤 喜代藏	取締役	金原 明治
取締役	平野 又十郎	取締役	鈴木 信一
取締役	鈴木 五郎作	取締役	鈴木 實七郎
取締役	津食 龜作	取締役	山田 實太郎
取締役	古橋 啓次郎	取締役	金原 義一
支配人	内山 茂藏		

株式遠州銀行營業成績比較表

負債ノ部	下十二期		下十三期	
	前期	後期	前期	後期
資本積立金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
公積金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
特別當座預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
定期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過引当	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
他店ヨリ借入金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未経過利息	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期末繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
負債ノ部合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資産ノ部				
未経過引当	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
前期末繰越金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
其他共計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
資産ノ部合計	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000



（専務）平野繁太郎（常務）田中五郎兵衛、御宗三三、鈴木初藏  
市川史平、白尾金太郎、深田卓二、大富部、中村彌八、三  
（因に當行は近江銀行に買収合併せらるべし）  
（四）當行は近江銀行に買収合併せらるべし）

株式 遠江銀行 營業成績比較表

負債ノ部	十二期	十三期
資本	1,000,000	1,000,000
積立金	1,000,000	1,000,000
預金	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000
合計	4,000,000	4,000,000
資産ノ部		
現金	1,000,000	1,000,000
債権	1,000,000	1,000,000
不動産	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000
合計	4,000,000	4,000,000

株式 御厨銀行 (沼津市上土町)

資本金 三百萬圓  
積立金 二百萬圓  
諸預り金 七十萬圓  
諸預り金 六十萬圓

當行は明治十六年九月の創立に係り行勢を重なること既に四十三年、八十六回の決算期を経て總資本三百萬圓、内二百萬圓の積立を以てよく六百餘萬圓の預金を有する地方銀行中の有力銀行の一つである。歐戰好況期以來業績に華がり大正十年既に四百九十餘萬圓の預金を有し六百五十餘萬圓の

株式 御厨銀行 營業成績表

負債ノ部	十二期	十三期
資本	3,000,000	3,000,000
積立金	2,000,000	2,000,000
預金	7,000,000	7,000,000
その他	6,000,000	6,000,000
合計	18,000,000	18,000,000
資産ノ部		
現金	1,000,000	1,000,000
債権	1,000,000	1,000,000
不動産	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000
合計	4,000,000	4,000,000

株式 濱松銀行 (濱松市西町)

資本金 三百萬圓(拂込済)  
積立金 十六萬五千圓  
諸預り金 四百四十萬圓

當行は明治二十八年七月を以て創立され漸次其の歩武を進めて戦前三十萬圓の資本は大正五年以來の好況期に於て逐次増資されて三百萬圓となり、現今には全額拂込済みの豊富な資本力を有するに至つたのである。試みに歐戰前後の業績の跡を見るに、大正二年末には二十四萬圓の積立資本を以て三十三萬二千圓の預金を有し五十五萬九千圓の貸出を示し、一萬二千餘圓の純益を挙げたに過ぎなかつたが、好況期に入ると漸次増資して十二末には三百十九萬圓の預金を

株式 濱松銀行 營業成績表

負債ノ部	十二期	十三期
資本	3,000,000	3,000,000
積立金	1,650,000	1,650,000
預金	4,400,000	4,400,000
その他	4,400,000	4,400,000
合計	13,450,000	13,450,000
資産ノ部		
現金	1,000,000	1,000,000
債権	1,000,000	1,000,000
不動産	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000
合計	4,000,000	4,000,000

株式 二俣銀行 (磐田郡二俣町)

資本金 百二十萬圓(拂込済)  
積立金 四十萬圓  
諸預り金 二百七十四萬圓

當行は明治十二年一月の創業、其の歴史に於て最古銀行である。大正五年資本金二十萬圓の株式組織に變更して以來時代の進歩に伴ひ漸次業況の發展を加へ大正九年百萬圓を増加して總額百二十萬圓の積立資本を以て今日に及ぶ。叙上ふを得ざれど、其の業績の確乎たる而して信用の絶大なる、随つて内容の充實してゐる點に於ては多く其の比を見ないであらう。最近十年間毎期一割の好配當を維持してゐる所以である。現今重役及び最近業績左の如し

株式 二俣銀行 營業成績表

負債ノ部	十二期	十三期
資本	1,200,000	1,200,000
積立金	4,000,000	4,000,000
預金	2,740,000	2,740,000
その他	2,740,000	2,740,000
合計	10,680,000	10,680,000
資産ノ部		
現金	1,000,000	1,000,000
債権	1,000,000	1,000,000
不動産	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000
合計	4,000,000	4,000,000









招入金及現金		内現金		其他共計		利益金勘定		前期繰越金		当期繰越金		合計	
招入金	1,266,300	現金	1,266,300	其他	1,266,300	利益金	1,266,300	前期繰越	1,266,300	当期繰越	1,266,300	合計	1,266,300
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...

**株式 第八十五銀行** (埼玉縣川越市)  
 資本金 三百萬圓  
 拂込資本 二百五十萬圓  
 諸積立金 百七十九萬圓  
 諸預り金 一千三十五萬圓

當行は其の沿革速く明治十一年に在り、即ち同年三月同日方の勢力家たる黒須喜兵衛氏等十餘名相謀り資本金二百萬圓を以て第八十五銀行を創立した。これぞ現今三百萬圓の資本金を有して一千三十餘萬圓の預金を算する同種の銀行である。是れより先、明治三十一年國立銀行特別處分條例に依り國立の名稱を廢さるゝに至るや積立金三十萬圓を資本金に組み入れ此處に五十萬圓の株式會社第八十五銀行を改稱して營業を繼承し、同年六月更に五十萬圓を増資して百萬圓とな

**株式 第八十五銀行營業成績比較表**

負債ノ部		資本金ノ部	
借入金	1,000,000	資本金	3,000,000
...	...	...	...
合計	1,000,000	合計	3,000,000

**株式 所澤銀行** (入間郡所澤町)  
 資本金 三百萬圓  
 諸積立金 五百五十七萬五千圓

當行は明治二十六年二月の創立で行跡二十三年を経過した古き歴史を有してゐる。歐戰前五十萬圓の資本金に過ぎなかつたが、戰時好況期に入るや百萬圓に増資し更に大正十年三百萬圓に増資して今日に至つたのである。現今百五十七萬五千圓の諸積立金を以て三百餘萬圓の預金を有し、二百八十餘萬圓の貸出しを行つてゐる。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 所澤銀行營業成績比較表**

負債ノ部		資本金ノ部	
借入金	1,000,000	資本金	3,000,000
...	...	...	...
合計	1,000,000	合計	3,000,000

**株式 深谷銀行** (大里郡深谷町)  
 資本金 三百萬圓  
 拂込額 百十二萬五千圓  
 總株數 六萬株(舊一萬株)

當行は明治二十九年五月に創立され、資本金三百萬圓、拂込額百十二萬五千圓、總株數六萬株(舊一萬株)を有する。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 飯能銀行** (入間郡飯能町)  
 資本金 二百萬圓  
 拂込額 八十七萬五千圓  
 總株數 四萬株(舊一萬株)

當行は明治三十四年六月に創立され、資本金二百萬圓、拂込額八十七萬五千圓、總株數四萬株(舊一萬株)を有する。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 秩父銀行** (秩父郡秩父町)  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 九十六萬圓  
 總株數 三萬株(舊二千株)

當行は明治三十二年三月に創立され、資本金百五十萬圓、拂込額九十六萬圓、總株數三萬株(舊二千株)を有する。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 忍商業銀行** (北埼玉縣麻町)  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 九十三萬一千圓  
 總株數 七萬五千株

當行は明治二十九年四月に創立され、資本金百五十萬圓、拂込額九十三萬一千圓、總株數七萬五千株を有する。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 埼玉農工銀行** (北埼玉縣麻町)  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 九十六萬圓  
 總株數 三萬株(舊二千株)

當行は明治三十一年三月に創立され、資本金百五十萬圓、拂込額九十六萬圓、總株數三萬株(舊二千株)を有する。營業狀況は一般財界不振の折柄なるが故に特に良好の成績を得られざれども、概して堅實

**株式 鴻巣銀行** (北足尾郡鴻巣町)  
 設立 大正五年八月  
 資本金 百 萬 圓  
 拂込額 五十七萬五千圓  
 總株數 二萬株(舊三千株)  
 重 役 (取締役)手島重兵衛、長島弘、築比地仲助、古山保(監査)玉井利吉、宮崎武治、久保田義郎、宮島梅

**株式 大宮商業銀行** (北足尾郡大宮町)  
 設立 明治三十一年三月  
 資本金 百 萬 圓  
 拂込額 四十九萬圓  
 總株數 一萬株(舊六千四百株)  
 重 役 (取締役)日比谷任次郎(取締役)日比谷平吉、野島宇兵衛、南塚正一、逸見貞一郎(監査)矢部俊治、加藤福藏、定塚門次郎

**株式 坂戸銀行** (入間郡坂戸町)  
 設立 明治十七年三月  
 資本金 百 萬 圓  
 拂込額 四十七萬七千圓  
 總株數 二萬株(舊六千株)  
 重 役 (取締役)安齋清衛、古川英、野野近三、中村敏吉、高山龜吉、平井廣三郎、神戸順世(監査)鈴木鶴平、鈴木敏治、齋藤政吉

**株式 西武銀行** (秩父郡秩父町大宮)  
 設立 明治二十九年九月  
 資本金 百 萬 圓  
 拂込額 四十七萬五千圓  
 總株數 二萬株(舊六千株)  
 重 役 (頭取)榊原定吉(常務)出牛左三郎(取締)宮前藤十郎井上重一郎(監査)齋藤輝之助、内田角之助、久喜文市郎(支配)濱田勝作

**株式 川越渡邊銀行** (川越市川越)  
 設立 大正二年八月  
 資本金 百 萬 圓

**株式 安房合同銀行** (千葉縣千葉町)  
 銀行合同の論議次第傳せらるゝ同時に、各地方に於て昔々之れが實現を見るに至り、相當多額の資本と多年の創業歴史とを有する有力銀行間に於ても亦漸く大資本主義の實行を見るに至つた。此の傾向は關東に於て殊に著しく、就中茨城、千葉兩縣に於て其の多きを見る、誠に慶すべき現象と云はばならぬ。當行は其の代表的合同の下に設立されたもので、即ち安房銀行三州州銀行の合同に依り、十四年五月資本金三百萬圓の同行を新設されたのである。安房は資本金百二十五萬圓、拂込額四十一萬圓、明治二十九年三月の創立、三州は百十萬圓、内三十三萬一千二百五十圓の拂込で明治三十三年七月の設立(此即大正十一年十一月安房金融會社(資本金一千萬圓)を合併した)何れも古き歴史を有する同時に確乎たる業績を有し、業績亦見るべきものあつた銀行である。試みに合併前、即ち十四年上半期末に於ける三州銀行の業績を瞥見するに其の主要科目に於て左の如き數字を示して見る。(單位千圓)

諸預り金	四、九〇九
諸積立金	五、四
諸貸出金	四、二二八
有價証券	一、六五
預金現金	七、六五
純利益金	一、七
配當率	年一割

以上の成績は之れを中央市中銀行に比すれば九年の一毛にも如かないのであるが、地方銀行としては相當なる成績を稱すべきで、他方安房銀行亦これに優るの業績を有し、此の兩者が合同の力を以てするのだから、將來必ずや縣下代表的銀行たるに至るべきを疑はぬのである。現在資本金三百萬圓である。

**株式 第九十八銀行** (本店千葉市千葉)  
 資本金 百三十萬圓  
 拂込資本 五十萬八千圓  
 諸積立金 二十二萬二千圓  
 諸預り金 一千四百萬圓

**沿革** 當行は第九十八銀行として明治十一年六月設立されたもので、縣下最古の銀行である。夙に安房王國の有力に歸し其の起たる資本力の下に經營するに至つて以來世人の信用に堪はり、預金の如きも一千四十餘萬圓を有するに至り、其の起たる資本力の下に經營するに至つて以來

行として一般に信用されてゐる。一言商業、長年商業、花房等の諸銀行を合併し且に縣下に合同の先鞭を付けた歴史を有し業績益々隆々たるものがある。理事役員及最近業績左の如し  
 取締役頭取 安田善兵衛 取締 役 宮重半次郎  
 取締役 林 耕作 同業支配人 糸賀 庄造  
 監査役 奥山 良吉 監査役 栗原 久作  
 顧問 安田善次郎

**株式 總武銀行** (千葉市千葉)  
 資本金 二百二萬圓  
 拂込資本 八十七萬三千圓  
 諸積立金 二十 萬圓  
 諸預り金 九百三十七萬圓

十四年上期  
 資本金 一、三〇〇、〇〇〇  
 諸預り金 一、〇、四三、四八七  
 公金預金 一、八五、四八一  
 特別當座預金 一、五三、七九六  
 定期預金 四、〇五、七五九  
 通知預金 四、四四、三三三  
 其他預金 一、三、八八〇  
 他店ヨリ借 四、五八、八三六  
 未拂利息及未經過引料 一、六、二五三八  
 未拂配當 一、二、八一  
 前期繰越金 九、一九、七七一  
 前期繰越金 一、三、一、四九五  
 當期繰越金 一、六、七、二五  
 爲替及未過勘定 一、六七、三三七  
 假受勘定 一、二、八、一七二  
 合計 二、八、一、七二八

十四年上期  
 資本金 七九、〇〇〇  
 拂込未済資本金 九、四一、〇二二  
 諸貸出金 二、六三、四二五  
 證券貸付 一、一九、一九七  
 手形貸付 一、一三、三九九  
 當座預金貸越 一、五、一、一五五  
 割引手形 一、四、八、四四五  
 荷付爲替手形 一、四、八、四四五

**株式 總武銀行 營業成績比較表**  
 十四年上期  
 取捨社長 萩原 謙三 常務取締役 藤 井 精  
 取締役 田邊 卓爾 取締役 吉田 丹次郎  
 渡邊 喜三郎 同 宇治 田 精一  
 飯田 佐次兵衛 同 浦上 其一郎  
 岩井 重兵衛 同 五十嵐 重雄  
 塚口 慶三郎 同 菅澤 重雄  
 同 長谷川 松兵衛 同 監査役 平山 清助  
 湯淺 鈞治

當行は明治二十九年二月の創業にして千葉縣下に於ける最も有力なる銀行として世人の信用を博してゐる。大正十二年一月或る銀行を合併し五十萬圓を増資して現今二百二萬圓八十七萬三千二百七十五圓の拂込である。營業成績比較的良好にして十二年下期には九百三十七萬六千餘圓の預金を有し八百七十六萬四千餘圓の貸出を行ひ堅實なる營業方針を取りながら地方産業界の爲めに盡す感甚だしい。理事役員は左の諸氏である。

資本金	一、三〇〇、〇〇〇	下十二期年	一、三〇〇、〇〇〇	下十三期年	一、三〇〇、〇〇〇
諸預り金	一、〇、四三、四八七	下十二期年	一、〇、四三、四八七	下十三期年	一、〇、四三、四八七
公金預金	一、八五、四八一	下十二期年	一、八五、四八一	下十三期年	一、八五、四八一
特別當座預金	一、五三、七九六	下十二期年	一、五三、七九六	下十三期年	一、五三、七九六
定期預金	四、〇五、七五九	下十二期年	四、〇五、七五九	下十三期年	四、〇五、七五九
通知預金	四、四四、三三三	下十二期年	四、四四、三三三	下十三期年	四、四四、三三三
其他預金	一、三、八八〇	下十二期年	一、三、八八〇	下十三期年	一、三、八八〇
他店ヨリ借	四、五八、八三六	下十二期年	四、五八、八三六	下十三期年	四、五八、八三六
未拂利息及未經過引料	一、六、二五三八	下十二期年	一、六、二五三八	下十三期年	一、六、二五三八
未拂配當	一、二、八一	下十二期年	一、二、八一	下十三期年	一、二、八一
前期繰越金	九、一九、七七一	下十二期年	九、一九、七七一	下十三期年	九、一九、七七一
前期繰越金	一、三、一、四九五	下十二期年	一、三、一、四九五	下十三期年	一、三、一、四九五
當期繰越金	一、六、七、二五	下十二期年	一、六、七、二五	下十三期年	一、六、七、二五
爲替及未過勘定	一、六七、三三七	下十二期年	一、六七、三三七	下十三期年	一、六七、三三七
假受勘定	一、二、八、一七二	下十二期年	一、二、八、一七二	下十三期年	一、二、八、一七二
合計	二、八、一、七二八	下十二期年	二、八、一、七二八	下十三期年	二、八、一、七二八

資本金	七九、〇〇〇	下十二期年	七九、〇〇〇	下十三期年	七九、〇〇〇
拂込未済資本金	九、四一、〇二二	下十二期年	九、四一、〇二二	下十三期年	九、四一、〇二二
諸貸出金	二、六三、四二五	下十二期年	二、六三、四二五	下十三期年	二、六三、四二五
證券貸付	一、一九、一九七	下十二期年	一、一九、一九七	下十三期年	一、一九、一九七
手形貸付	一、一三、三九九	下十二期年	一、一三、三九九	下十三期年	一、一三、三九九
當座預金貸越	一、五、一、一五五	下十二期年	一、五、一、一五五	下十三期年	一、五、一、一五五
割引手形	一、四、八、四四五	下十二期年	一、四、八、四四五	下十三期年	一、四、八、四四五
荷付爲替手形	一、四、八、四四五	下十二期年	一、四、八、四四五	下十三期年	一、四、八、四四五
其他	一、四、八、四四五	下十二期年	一、四、八、四四五	下十三期年	一、四、八、四四五
未拂利息及未經過引料	一、六、二五三八	下十二期年	一、六、二五三八	下十三期年	一、六、二五三八
未拂配當	一、二、八一	下十二期年	一、二、八一	下十三期年	一、二、八一
前期繰越金	九、一九、七七一	下十二期年	九、一九、七七一	下十三期年	九、一九、七七一
前期繰越金	一、三、一、四九五	下十二期年	一、三、一、四九五	下十三期年	一、三、一、四九五
當期繰越金	一、六、七、二五	下十二期年	一、六、七、二五	下十三期年	一、六、七、二五
爲替及未過勘定	一、六七、三三七	下十二期年	一、六七、三三七	下十三期年	一、六七、三三七
假受勘定	一、二、八、一七二	下十二期年	一、二、八、一七二	下十三期年	一、二、八、一七二
合計	二、八、一、七二八	下十二期年	二、八、一、七二八	下十三期年	二、八、一、七二八



**株式 常磐銀行** (本市上市許可)

資本金 八百五十二萬圓  
 拂込資本 四百六十九萬五千圓  
 諸積立金 七十萬圓  
 諸預り金 一千七百萬圓

當行は明治三十一年十月の創業にして五十銀行と共に縣下の双壁を以て絶大の信用を博し、同行を中心とする合同者々々進められ、其の資本力は益々大を加へつゝある。即ち大正十一年七月下旬商業を合併し百二十萬圓を増資せるを始め

**株式 常磐銀行 營業成績比較表**

項目	十二年		十三年	
	期	期	期	期
資本金	852,000	852,000	852,000	852,000
拂込資本	469,500	469,500	469,500	469,500
諸積立金	70,000	70,000	70,000	70,000
諸預り金	1,700,000	1,700,000	1,700,000	1,700,000
負債ノ部				
未償還資本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸積立金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸預り金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
負債ノ部	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未償還資本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸積立金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸預り金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
負債ノ部	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
未償還資本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸積立金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
諸預り金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
その他	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000

し、十二年五月には水街銀行を合併して七十二萬圓を増加し、更に十四年六月には磯原(百圓)浦農商(七十五萬圓)風洞(五十萬圓)の三行を合併し現在資本額八百五十二萬圓の大資本を有し縣下第一の資本力を有するに至つた。而して一千七百餘萬圓の預金を有し、三十餘萬圓の純益を計上し、一割の株主配當を保持する堅實なる銀行にして更に川崎家を併せし、更に一般の信用額も強大なものがある。現東役は江幡新、吉見輝、秋山誠明、杉浦甲子郎、高橋博司、長谷繁、間々田忠助、荒川爲吉、中澤清八、三宅亮一、大森卯之太郎、秋山藤左衛門、室田義文、川崎友之介、山中彦兵衛の諸氏であり、更に支配人として八木信成氏等何れも地方有力なる代表的人物揃ひである。

**株式 茨城農工銀行** (本市上市許可)

設立 明治三十一年四月  
 資本金 三百萬圓  
 拂込額 二百二十五萬圓  
 總株數 十五萬株(舊十萬株)  
 重役 (取締)中澤清八、山中彦兵衛、沼尻權次郎、櫻井平兵衛(監査)曾山徳之助、高橋煥一郎、柴孫次郎

**株式 茨城貯蓄銀行** (本市上市許可)

設立 大正十年十一月  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 五十萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (取締)沼尻權次郎、大澤義一、岡本義兵衛、中尾誠之助、山中彦兵衛、間々田忠助、櫻井平兵衛(監査)野内照三、小宮山正平、北村國松、菊地八次郎(支配)大森正

**株式 多賀銀行** (多賀郡松原町)

設立 明治二十三年四月  
 資本金 百二十五萬圓  
 拂込額 七十五萬圓  
 總株數 二萬五千株(舊五千株)  
 重役 (取締)藤村武、大澤義一、宮田康、小峯滿男、近藤忠平(監査)長山佐七、海野三四郎、城戸龜八

**12、宮城縣總論**

由來東北の地は渺茫たる海洋に面し重疊たる山岳を背し更に廣袤幾百里の沃野を展開し、爲に山海の天産極めて豊富なるに拘らず交通機關の缺如せるが爲に久しく世に知られなかつたのであるが、爾來東北開拓振興の聲高きに伴ひ漸次發展せられて各方面連絡の鐵道布設され、今や四通八達、各種事業勃興し殊に歐戰以後に於て著しく其の經濟的價値は日に面目一新して其前途を有見せらるゝに至つた。關於て金

**株式 七十七銀行** (仙臺市大町)

資本金 五百萬圓  
 拂込資本 二百三十七萬五千圓  
 諸積立金 百萬圓  
 諸預り金 二千五百五十萬圓

**株式 東北實業銀行** (仙臺市名掛町)

資本金 七百五十萬圓  
 拂込資本 四百十二萬五千圓  
 諸積立金 八十七萬九千圓  
 諸預り金 一千五百十五萬圓

東北地方に於て二を争ふ高額の預金を有し仙臺市を本據として常に雄飛一貫せる主義の下に堅實なる營業振りを以て産業界の爲に偉大なる貢獻を致せる同行は明治十一年四月、第七十七銀行として創立され古き歴史を有し、而して創設と同時に第四十六銀行を合併し資本金二百五十萬圓を以て同年十二月七日から營業を開始するに至つた。當時の頭取は氏家厚時氏であつたが、其の創立に際しては當時東京の第一銀行頭取たりし藤澤榮一氏の指導援助に依つ所甚だ多かつた。其の背景とする信用も加はり業績の上に良好の結果を齎したのである。此の故に開業後幾年なくして縣公金出納及び國庫金出納を命ぜらるゝ等信用厚かつた。此くして明治二十年七月には資本金を倍額の五百萬圓とし、一層業務の擴充を圖り、二十九年國立營業滿期前特別處分法の發布を見たので、翌三十年十月私立銀行として其の營業を繼續し、三十一年三月から株式會社七十七銀行と名稱を改め同時に資本金百萬圓を増加して總額五百五十萬圓としたのであるが、偶々經濟界の變調等因つて減資の上行務の一大整理を斷行せなければならぬ境遇に達した爲めに資本金七十五萬圓に半減し、重役の改選を行つて業務の一大刷新を圖るの已むなきに至つた。此の間に、爾來同行の信用は額を回復して營業狀態の面目を改め大正六年に及んで經濟界の活況は更に増資の必要を劇致し益に再び資本金百五十萬圓とした。而かも競々として業務發展し、大正八年九月には更に三百五十萬圓を増加して一層五百萬圓とする事を議決し、株式募集を

沿率及資本の移動 宮城縣總論に於て概述した如く同縣下の産業振は、金融機關甚だ不備の感あつた明治末葉の頃にして、其の振興を策し以て健全なる發展を誘導するの使命を帯びて明治四十三年六月資本金五十萬圓を以て設立されたもの、即ち東北實業銀行である。當時創立發起人として八方奔走の勞を盡したるは現頭取大塚氏三郎、佐々木重兵衛氏等を始め各重役諸氏並に仙臺市を中心とする縣下各方面の代表的人士多數其の理想とする處は何れも東北地方の開発振興に在つたこと勿論である。此の意味に於て設立當初は本店を縣下重要な地たる涌谷町に設け各重要地に支店を置き、主として農産方面の活躍を完全ならしむ一方、更に仙臺に於ては商工方面の隆興を策し兩相俟つて縣下産業の振作に資する處頗る多かつたのである。越つて四十四年二月事業の發展するに伴ひ之れに順應すべく本店を仙臺市に移し四十五年には市金庫たるの榮譽を與へられ、經營方針の堅實なりしと相俟つて業績隆々として舉がり、基礎全く鞏固なるに至つた。斯くて歐戰好況期に際するや活潑の資源をなすべく大正六年資本金百萬圓に増資し爾來最も堅實なる方針を以て進み現今に及んだのである。今や二十五個所の支店三十三個所の出張所及代理店を設け、預金一千五百餘萬圓の多きを算し名實共に縣下唯一の代表的銀行として東北の天地に聳立するの隆盛振りを贏ち得るに至つたのである。

**歐戰前後の業績** 而して同行が其の過去に於て如何なる増進率を以て今日の形大を爲すに至つたかを温めるべく之れを歐戰前後の業績に徴するに概要左の如き數字を示し得る

年次	公稱	拂込	積立	預り金
二年下	1,000,000	500,000	100,000	1,100,000
八年下	1,500,000	1,000,000	800,000	1,600,000

十二年下 七、五〇〇 六、八〇〇 二、七〇〇  
 十三年下 七、五〇〇 六、八〇〇 二、七〇〇  
 十四年上 七、五〇〇 六、八〇〇 二、七〇〇  
 即ち資本力に於て戦前大正二年末の五十萬圓は現今七百五十萬圓に増進して十五倍の増加あり、預金に於ても百萬圓前後のもの十五倍の一千五百萬圓に増進して、更に運用方面の成績如何を見るに

運用状態

年次	貸出	有價証券	預金現金
十二年	一、二六六	一、三〇〇	一、三〇〇
十三年	一、八七五	一、七〇〇	一、七〇〇
十四年	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

右表の示す如く貸出に於ても將又有價証券に於ても何れも急激に増加し、如何に業況の艱難であつたかを知るに同時に、其の預金に對する運用の比率が常に九〇%以下に置かれてあつた事は即ち營業政策の堅實主義なりし事を立證するものである。而も有價証券は支拂準備の第一種に立つもののみを運用するに止るに止らば、其の支拂責任の準備が如何に完全であるかを知るに十分である。況んや多額の預金

株式会社 東北實業銀行 營業成績比較表

負債ノ部	運用状態		
	第十二期	第十三期	第十四期
資本	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇
公積金	二、〇〇〇,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇
預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
定期預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
通知預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
他種預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
借入金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
未償還割引料	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
未償還利息	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
前期繰越金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
其他共合計	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇
資産ノ部	運用状態		
	第十二期	第十三期	第十四期
未償還資本	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇
貸出	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
有價証券	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
手形貸付	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
當座預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
割引手形	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
荷付爲替手形	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
コールドローン	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
他種貸付	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
所有有價証券	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
営業用土地建物什器	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
所有不動産	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
現金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
其他共合計	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇

株式会社 宮城商業銀行 (仙台市大町)  
 資本金 二百萬圓  
 拂込資本 五十九萬七千圓  
 諸積立金 一千二百五十萬圓

行業者の發達を著しく促進せしめねばならず、宮城商業銀行亦實に此の機運に乗じて進歩を遂げて進歩し今や春帆航走の境地に入つたのである。明治二十七年日清戦役後一般經濟界の發達に伴ひ、地方商工業の勃興は金融機關として適當なる銀行の必要を促し、茲に於てか同廿九年八月松島縣外四十七名發起人となり即ち同銀行の創立を企圖し、翌三十年四月創立總會を開き、資本金五十萬圓(拂込資本十萬圓)を以て同年七月營業を開始するに至つたのである。當時役員は佐野、小野、高橋、飯沼、佐藤、佐藤、千島、八郎、

然るに、戦時支拂の困難、更に、戦時支拂の困難であつて、専ら當分の目的に於ては、戦時支拂の結果、業務大に其の困難を告ぐるに至り、四十二年十二月現業業務に移轉するに至つた。此の間各地に支店出張所を設くるに、三ヶ所、移轉後一ヶ所、更に、資本金五十萬圓拂込を充てしめて、尙ほ便宜に通達せらるゝに、四十五年一月百五十萬圓を増加して二百萬圓となし、更に大正九年春増資計畫を遂げたれども、世界四圍の情勢漸く反動期に際し、不況の色彩を呈し、其の推移の程を豫測するに、能はずして、これを中止して同年の下半年に於て資本金全面拂込を執行したのである。而して戰後以來の業績如何を見るに、是を次の如く表示し得る。(單位千圓)

株式 宮城商業銀行 營業成績比較表

年次	第五十五期	第五十六期
公積資本	二、〇〇〇	二、〇〇〇
公積金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積預金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積定期預金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積通知預金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積他種預金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積借入金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積未償還割引料	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積未償還利息	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積前期繰越金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
公積其他共合計	一、〇〇〇	一、〇〇〇
未償還資本	七、五〇〇	七、五〇〇
貸出	一、〇〇〇	一、〇〇〇
有價証券	一、〇〇〇	一、〇〇〇
手形貸付	一、〇〇〇	一、〇〇〇
當座預金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
割引手形	一、〇〇〇	一、〇〇〇
荷付爲替手形	一、〇〇〇	一、〇〇〇
コールドローン	一、〇〇〇	一、〇〇〇
他種貸付	一、〇〇〇	一、〇〇〇
所有有價証券	一、〇〇〇	一、〇〇〇
営業用土地建物什器	一、〇〇〇	一、〇〇〇
所有不動産	一、〇〇〇	一、〇〇〇
現金	一、〇〇〇	一、〇〇〇
其他共合計	一、〇〇〇	一、〇〇〇

負債ノ部	第五十五期		第五十六期	
	下十三年	上十四年	下十三年	上十四年
資本	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇
公積金	二、〇〇〇,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇
預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
定期預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
通知預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
他種預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
借入金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
未償還割引料	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
未償還利息	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
前期繰越金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
其他共合計	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇
資産ノ部	第五十五期		第五十六期	
	下十三年	上十四年	下十三年	上十四年
未償還資本	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇	七、五〇〇,〇〇〇
貸出	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
有價証券	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
手形貸付	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
當座預金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
割引手形	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
荷付爲替手形	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
コールドローン	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
他種貸付	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
所有有價証券	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
営業用土地建物什器	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
所有不動産	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
現金	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇	一、〇〇〇,〇〇〇
其他共合計	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇	三、七〇〇,〇〇〇

株式会社 五城銀行 (仙台市大町一七三)

設立 明治二十六年六月  
 資本金 四百五十萬圓  
 拂込額 百三十萬圓  
 總株數 九萬株 (舊千株新八千株二十五萬圓換算)  
 重役 (頭取) 伊澤平左衛門 (取締役) 山田善三郎、乃川中子郎、大泉海治郎、白崎五郎七、伊藤清次郎、横山勤助、三浦忠作、阿部勘九郎、細谷誠治、熊谷直行、小野忠助、山田周吉、山田久右衛門、鈴木重兵衛。

株式会社 宮城縣農工銀行 (仙台市東二番丁)

設立 明治三十一年四月  
 資本金 三百萬圓  
 拂込額 拂込 濟  
 總株數 十五萬株  
 重役 (頭取) 花々木兼介 (取締役) 藤田十郎、安

住仁次郎、佐藤八郎、武田吉平(同支配)坂本龍之介、岩瀬基平(監査)鈴木富太郎、早川一

白石商業銀行

設立 明治二十九年十二月
資本金 百 萬 圓
拂込額 四十 萬 圓
諸積立金 一萬株(舊二十株)

重役 (頭取)渡邊佐吉(取締役)渡邊儀藏、渡邊彦四郎、渡邊貞一(同支配)渡邊貞吉(監査)渡邊又四郎、鈴木富藏(支配)小室勇治

仙臺興業銀行

設立 明治三十二年三月
資本金 百 萬 圓
拂込額 三十二萬五千圓
諸積立金 百二十二萬圓

重役 (事務)湯村保治(取締役)三品長直、氏家清吉(監査)近藤甲、松谷兵衛

13、福島縣ノ部

株式福島農工銀行

資本金 四百 萬 圓
拂込資本 三百五十萬圓
債券發行高 六百四十六萬圓
諸積立金 百七十二萬圓
諸預り金 二百七十萬圓

明治三十一年三月の創立、地方農工銀行中成績良好の銀行である。殊に近年著しく發達せる同縣下産業界の爲めに寄與する事極めて多大にして其の大部分は同行の力に俟つものも稱するも過言でない、産業資金供給の爲には極力範圍を擴大して其の需要に應じ一方貸出の整理にも意を用いて不良貸付を淘汰し業績の良好に努めてゐる。試みに十四年上半期間に於て九十八萬圓の農工債券を發行してゐる點に徴するも其の營業内容の如何に繁忙であつたかを知らしめてあらう。現任重役は左の諸氏で何れも縣下屈指の重要人物である。
取締役頭取 白井博之 取締役 田代與三久
取締役 小林吉吉 同 松本島之助
取締役 八田宗吉 監査役 島貫平助
同 寶藤龜作

株式福島農工銀行營業成績比較表

Table with 4 columns: 第五十三期, 第五十四期, 第五十五期, 第五十七期. Rows include 負債ノ部 (資本金, 借入金, etc.), 資産ノ部 (現金, 預金, etc.), and 其他 共 合計.

株式第七銀行

資本金 五百五十萬圓
拂込資本 二百八十七萬五千圓
諸積立金 百七十八萬圓
諸預り金 一千二百七十四萬圓

生糸の産地として有名である福島縣は、機業資金の移動頻繁である處から自然金融界の繁栄を來し、隨つて亦其の機關たる銀行業の隆興せる事も自明の理である。就中物質の集散地たり商業の中心地たる福島市に於て最も優れたること亦勿論である。第七銀行は即ち福島市の代表的銀行であると同時に縣下唯一の大銀行として其の地位を具してゐる。同行の沿革を述べれば其の歴史は實に明治七年の古きに在る。即ち合併し五十萬圓を増加して現今に及んだのである。其の營業方針は世人の信用を博し現に福島縣を以て本據とし、日本勸業銀行、興業銀行等の代理事務を取扱ひ業績もたつたのである。現重役は左の諸氏で吉野頭取は前述の如く創設者の三代目として縣下屈指の名望家であり多數銀行會社重役の任にあり財界の重鎮である。小林頭取亦地方の名士であり内池相取は吉野氏と共に創立に參與した功勞者、角田取締役亦其一入たる角田兵衛氏の門であり其他各重役何れも地方有数の人物揃ひである。
取締役頭取 吉野周太郎 取締役副頭取 小林 富吉
取締役 角田文平 取締役 齋藤 利助
同 田代與三久 監査役 佐藤 傳兵衛
同 相 池田 謙藏 同 菊池 右和司

株式第七銀行營業成績比較表

Table with 4 columns: 第五十期, 第五十四期, 第五十五期, 第五十七期. Rows include 負債ノ部 (資本金, 借入金, etc.), 資産ノ部 (現金, 預金, etc.), and 其他 共 合計.

株式三春銀行

資本金 百 萬 圓
拂込資本 三十八萬五千圓
諸積立金 十六萬四千圓
諸預り金 四十萬七千圓

當行は明治三十年七月の創業にして爾來堅實主義を唯一の信條とし、地方銀行としては其の推稱に値する營業振りを以て漸次内容の充實を圖りて今日に至つたのである。殊に僻地の一小郡に於て三春町に雖も常日國家産業の隆興に意を用ひ、地方産業資金の供給に努めて其の圓滿なる發達を助成せしめ、特に之れを實踐せなければならぬ。就中近年同地方稀有の農村振興時に際して機宜の措置を取り其の回復に努力した効果は多大であつた。斯くの如く近時四圍の經濟的伸力全く減殺され隨つて貸付回收遲延、收入

利子其他に影響する處多かつたにも拘らず、其の業績は可成り良好の結果を挙げ、毎期年八分の株主配當を持續してゐる如きは内容の充實してゐる事實を立證するに同時に、如何に經營的手腕家の重役に當んでゐるかを推知し得るのであらう。現重役は左の諸氏で何れも地方に於ける有力者揃ひであり信用絶大の士のみである。殊に渡邊一門、大越一門等は有数の名望家であり、大越支配人の如きは實務に精通せる點に於て經營手腕の卓越せる點に於て、大都市の銀行重役に比するも敢て遜色なき過材である。同行の前途必ずや見るべき機運を試むるのであらう。
頭取 渡邊 平助 取締役 渡邊 英一
取締役 大越 巳木藏 同 川又 四郎
同 石井 儀助 同 内藤 傳之助
同 同業支配人 大越 富松 監査役 佐藤 國藏
同 同業支配人 小泉 與七

株式三春銀行營業成績比較表

項目	第五十五期		第五十六期	
	下三	上四	下三	上四
實收資本	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
準備金	150,000	150,000	150,000	150,000
公積金	100,000	100,000	100,000	100,000
特別準備金	50,000	50,000	50,000	50,000
定期預金	3,000,000	3,000,000	3,000,000	3,000,000
通知預金	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
活期預金	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000
貸出金	4,000,000	4,000,000	4,000,000	4,000,000
其他	100,000	100,000	100,000	100,000
合計	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000

株式會津銀行 (若松市大町一丁目)

設立 明治二十九年四月  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 七十五萬圓  
 總株數 三萬株(舊一萬二千株)  
 重役 (專務) 谷半兵衛(取締役) 石堂留吉、小澤平八、福西伊兵衛、葛岡庄兵衛(同支配) 太田晃(監査) 大須賀豊吉、白井泰三、河野善九郎

株式第百一銀行 (伊達郡津川町)

設立 明治十一年九月  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 六十三萬五千圓  
 總株數 二萬一千株(舊四千四百株)  
 重役 (頭取) 大竹宗兵衛(取締役) 中村佐平治、齋藤宇三郎、菅野五郎治、中木直右衛門、齋藤勇藏、池田利七(監査) 中木孝平、桃井與五右衛門、佐藤甚右衛門(支配) 大友勇藏

株式郡山橋本銀行 (安達郡郡山町大町)

設立 明治二十九年六月  
 資本金 百四十萬圓(拂込済)  
 儲蓄立金 十四萬五千圓  
 諸預り金 四百五十萬圓

株式信達銀行 (伊達郡保原町八ノ四)

設立 大正九年二月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 四十四萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (頭取) 佐藤權右衛門(專務) 富田保次郎(常務) 佐藤佐輔(監査) 福田水治、阿部平次郎、大内匠、佐藤直右衛門(支配) 菅野廣介

株式本宮銀行 (安達郡本宮町)

設立 明治二十五年六月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 四十萬圓  
 總株數 二萬株(舊四千株)  
 重役 (取替) 原田半次郎、渡邊貞藏、伊藤善造、伊藤誠、小松茂徳治(監査) 菅野平助、遠藤貞藏、小松四年大(支配) 遊佐丑松

株式山八銀行 (福島市福島中町二六)

設立 大正七年七月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 四十萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (取替) 角田文平、角田平兵衛、角田三郎、角田專治、田中五六(監査) 齋藤利助、熊坂利助、田口辰造

株式岩瀬興業銀行 (伊達郡須賀川町)

設立 大正九年八月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 四十萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (取替) 小橋小太郎(取替) 吉田武七、熊田受作、吉川彌市、佐藤彌重、岡谷庄七、柳沼彌輔、佐藤修一、相澤源次郎、渡邊半藏(監査) 小濱久太郎、鈴木熊次郎、石堂榮之助、鈴木勝吉、森芳藏、五十嵐末重、鈴木秀助

株式福島商業銀行 (福島市本町二六)

設立 明治三十九年六月  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 七十五萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (頭取) 鈴木周三郎(專務) 菅野半(取替) 油井徳藏(監査) 武藏茂平、三浦徳次郎、大島要三(支配) 堀江九郎(副支配) 菊地準人、大石儀作

株式安達實業銀行 (安達郡二本松町)

設立 明治三十一年五月  
 資本金 百五十萬圓  
 拂込額 五十八萬三千五百一十一圓  
 總株數 二萬株(舊三千五百株)  
 重役 (頭取) 本間忠(專務) 今泉宗介(常務) 藤原禮右衛門(取締役) 田倉孝雄、鈴木久次郎、野地菊司、服部喜久司、菅野直吉(監査) 藤井徳次郎、松阪庄八、山田一(支配) 伊藤徳徳、高橋榮

株式福島銀行 (福島市四町)

設立 明治十三年五月  
 資本金 百四十萬圓

株式白川商業銀行 (西白河郡白河町)

設立 明治三十三年九月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 三十六萬二千五百圓  
 總株數 二萬株(舊三千株)  
 重役 (頭取) 服部宗次郎(專務) 藤田佐兵衛(取替) 大木九兵衛、佐久間平三郎、藤田彌五兵衛(監査) 安田平助、野澤豊之助、林勝之助

株式郡山銀行 (安達郡郡山町中町)

設立 明治二十八年三月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 三十二萬五千圓  
 總株數 二萬株(舊二千株)  
 重役 (取替) 小松茂徳治(取替) 渡邊貞藏、橋本萬右衛門、根本祐太郎、高橋甚右衛門(監査) 遠藤貞藏、津野徳四郎、渡邊善吉、原田半次郎(支配) 大島正

株式福島貯蓄銀行 (福島市大町)

設立 大正七年八月  
 資本金 百二十五萬圓  
 拂込額 二十五萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (取替) 吉野周太郎、草野半、齋藤利助、白井博之、本間忠、角田文平(同支配) 池石徳藏(監査) 佐久間善左衛門、阿部和水吉、山崎與三郎

株式郡山商業銀行 (安達郡郡山町本町)

設立 大正九年六月  
 資本金 百四十萬圓  
 拂込額 二十五萬圓  
 總株數 二萬株  
 重役 (頭取) 佐藤修兵衛(常務) 佐藤安二(取替) 佐藤茂平、佐藤修吉(監査) 高田廣吉、阿部茂吉(支配) 沼田實

14、巖手縣ノ部

株式盛岡銀行 (盛岡市東町)

設立 明治十三年五月  
 資本金 七百五十萬圓  
 拂込資本 四百二十五萬圓





株式岩手銀行營業成績比較表

Table showing financial performance of Iwate Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式三陸銀行營業成績比較表

Table showing financial performance of Sanriku Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

當行は明治三十三年十二月の創立備案財界の推移に順應して諸般の施設宜しきを得たる結果、地方銀行としては著しき内容の充實振りを示し漸次資本を増加し業績亦良好の度を加

株式三陸銀行營業成績比較表

Table showing financial performance of Sanriku Bank for 1924 and 1925. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式巖手縣農工銀行

Table showing financial performance of Iwate Prefecture Agricultural and Industrial Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式氣仙銀行

Table showing financial performance of Kesen Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式宮古銀行

Table showing financial performance of Miyako Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式花巻銀行

Table showing financial performance of Hanabishi Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式第五十九銀行

Table showing financial performance of Bank No. 59 for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式第五十九銀行營業成績比較表

Table showing financial performance of Bank No. 59 for 1924 and 1925. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式盛岡貯蓄銀行

Table showing financial performance of Morioka Savings Bank for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

15、青森縣ノ部

Table showing financial performance of Aomori Prefecture section for 1922 and 1923. Columns include assets (資本金, 準備金, 貸付金), liabilities (負債), and other items. Values are in Japanese Yen.

株式第五十九銀行

當行は明治十二年一月創立第五十九銀行として創立せられ同三十年満期と同時に組織を變更して株式會社第五十九銀行を設立し其の業務一切を繼承したものである。爾來財界の起



株式第四十八銀行營業成績比較表

Table showing financial performance for the 48th Bank, comparing 1922 and 1923 across various asset and liability categories.

株式羽後銀行 (平鹿郡野田町)

資本金 二百萬圓
諸積立金 十七萬圓
諸預り金 二百八十萬圓

當行は明治二十八年二月の創業、歐戰前五十萬圓の資本金に過ぎなかつたが、爾來急激なる財界の膨脹に順應すべく、

株式羽後銀行營業成績比較表

Table showing financial performance for the Bank of Edo, comparing 1922 and 1923 across various asset and liability categories.

株式仙北銀行 (奥北郡大曲町中町)

設立 明治二十七年五月
資本金 百萬圓

株式秋田貯蓄銀行 (秋田市本町五ノ五八)

設立 大正十年十一月
資本金 百萬圓
諸積立金 九十四萬三千圓
諸預り金 一千八百二十萬圓

17、山形縣總論

由來山形縣は福島縣と共に東北方面に於ける天惠の産業地である。即ち山野四方に開けて水運の便よく、或は製糸織物に、或は農産物の收穫等頗る多く其經濟的價值は極めて優位を占めてゐるのである。

株式兩羽銀行 (山形市七日町)

資本金 五百萬圓
諸積立金 三百七十萬圓
諸預り金 九十四萬三千圓

沿革及資本の移動 兩羽銀行の名稱あるに至りしは明治二十九年四月以降に居すれども其の沿革は尙ほ古く、明治十一年に遡らねばならぬ。

歐戰以來の業績

歐戰は云ふ迄もなく我國の經濟單位を急激に暴上した。金融界に於ける異動亦頗る目覺しいものあつた事勿論である。試みに同行の業績を戰前戦後及び最近の各期末現在に從ひ比較研究して見るべき。

現任重役

- List of current officers including Chairman, President, and various directors and supervisors.

兩羽銀行營業成績比較表

Table with 4 columns: 第五十六期, 第五十八期, 第五十九期, 第六十期. Rows include 負債ノ部 (Capital, Reserves, etc.) and 資産ノ部 (Assets, Loans, etc.).

（表）風間吉郎右衛門、三矢正敏

株式 鶴岡銀行 (山形縣鶴岡市)

設立 明治三十一年二月
資本金 二百萬圓
拂込額 九十五萬圓

株式 山形商業銀行 (山形市十日町)

設立 明治二十九年七月
資本金 百五十萬圓
拂込額 七十五萬圓

株式 六十七銀行 (山形縣鶴岡市)

設立 明治十一年九月
資本金 百萬圓
拂込額 五十萬圓

株式 楯岡銀行 (北村山形縣鶴岡町)

設立 明治三十年一月
資本金 百萬圓
拂込額 四十萬圓

株式 山形貯蓄銀行 (山形市七日町東側)

設立 大正十年十一月
資本金 百五十萬圓
拂込額 二十五萬圓

株式 東銀行 (岩手縣宮内村)

設立 明治三十三年六月
資本金 百萬圓
拂込額 五十八萬圓

株式 羽前長崎銀行 (東村山形縣長崎町)

設立 明治三十年七月
資本金 百萬圓
拂込額 四十三萬七千五百圓

株式 足利銀行 (足利市三丁目)

資本金 六百萬圓
拂込資本 三百九十萬圓
諸積立金 百二十五萬圓
諸預り金 二千六百八十萬圓

18、栃木縣總論

單に織物製造地としてのみならず諸般の産業的施設に於て本邦有数の稱ある本縣には必然的要求として金融機關の發達を來せる事決して偶然の結果ではないのである。